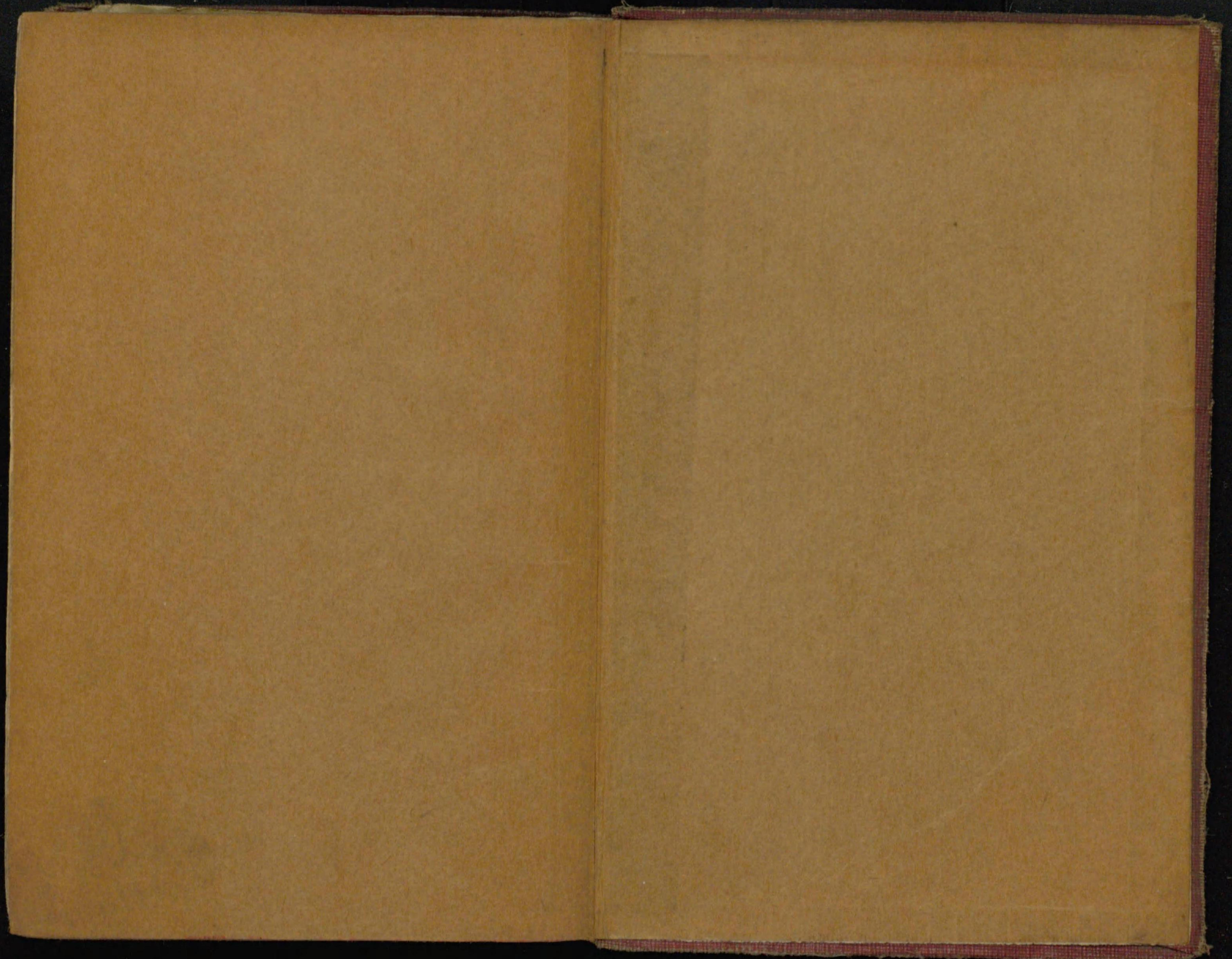


569

569-61



1200501517047



520

納本

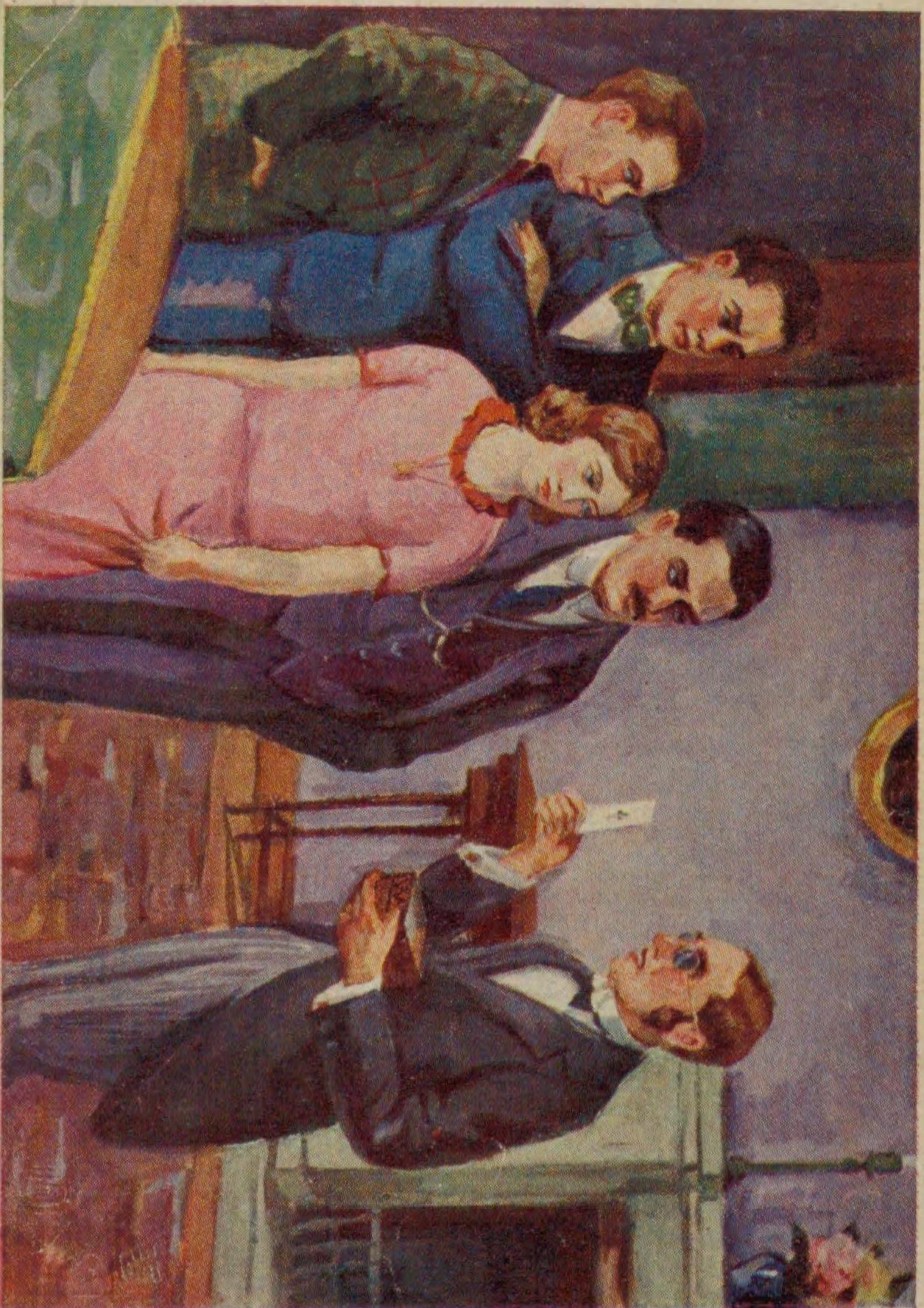
世界大衆文學全集

スーペードーのキング
四枚のクランク

小酒井不木



改造社



おたし示に女彼てし出敗をトーカの故ーちか箱小の製度印はスンガーチス
(照参頁六六三)

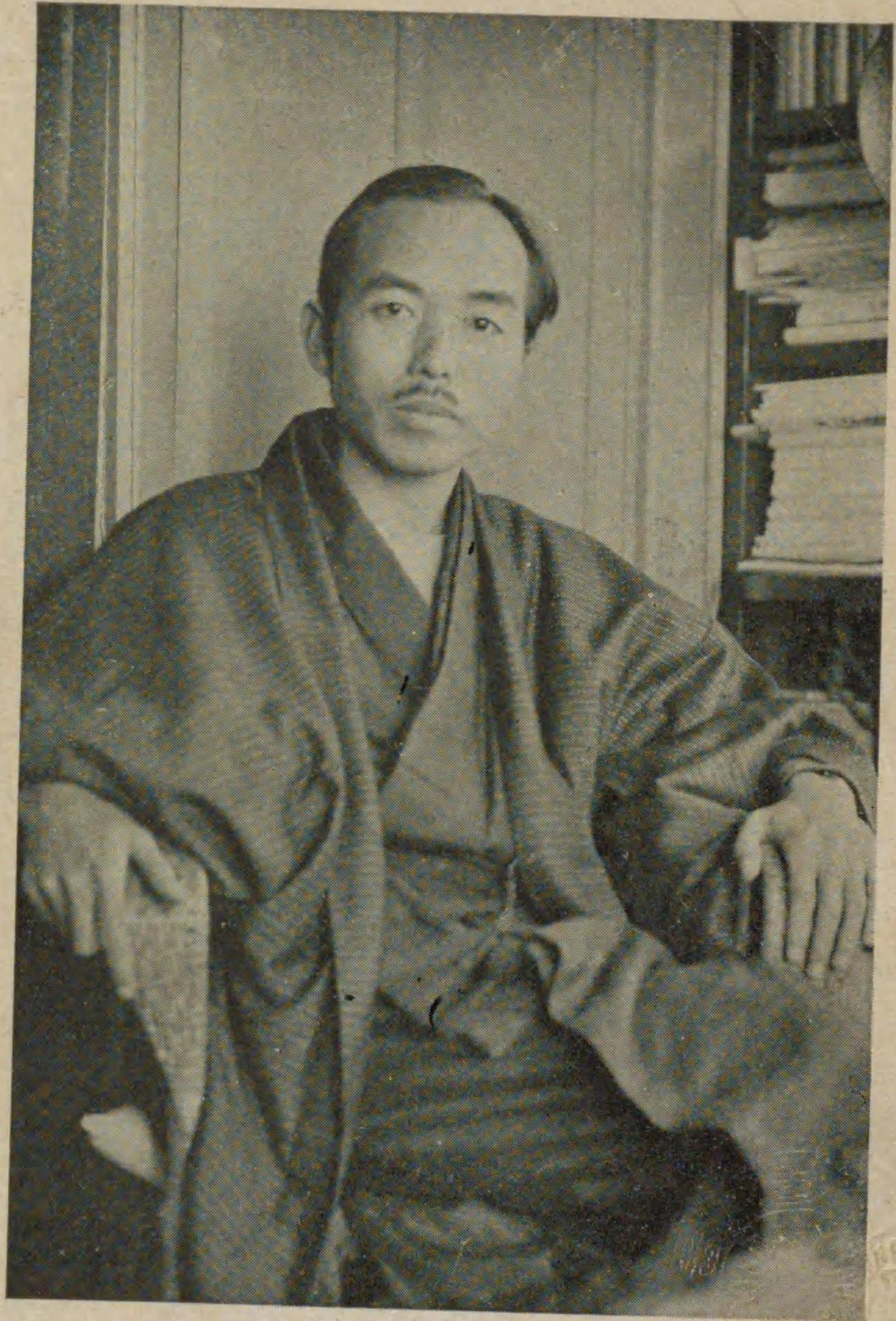


569-61

スペードのキング

目次

第一章	拒絶	八
第二章	「猫は居ない.....」	三
第三章	盗難	三
第四章	不思議な闖入	四
第五章	びつくり	五
第六章	蓄音機	五
第七章	走り戸の問題	七
第八章	又びつくり	八



小酒井不木氏

第九章	マスク第二號	九二
第十章	カリング笑ふ	九九
第十一章	草訊問	一〇八
第十二章	意外な發見	一二九
第十三章	指紋	一三二
第十四章	午前一時	一四〇
第十五章	カードの祕密	一五一
第十六章	令嬢の日記	一六五
第十七章	不思議な失踪	一七五
第十八章	あとを追うて	一九〇
第十九章	女間諜	二〇二

第二十章	スペードのキング	二二七
第二十一章	中尉の冒険	二三五
第二十二章	大團圓	二五三

四枚のクラブ

第一章	父娘	二六六
第二章	變つた慈善家	二七七
第三章	ローガンの最初の事件	二八八
第四章	謎	二九九
第五章	新事實	三二四
第六章	殺人現場	三三〇

第七章	令嬢の現場不在證明	三三二
第八章	スチーヴンス來る	三四〇
第九章	四枚のクラブ一	三五九
第十章	ローガンの結論	三七五
第十一章	ビルンの履歴	三八五
第十二章	日本の鎧	四〇一
第十三章	ポーカールの會	四一七
第十四章	緑の部屋の祕密	四三四
第十五章	アツサールの冒険	四三八
第十六章	忍び込み	四四九
第十七章	謎また謎	四六〇

第十八章	スチーヴンスの正體	四七七
第十九章	暗號の手紙	四九二
第二十章	ダイヤモンド	五〇〇
第三十一章	トムテボにて	五一四
第二十二章	生きてる人と死んだ人	五二八
第二十三章	最後の謎	五四四

スペードのキング

スペードのキング

第一章 拒絶

ラーニユヒルド・フォン・ヘーデンは死人のやうな蒼白ざめた顔をして、垂れ下つた厚い幕に半分身を埋めながら、閉された扉の前に身を忍ばせて立つて居た。彼女は熱心の餘りちつと息を止めて隣室の模様を立聞した。平素は極めて落ついた、わけの分つた處女がそれ程昂奮してゐるのは餘程重大な事であるに違ひない。彼女は恰も悪夢を逃れんとするかのやうに額に手を當てた。扉のむかう側で怒聲が聞えた時、彼女はその瘦せた身體をぶるつと慄はせて絶望の太息を吐き出した。

「まあどうしよう。お父さんは氣が違つたのか知ら。」と彼女は小聲で言つた。

それから彼女は再び耳を扉に當て、不安と緊張とに血をわかせながら尙も立聞を續けた。

ラーニユヒルドは陸軍大佐フリノルフ・フォン・ヘーデンの一人娘で今年十八になる美人である。その房々とした髪は漆のやうに黒く殆どクラシックと言つてよい位美はしかつた。少しはつきりし過ぎる位、くつきりと刻み出された眉の下には、まぶしい程に黒い眼が輝いてゐた。そしてこの南國的な容貌に加ふるに瑞典人特有な柔らかい白い皮膚を持つてゐた。

ラーニユヒルドは非常によく教養された婦人であるから、いつもならば人の話を立ち聞きするなど

といふ事を恥に思ふのであるが、今はそれを思つて居る餘裕が無かつた。と言ふのはその閉された扉の向う側で、今彼女の一生の運命が定められやうとして居るからである。

それは彼女の最も愛する且つ既に將來を誓つた陸軍中尉シキステン・トルハルトが先刻父を訪ねて婚約の許可を得に來て居るからである。彼女は父がどんな返事をするか、中尉の歸つて來るまで待つて居られなかつた。殊に父は近頃中尉に對して餘り好感を持つて居らず、中尉の名を聞く度に、顔を曇らすのが常であつて、何か特別の事情で殊更に反感を抱いて居るらしく思はれたから、彼女は尙更氣掛りになつたのである。

これまでラーニユヒルドは、父にむかつて中尉を心から愛して居る旨を幾度か告げようとしたけれど、中尉の話になると、大佐は何時も急に嚴格な侵し難い態度を取るので、たうとう話す機會は無かつたのである。

ところが中尉の方ではもはや彼女に話して貰ふのを待ち切れないで、自ら話してしまはうと決心した。彼女は今父が多分承諾して呉れるであらうと言ふ希望を抱いて、大佐の部屋の傍の客室に忍び込んで來たのである。ところが彼女が客室に這入つて來るなり、父と中尉との對話は非常に大聲になつて居たので、少なからず驚ろかされてしまつた。けれども一語々々を聞分ける事は出來なかつたら、恰も盗人がするやうに扉の傍に立つて立ち聞きを始めたのである。

彼女が聞取つた事は、彼女の幸福な夢を一撃の下に破壊してしまつた。

「君のやうな風來坊には斷然娘は遣れない。」と大佐は叫んだ。「よく恥かしくもなくそんな事が言へたものだ。」

「恥かしくもなくですつて。大佐殿どうか……。」

「もう聞かなくてもよい。君がどんなに願つても駄目だよ。」

「けれど何故ですか。どうかその理由を聞かせて下さい。」

「聞きたければ聞かして上げよう。いかにも君は優秀な士官である。又君が無財産である事はわしも構はないが、只わしの好まぬ所は、君が如何はしい連中と友達になつて、女たらしをして居る事だ。」

「僕がですか。」

「さうだよ。わしはそれを明言するよ。」

「そんな筈はありません。それは何かの間違ひでせう。」

「ふむ、間違ひ？ では是も間違ひか知ら。是を讀んで見給へ、君立派な手紙だよ。一ヶ月ばかり前からわしは何本も何本もこの手紙を受け取つたのだ。わしはもう厭になつてしまつた。殊に君が多分娘を騙して居やしないかと思つたからねえ。婚約の後で無くつてほんたうに幸福だ。」

「では是等の手紙と僕と關係があるのですか。」

「如何にもさうだよ。見給へ。『お嬢さんが私の大切なシキステンをお奪りになるのなら、お嬢さんの眼玉を引つ掻いて取つて了ひます。あの人は私に一生を誓つて呉れたのですもの。』と書いてある

よ。名前ばアスダだ。」

「そんな名は少しも知りません。」

「無論知らないだらうよ。君がさう言ふに違ひないと思つた。ではユリヤと言ふ女も知らないかね。矢張り同じやうな脅し文句が書いてある。『昨日私は私の戀人がお嬢さんと婚約すると言ふ噂を聞きました。しかし若しさうとしたならばお嬢さんに私とシキステンとの關係を残らずお話しします。それでもお嬢さんが平氣で居られるならば結婚の晩に大騒動を起してストックホルム中を驚かせて見せます。私は危険ですから人から恐れられて居ますよ。ユリヤより。』どうだ。分つたかね。」

「それは實に怪しからぬ悪戯です。」と中尉は聲を慄はせて言つた。「ユリヤと言ふ女を僕は一人も知りません。」

「わしはさうとは思はぬよ。」と大佐は嚴格に言つた。「この手紙には澤山ほんたうの事が書かれてある。例へば、是を讀んで見給へ。『お嬢さんがどんなに私がトルハルト中尉を愛して居るかを御承知になるならば、決して私からあの人を奪ふやうな薄情な事はなさりますまい。若し結婚なさるならば、それは女の愛人を奪はるゝばかりでなく、ある子供の父を奪はるゝ事になります。不幸な者より。』」

「實に謊言も甚だしい。子だとか父だとかみんな嘘です。」と中尉は叫んだ。

「無論さうだらう。」と大佐は嘲るやうな調子で答へた。「然しまだく手紙は澤山あるよ。ローザだの、ヘレヴィだのフィボンだのと言ふ可愛らしい女達の手紙だ。それはまあそれとして昨日受け取つ

た手紙にこんなものがある。「間違ひの無いうちにお嬢さんをお救ひなさい。トルハルト中尉は女たらしであるばかりでなく歌留多遊びの巧い人です。倶楽部では「エカルテ」の一番上手な人として有名です。友より。」

こゝで二人の話は暫らく途切れた。立ち聞きの令嬢はほつと息をしたが、餘りその音が大き過ぎてはつと思つた位である。

「僕は僕は決して……。」と中尉は吃つて言つた。

「なんと言つても駄目だよ。君が歌留多遊びする事は、僕自身で調べたが間違ひもない事實だ。君は倶楽部中で一番熱心な一番上手な賭事師だと言ふ事だ。」

「僕はたゞ『エカルテ』をやるだけです。それも十クロネ以上賭けた事はありません。」

「それはさうかも知れん。併し金の無い中尉としては餘り見上げた事では無いぢやないか。さういふ品行の男でありながら、娘を呉れと申し出た君の破廉恥にわしは驚かざるを得ないのだ。」

「併しこの手紙はみんな作り事です。」

「但し賭け事をするだけはほんたうだらう。それはわし自身が確かめた事だから。」と大佐は嘲るやうに言つた。

「僕は中尉がこんな愚にもつかない無名の手紙をほんたうになさうとは思ひません。」

「さうはいかんよ。若し君が賭け事をすると言ふ事も誠であるなら外の事も誠であらうと思ふが別に

是を否定する事實が無いからねえ。わしは情事の詮索はしたくない。アスタさんやローザさんと知己になる事は眞平御免だ。君はよろしくこの人達と交際を続けるが、けれど娘には手を出して呉れ給ふな。わしは親として當然悪者を近づかせない手段を講じなければならぬ。それだけをわしは君に宣言しておくよ。」

やがてごとくと聲音がして大佐は扉の方へ近づいて来た。ラーニユヒルドが身を蹴へしてピアノの後に隠れ込むと父が先へ、續いて中尉が這入つて来た。大佐は昂奮のため眞赤な顔をしてゐたが、中尉はこれに反して土のやうに蒼白めて居た。

「併し大佐殿、その中には分る日が參るだらうと……。」

「もう澤山だよ。」と大佐は中尉の言葉を遮つた。「只君に話して置きたいのは、今後娘に近寄つて呉れ給ふな。手紙の遣り取りも決して許さんよ。」

「併し……。」と中尉は言ひかけたが再び大佐に遮られた。

「わしにはもうこの話を續ける暇がない。」と大佐は冷淡に言つた。「わしの言つたことをよく考へて置き給へ。」かう言つて彼は慌たゞしく部屋を出て扉を閉ぢた。

トルハルトは暫らくの間、頭を垂れたまゝ立つてゐたが、聽て兩手を振つて呟いた。

「一體何者があんなことをしたのだらう。」と、呟きながら彼がその立派な體格を伸すと、青い眼は異常に輝やいて居た。「どうしても悪戯の主を捕へねばおかぬ。」と、彼は半ば聲を出して言つた。

この時、部屋の方から溜息の音が聞えて来たので、彼は急に振向いた。

「お、ラーニユヒルドさん。」と彼は驚ろいて叫んだ。「真逆、聞きはしなかつた……。」「聞きましたわ。」と彼女はほつと溜息をして小聲で言った。「あんな大聲で話して居たんですもの、ほんたうにびつくりしたわ。ねえあれは皆嘘でせう。」

「嘘ですとも。手紙に書いてある事はみんな嘘です。その中には分ります。」
「歌留多遊びも嘘でせう。」と彼女は疑ふやうな風で言った。「あなたあの時言ひ譯が出来なかつたのねえ。」

「あなたまで疑ふのですか。」と彼は悲しさにたづねた。「それではもう僕は立瀬が……僕の顔を御覽なさい。かうしてあなたの家から野良犬のやうに追出されて行くまで、僕が嘘を吐くと思ふのですか。あの女達の手紙は皆一人の悪者がした事です。わざ／＼こんな事を言ふ必要は無いかも知れませ

ん。あなた以外に僕はどんな女にも近附かなかつた事を、あなたはよく知つてゐて呉れるでせう。」
かう言つて彼が哀願するやうに両手を差しと出す彼女はそれを反射的に握つた。彼女の頬は再び紅味を帯び、中尉を見つめた彼女の眼はきら／＼輝やいた。此時の彼女の姿は物凄しい程美はしかつた。

「あなたを信じますわ。」と彼女はやさしく言つた。
「ありがたう。さう言つて貰へばこれからこの嘘と闘ふにどんなに心強いかわりません。僕は飽くまでこの戦争を續けます。どんな邪魔が這入つても、末にはあなたと結婚しないではおきません。」

この時、扉が開いて大佐が這入つて来た。たつた今追ひ出した男が娘と手を取り合つてゐるのを見てびつくりして立ち止つた。彼は暫らくの間、物の言へないほど憤慨した。

扉の方に背を向けてゐたシキステンは彼を見なかつたが、ラーニユヒルドは忽ち危険の近づいた事を覺つた。自分でも驚ろくほどの決心を以て、彼女は父の眼の前で中尉の首をしつかりと抱いた。

「キッスして下さい。」と彼女は聲を張り上げて言つた。「私は何處までもあなたを信じます。」
大佐は飛んでもない光景を見せつけられて面喰つた。中尉は聯隊長の居る事を少しも氣附かず、彼女に向つて長い熱いキッスを與へた。餘りに熱中して肩を強たか叩かれるまで、接吻の甘さに酔つて居た。

幸な事に大佐はあまりに呆氣に取られて言葉が出ず、只扉の方を指して「出て行け」と手眞似で言ふばかりであつた。

中尉は怒りに燃えた上官の顔を認めて、この場合逃げ出すより他無いと思つた。

ところがどうしたわけか、ラーニユヒルドの腕は鐵の如く固かつた。今一度彼女は彼の首のあたりに腕を巻いて、燃ゆるやうな唇を顫はせて彼に言つた。

「決してあの手紙の文句を信じませんよ。キッスして下さい。」
トルハルトも人間である。男である。上官の前にも拘はらず、前よりも一層力をこめて彼女に接吻した。

大佐はそれを見て二人を無理矢理に引き分けた。その時、ラーニユヒルドは中尉に向つて早く逃げなさいと囁いた。然し中尉は彼女を一人残して行くに忍びなかつた。けれど彼女が再び眼を以て報せし、大佐の機嫌がいよく悪くなつたので、逃げ出す事に決心し、大佐に向つて僅かに腰を屈めて逃げ出してしまつた。

中尉が去つた時、父娘は何も言はずに向き合つた。

大佐の怒りは驚愕に變つて行つた。彼のよく育て上げた娘は始めて父親を蔑ろにしたのである。男の首に巻き附いてキスを求めるなどと言ふ事は、とても堪へられない事であつた。未だ嘗て自分の若い時にもそんな事をする女に出會つた事はなかつた。

「お前は、お前はまるで、まるで……あゝとても言ふ可き言葉がない。」と彼は遂に叫んだ。

「お父さん。おつしやる言葉が無ければ尙更結構です。」と彼女は父を驚ろかすやうな調子を以て答へた。「さもなければお父さん。あなたはきつとあとで後悔なさるやうな事をおつしやるに違ひありません。」

大佐は途中で遮ぎらうとしたが、餘りに呆れて言ふ事が出来なかつた。親に向つて斯様な調子で斯様な返答をするとは悪魔にでも魅られたのであらうか。

「お前は父と話して居る事を忘れたのか。」と彼は厳格な語調を以て言つた。

「忘れたいと思ふのよ。」と彼女は忙しく答へた。「匿名の手紙を信するやうな人はお父さんであつて

欲しくはないのよ。」

「さうだらう。お前の將來もお前の幸福もあのろくでなしに奪られてしまつた方がいゝのだらう。」

彼女の黒い眼は輝やき、唇は慄へ、頬は赤くなつた。彼女は身を伸して父を凌ぐ位の高さになつて、娘といふよりもまるで心を傷つけられた細君のやうな態度で父の前に立つた。

「分りました。」と彼女は言つた。「世間ではお父さんをこの世で一番悪い人のやうに言ひますが始めてよく分りました。」

「誰がそんなことを言ふ。」と大佐は我を忘れて叫んだ。「そんなことを言ふ者は、あのならずものトルハルトの他に無からう。」

「そんな風におつしやれば尙更世間の噂がほんたうだと思ひますよ。世間ではあなたを随分不正直な不公平な方だと言つて居ります。私だつてそれは家で夙くに氣の附いて居ることですよ。」

「わしを不正直だつて。そりや聞き捨てにならん。もうお前とこのことに就いて話合ふ氣はない。わしは只お前の爲を思つて正しいと思ふことを何でもやつて居るよ。」

「では何故……」

「もう澤山。」

「それでは私も正しいと思ふ事を勝手にやります、いくらあなたが私達の仲を割かうと思つたとて駄目ですからその心算でいらつしやい。」

これに對して大佐が亂暴な返事を與へようとしてゐた時、女中が這入つて來た。「電報が參りました御座います。」と彼女は言つた。

大佐はそれを大急ぎで開いたが、ラーニヒルドは大佐の先程からの不安な様子からして重要な報告を待つてゐたのだと推察した。電報を讀んでゐる大佐の顔は忽ち色を變へたので彼女は驚ろいて父を見つめた。大佐は先程中尉と會つた事などもうすっかり忘れてしまつたらしかつた。彼は黙つてその電報を二度くり返して讀んだ。眞赤であつた彼の顔は死人のやうに蒼ざめ、指を以てその紙を丸めながら當惑さうに附近を見廻した。娘の姿が眼に附いた時、彼はかすれた太い聲を出して言つた。「直ぐ自動車を用意するやうにジョンに話して呉れ。是から直ぐストックホルムへ行くから。」ラーニヒルドも、何もかも打ち忘れて、何事が起つたのかと知りたいたいで一ぱいになつた。「何かいやなことが出來たの？」と彼女はたづねた。

「さうよ。」と大佐は半ばぼんやりして答へた。「餘り面白い事ぢやないよ。」と言つて彼は急に我に返つて、「何故お前はそんな事を聞くのか。」と詰問して言つた。

「何故汽車でいらつしやらないのです。それが不思議でなりません。そんなにお急ぎなの。」

「無論だ。それで今お前とあの話を片附ける暇が無いのだ。今度ゆつくり話をしよう。」

かう言つて彼は机の上に散らばつて居た紙を片附け丁寧に重ね合せて勘定した。そしてそれを大きな鐵の手文庫に納め、注意深く蓋をして金庫の中へ入れた。

それから彼は娘に向つて靴を用意し、旅行用外套を入れるやうに命令した。ほんの暫らくの旅行とは違ふらしいので、ラーニヒルドは、「何時おかへりですか。」と彼にたづねた。

「明日の朝だ。」と彼はそれ以上質問を許さないやうな調子で答へた。

ラーニヒルドは寢室へ上つて行つて父の命令通り支度をした。總て自動車が來たので彼女は父を送り出して重い氣分で客室へ歸つて來た。そこで彼女はたつた一人になつて先程経験した意外な事情や父の頑固な意志や、暗い未來について深い考へに沈んだ。

それと同時に彼女はこゝ二三ヶ月間に起つた種々な事情について考へをめぐらせた。その事情と言ふのは別にこれといふ原因無しに起つて來たのであつて當時はよく分らなかつたが今彼女が受けた強い打撃と密接の關係ある事に氣附いたのである。

彼女は父が四十八時間またはそれ以上の祕密の旅行を度々行つた事に考へ及んだ。たま／＼彼女が不意に父の部屋に這つて行くと父の顔はいつも苦痛の表情を呈してゐた。そして段々と父は神經質になり且つ怒りつぼくなつて來た。それは一體どういふわけであらうか。その様子はある危険に迫られてゐる人がどうしてもその危険を逃れる事が出來ず、段々その危険に近寄つて行く時に起すやうな態度であつた。

しかし彼女の父は世間一般に知られてゐる如く勇敢なる人であつた。彼の拔群の功によつて得た多くの勳章はそれを證明して餘りがある。既に中尉としてコンゴに居た時に初めての勳章を貰ひ、最後

の勳章はストックホルムの大火の時、自分の生命を顧みず、小兒を救ひ出した時に貰つたのである。嘗て恐れといふ事を知らない人を此の如く不安に陥らしめた事情は餘程驚ろくべき事であるに違ひない。

それは抑々何であるか。

ラーニユヒルドは、真夜中に度々眼を覺されたあの異様な物音に考へ及んだ。今まで平和な棲家であつたこのベルクハイム莊は今や真夜中に幽霊の棲家となつてしまつた。彼女は家の中でぼそ／＼話す聲や、みしり／＼歩く音を聞き、同時に庭園を走つて騒ぎ廻る音を聞いた。

それから彼女は父の新らしく買込んだ自動車に考へ及んだ。その自動車は時とする父を乗せないで夜分用懸けて行き、しば／＼真夜中頃に出懸けて、明け方に歸つて来るのであつた。多分下男が面白げに乗り廻すのであらうか。併し父はそれを許すわけが無い。厳格な父は何事も不規則な事が嫌ひで下男にも決して不規律を許さないのである。

して見ると何の理由が其處に介在してゐるのであらうか。

或る日彼女が父に向つて彼女の安眠を妨害した是等の事情について語ると、父は夢を見たのだらうと彼女に語つた。そして自分は何も聞かないと答へたが、彼女は父の顔付きから父も亦その晩よく眠つてゐない事を知つた。

下男に聞くと彼は決して自動車を乗り出した事は無いと言つた。二人の女中にたづねるとよく寝て

ゐて何も聞かなかつたと答へた。

是等の事について考へれば考へる程ラーニユヒルドは益々氣がかりになつて來た。遂に彼女は自分の忠實な友達である日記を取り出した。それは楽しい時にも亦悲しい時にも何でも打明け得る親しい友であつた。

彼女が日記を開いた時、小さな封筒がぼらりと落ちて出た。驚ろいて彼女はそれを取り上げ、やさしい文字で書かれた彼女の名前を讀んだ。隅の方に「親展」と書かれてあつた。彼女は直ちにその宛名がまだほんの二三時間前に書かれたものである事を知つた。

然しながらどうして手紙が此處へ入れられたのであらうか。今朝日記を手にした時は確かにこの手紙はなかつた。それ故その以後誰か、抽斗を開けて入れたのに違ひない。しかもこれを入れた人は彼女が毎晩二三行書き入れる事を知つて居るに違ひない。

好奇心に驅られて彼女は封筒を破つた。手紙は佛蘭西語で次のやうに書かれてあつた。

「あなたの眞實の友達として私はあなたに申し上げねばならぬと思ふ事が御座います。あなたに婚約を求むる男は尊敬すべき人ではありませんから注意しなければなりません。あなたはあの人があなただを愛して居ると思つて居られるでせうが決してさうではありません。

あなた何と思はれるか知りませんが私はあなたが悲運に陥られないやうに充分あなたを保護したいと思ひます。

十龍の王より

「むぐら王。何の事か知ら。」と彼の女は呟いた。

父の所へ送られたあの数々の手紙と同じ手段で自分を惑はさうとするのだと彼女は考へた。決してこの手紙には迷はされまいと彼女は決心した。

彼女は再び下りて行つて客室に腰を下し、今日経験したことを残らず日記に書きつけた。

第二章 「猫は居ない……」

フォン・ヘーデン大佐は餘程以前に細君を失つてその後獨身生活を續けた。結婚して間もなく細君は病氣のために死んだのである。その當時彼の悲痛は絶大であつて全く世の中と交際を絶つて暮してゐた。それから外國へ行つて軍事研究をした。歸國の後も彼は常に孤獨を求め、再び社交界に顔を出さずやうになつてからも戀人として取扱はれて居た。

彼の娘が今日面と向つて浴せかけた嘲罵は、ある程度まで當を得てはゐたが、それは彼女の昂奮の爲に著しく誇張されてゐた。彼を快しとしない人は彼を悪者の如く言ふけれど、その實大佐は心からの悪者ではなかつた。彼は極めて短氣な性質で何事も好悪に任せて事を處置する爲に軍隊に於いても彼の態度は動もすると不公平に陥つた。好きな人に對しては出来るだけの便宜を興へ、嫌ひな人は飽くまで冷淡にとり扱つた。

自宅に於いても其態度は變らなかつた。下男のジョンを愛して居た爲に彼は他人には決して許さないやうな事をもジョンには許して居た。これに反してトルハルト中尉に對しては匿名の手紙を受け取つた爲に一圖に憎惡の念を抱いて居た。

斯様な弱點のあるにも拘はらず聯隊に於いては責任觀念の強い言行一致の人として尊敬されて居た。彼は五十を越したにも拘はらず、青年の元氣と態度とを失はなかつた。

ラーニヒルドは非常に不愉快な念を抱いて一人で書飯を食へた。彼女は中尉に會つて心配を打ち明けたい心で一ツばいになつた。父の言葉には遠慮しないでよいと思つた。中尉は父に對して彼女と會はぬと言ふ約束をまだしなかつたと考へた。で、彼女は六時半になつて中尉に電話を掛け、父が留守だから淋しさに堪へられない旨を訴へた。中尉は用が済んだら直ぐ伺ふと楽しさうに答へた。それから彼女は客室の窓に寄りかゝつて彼の來るのを待ち受けた。中尉が來たら召使ひ達に見られないやうに庭園で逢はうと思つた。

七時半になつて中尉が來たので彼女は急いで迎ひに出て、家の前の小さい女關に腰を下して直ちに今朝程の不愉快な出來事について語り合つた。

ラーニヒルドが今朝彼の去つた後父をやり込めた話をした時、中尉は言つた。「さうでしたか。僕も其處に居たかつたですねえ。あなたが父さんの前で凜としてお父さんに屈服しなかつた時、僕はあなたの氣高さに酔はされました。その時僕は決して一生涯あなた無しに生きて行かれないと思ひました。あなたと離れる位なら僕はもう生きて居る氣にはなりません。」

「ですから何處までも離れないでませう。」とラーニユヒルドは彼を慰めた。「私達はどんな中傷があらうとも又どんなに父が言はうとも飽くまで反對してゆく強い人間になりませう。」
かう言つて彼女はお互ひの力に頼りつゝ、再び世の中のすべてのものを明るい眼を以て眺め始めた。中尉は今朝大佐を訪問した時、フィッボンと署名した手紙だけを持出した事を彼女に告げた。その手紙は床へ落ちてゐたのであるが、大佐が彼に背を向けて居た時、素早く拾ひ上げたのである。

「その手紙をどうなさうとするのですか。」

「その手紙を書いた者を探すのですよ。」

「探せるでせうか。」

「多分探せる心算です。あなたは有名な私立探偵のカリングさんを御承知でせう。」

「レオ・カリングさん？ 知つて居ますとも。あの方は天才だといふ話ですわ。」

「少なくともあの人は警察の手に負へない秘密を幾度も解決しました。」

「それでああなたはあの人にお頼みになつたのですか。」

「頼みましたよ。ある人は今レルクスターデンに住まつて居ますが今日の晝オストバーンに居つた時直接訪ねて會つて來ました。重いインフルエンザに罹つてまだ充分癒り切らないが、出来るだけの事はすると云つて呉れました。」

「探し出せさうな様子をして見えましたか。」

「勿論ですとも。直ぐ僕の氣の附いてない事を二三注意して呉れました。その手紙はみんな同じ人から出たものであなたの爲に書かれたものだと言ひました。」

「私のために。」

「さうですよ。あなたも知つてゐる通りこの手紙はあなたと僕との間を割く爲に書かれたのでせう。そこでこの悪戯をした者はつまり虐げられた第三者であるに違ひありません。少なくともあなたを愛して居る者の所爲です。カリングさんの言ふ所によると無名の手紙は十中九までは復讐の爲に書かれるもので直接手を下し得ない有利な第三者を墮落す爲になされる事さうです。」

「それはもう私達の間を割かうとする爲に違ひありません。けれどあの手紙が私の爲だかあなたの爲だかは分りませんわ。この手はある女が書いたらしいのですもの。書き方と言ひ言葉使ひと言ひどうしても女ですもの。して見るとあなたを私から割かうとするのです。きつとあなたに戀をして願はれない女のした事です。」

「するとあなたもお父さんのやうにほんとのものだと思ふのですか。」

「決してさうは思ひません。私はたゞあの澤山な手紙が幾人も女の手で書かれたのでは無くて一人の女が書いたのだと思ふのです。そしてあなたはその女とは何の關係もこれまで持たれた事は無いと思つてゐます。けれどその女はあなたを愛してゐて何處までもあなたを私から離して自分のものにしようとするに違ひありません。」

「あなたは中々の議論家ですねえ。」とシキステンは笑つて言つた。「カリングさんは併し確かにあなたを得ようとする男の手で書かれたものだと言はれました。あなたにはねつけられた男に違ひありません。」この言葉を聞いてラーニユヒルドはさつと顔を赧らめた。日暮れ方で薄暗くなつて居たけれど中尉はそれを明瞭に認めた。

「そら顔を赧くしましたね。」と彼は疑ふやうに叫んだ。

「まあ、そんな子供臭い事おつしやつては嫌ですよ。」と彼女は答へた。

「きつとあなたには慕ひ寄る男が幾人もあるに違ひない。ねえ白状しなさい。」
彼女はそれには答へないで靴の先を頻りに見つめて居た。

「話して下さい。さうでせう。何故それを今まで話して呉れなかつたのです。」
彼女が餘り烈しく彼を見つめたので彼は慌て、眼を外らした。

「たとひさう言ふ人があつても今お話しなければならぬことはないわ。」
ではどんな事情があつても話して呉れませんか。」

「そりやさうとかぎりません。けれどこの場合何處までも白状させようとする理由がないでせう。たとあなたより前には誰にも承諾しなかつたと言へばそれで澤山でせう。」

「そりやいけません。」と彼は嫉妬深く叫んだ。「あなたは確かにほかの男に好意を送つてその上内證で婚約までしたのかも知れぬ。」

彼女は急に立ち上つた。その眼は午前父に對つた時と同じく侵し難い色を持つて居た。

「シキステンさん。」と彼女は言つた。「今日あのやうにあなたがひどく疑はれなかつた時でも私はあなたを信じて居りました。殊にあの時、ある事だけはほんたうだと分つてさへ私は少しの疑念も抱きませんでした。それだのにあなたは嫉妬のあまり私が他の方に婚約をしたなどと邪推しなさいます。

あなたはそれを恥と思ひませんか。」

「許して下さい。」とシキステンは彼女の一言々々鞭を持つて叩かれる思ひをしながら言つた。「僕が悪かつた。許して下さい。」

「許しますわ。」彼女は彼の方へ手を差出しながら言つた。「そして實際ある男の方から婚約を求められた事を白状します。それは今年の二月、ニツツァのカーニバルを見るときにリヴィエラへ旅行をした時の事です。その時、大きな花馬車の中である外國の方に會ひました。それからずつと其方は私に付き纏つてモンテカルロでたうとう婚約して呉れと言はれました。けれど固より斷つてしまひました。」

「何といふ人でしたか。」
「それはお話出来ません。その方は士官で今戦争中のある軍隊の方です。それで此處へは来て居ないのでからあの手紙を書くわけはありません。それにその方は瑞典語が話せないのです。」

「それは併し問題ではありません。人に頼めば瑞典語で書いて呉れます。」

「まあそんなに氣を廻してはいけません。戦地にあると話したぢやありませんか。」

「どうしてそれが分りますか。」

「戦地にいらつしやる筈ですもの。さもなくば自分のお國に居られるに違ひありません。いつかあなたたは交戦國の男で兵役の義務のある年齢の男は皆召換されて外國に在る事を許されないとおつしやつたではありませんか。」

中尉は外國の冒險者たちのことを何やらぶつ／＼呟いた。然し彼はその男が瑞典人でないと言ふ事を聞いて幾分か心を休める事が出来た。そこで彼は大きな薔薇の木の傍へ歩み寄つて眞紅な花を手折つてそれをラーニユヒルドに渡した。

「僕の邪推を心から後悔した證據としてこれを受け取つて下さい。」と彼は言つた。

「まあ、お父さんの大切にしていゐなされる薔薇をこんなにして、お父さんはきつと怒るに違ひないわ。」とラーニユヒルドは言つた。が次の瞬間彼女は驚いて言つた。「まあ指から血が出てゐるわ。傷をなさつて？」

「なんでもないんです。刺がさがさつただけです。」

併し食指の小さな傷口からは血が中々止らなかつた。ラーニユヒルドは絆創膏を取り出して張つてやつた。

この時ラーニユヒルドは彼女の日記の中に挟まつてゐた手紙の事を中尉に話して見ようかと思つたが、中尉がこんなに嫉妬深いので話さなかつた。

日はとつぶり暮れて四邊は段々暗くなつたが二人はそれにかまはず話し続け、互に身をすり寄せて自分達の幸福を脅かさうとする事情と如何にして戦つて行く可きかについて語り合つた。

「お父さんがどうしても心を離へさないならお父さんの心の如何に抱はらず、結婚するより他に仕方がありません。」と中尉は言つた。「もう五六年経てばあなたは丁年になるから……。」

「それは駄目よ。」彼女は答へた。「お父さんから全然離れて了ふ事はとても私に出来さうもないわ。併しお父さんの心に反して結婚してしまへば自然離れねばなりません。ですからどうぞして父の心を離へしたいのです。カリングさんが手紙を書いた人を見つけて萬事作り事であると言ふ事を證明して下さいれば父も納得するでせう。それからあなたが父の爲に一働きしてやつて下さればよいのです。」

中尉は肩をすくめた。どうしてそんな事が出来ずものか。お父さんは僕を憎んで居られます。そしてきつとあなたを他の人にやる心算で居られるに違ひありません。」

「そんなことは決してありません。」

「するとお父さんの態度は益々分らなくなります。匿名の手紙で人を判断するのは卑怯ぢやありませんか。僕は斷じて許しませんよ。」

「まあシキステンさん。私達はお父さんの話をして居るのですよ。」

「そりやよく分つて居ります。たゞ……。」彼は突然口をつぐんで木の枝の隙間からスツール街の方を覗つた。街燈の薄い光によつて一人の男が徐々に邸宅の方へ近寄つて来るのを見た。中尉ははつと

してうなり聲を發した。歩いて來るのは大佐自身ではないか。

この時、ラーニユヒルドもそれを見つけて限りなく驚いた。

「早く、早く、早く、立ち去つて下さい。さもないと大變なことになります。」と彼女は囁いた。

「では何處かへ隠れて下さい。何處でもいいから。」

口で言ふのは容易だがいざ隠れるとなると容易では無かつた。庭園の中には街から見えないやうな隠れ場所は一つもなかつた。中尉は最初邸宅の他の側にある厩に隠れるか、又はそこから芝生を傳つて逃げようかと思つたが其處へ行くには後の庭を通らねばならず、後の庭は大佐の來る方から丸見えである。それに邸宅の前後には電燈が明るくついてゐた。實に都合の悪い破目になつた。

大佐は段々と近づいて來た。若し彼が出入りを禁じた男を見つけたならば、當然恐ろしい事が起るに違ひない。その結果はラーニユヒルドが追ひ出されるやうな事になるかも知れぬ。

それはこの際、絶対に避けねばならぬ。けれどどうしたら避け得られるか。突然彼はある事を思ひついた。

「安心なさい。」と彼は囁いた。これからお父さんと隠れんぼをするのです。けつして捕まへられはしません。一かう言つて彼は腰をかゝめて低い塀傳ひに邸宅の方へ匍つて行つた。そして邸宅の裏の

入口から中へ姿を隠した。

ラーニユヒルドは中尉の計畫を覺つた。彼は大佐が二階へ上つて行くまで邸宅の何處かの隅へ隠れてそれから再び忍び出る心算に違ひないと思つた。それは随分、際どい藝當ではあるがこの際それが唯一の方法である。家の中には澤山押入れがあるから幕や簞笥の後に隠れる事が出来なければその中へ這入れればよいわけである。然し中尉は邸宅の中を少しも知らないから危険は決して遠のかぬ。ことによると女中の一人にでも出會ふかも知れない。

然し、ラーニユヒルドは長く考へに耽つて居る事が出来なかつた。と言ふのは父が既に庭園の門の處まで來たからである。彼女は唇に笑ひを浮べつゝ、父を出迎へに行つた。

第三章 盜 難

古い貴族の邸宅風に建てられたたベルクハイム莊はその正面をスツレー街に向けて建つてゐた。廣い砂利の敷かれた道は鐵格子の門から前庭を通じて正面の入口に通じてゐた。そして左翼は厩に通じてゐたが、母屋からは約五十米ばかり離れて居た。

左翼を這入ると大きな廊下があつて其處から扉を通じて客室と物置部屋と臺所へ行く事が出来た。客室は廣い走り戸によつて右に食堂、左に大佐の事務室に接してゐた。事務室は立派に裝飾された大きな部屋であつて、その隣に喫煙室があつた。その他地下室には小さい居間と冬の庭園があつた。

後側の中央には大きなヴェランダがあつて客室から其處へ這入つて來れるやうになつてゐた。そのヴェランダから廣い階段が後庭に通じ、後庭の一面は既に境されて居た。廊下から廻り階段によつて二階に上ると其處にはさらに大廊下があつて寢室と客用の寢室へ通じて居た。

既に縦の面をスツレー街の横町に接して立ち、芝生によつて道路から境せられて居た。邸宅の方に面した側には自動車置場に通ずる廣い入口があつて、今一方の側には下男の部屋があつた。中央の大部分が馬を置く所であつた。馬置場はたゞ二匹分造つてあつたばかりであるが、鞍を置く部屋と秣を置く部屋は非常に大きかつた。

それ故本館へは正面の入口から這入り、玄關と廊下を横切るか、或ひは後のヴェランダから直接客室へ這入る事が出來た。中尉は即ちこの後の口から邸宅の中へ忍び込んだのである。

中尉が姿を消してからラーニヒルドは暫らくのあひだ、種々の感情や考へに沈んで玄關に立つてゐた。彼女ははいはゞ中尉を犯罪者であるかのやうに取扱つたのである。今となつてはむしろ中尉に向つて、潔く父の怒りに面した方がよいから呼び返さうかとも思つた。彼女は父に向つて中尉と話して居たと決して罪を犯してゐたわけではないのである。二人は只心の聲の命するまゝに會合しただけであるから、却つて二人の會合を父に見せれば父の我を折る事が出來たかも知れない。けれどもはや中尉を呼び返すには餘りに遅かつた。大佐は既に門の處へ來て、中尉は聲の届く範圍

外に行つてしまつた。即ち賽は振られてしまつたのである。彼女は非常に苦悶を感じたけれど出來るだけ愉快げな顔をして父を出迎へた。

「まあ、もうお歸りになつて？ どうなさつたの。」

大佐は娘の出迎へに對して通り一べんの喜びを示しただけであつた。彼は恰も二人の會合を見つけたかと思はれるやうな冷淡な答をした。

「もう九時半過ぎぢやないか。こんな遅くまでこんなじめくした日に何をして居つたのだ。」

「あなたがお出でになる所を見たものですから……」

「ふむ、さうか。けれど迎ひに來て貰はなくてもよかつたよ。誰か留守中に訪ねて來たかね。」

「いゝえ。」

「何。誰も來ない。あの間に誰も來なかつた。」

「いゝえ。お父さん。電話も一度もかゝりません。」

「さう。」彼の言葉は非常に短かくぶつ切ら棒だつた。

彼女は不思議に思つて父の顔を見た。彼のうつむいた頭と下に向けられた眼によつて何か悲しい事を心に畫いて居るのだと覺つた。然しそれが中尉が居た事を見つけた爲でない事だけは分つた。

彼女はほつと息吐いた。

父に従つて家の中に這入るまで、彼女は種々の話をした。留守中、淋しかった事や、汚ない道の事

や天氣の悪い事や、戦争の模様の話や、その他澤山の取止めのない話をした。

大佐は驚いて彼女を見つめた。

「お前は馬鹿によくしゃべるぢやないか。だが留守中考へた事は少しも話さぬぢやないか。無論お前は中尉を思ひ切つたぢやうねえし」

「お父さん。私は一度言つた事は決して變へません。」

「うんさうか。それならそれでよい。まあゆつくり話すことにしよう。わしも一旦言ひ出した事は決して取消さないよ。」

ラーニユヒルドはこれに對して思ひ切つた返事をしようかと思つたが、何處かに隠れて父の早く居なくなるのを待つて居る中尉の事を考へて口を噤んだ。

「もう遅いですがお茶でも召上りませんか。」と彼の女は言つた。

「いやまだ欲しくない。これから大切な書きものをしなきゃならん。」

かう言つて彼は彼女を廊下へ置き去つて二階へ上つて行つた。間もなく彼女は父が寢室の扉を開閉する音を聞いた。

今こそ中尉が逃げ出すに絶好の時である。ラーニユヒルドは抜き足で客室に這入つて小聲で彼の名を呼んだ。併し何の返事も無かつた。それ故中尉は客室には隠れなかつたのであると分つた。彼女は再び廊下に出て押入れに通ずる扉をそつと開け、それから居間や多園や、物置部屋まで覗いて見たが

中尉の姿は見えなかつた。

何處に彼は隠れて居るのであらうか。固より二階へ上る筈はない。廻り階段は音を立てるから必ず父に分つてしまふからである。

四邊はまるでしーんとしてゐたので再び彼女は心配し始めた。何か災難でもありはしないかといふ氣がしてならなかつた。多分中尉は客室へ忍び込んで大佐が廊下に来た時、再びヴェランダを通つて逃げ出したのであらう。とは思つて見たがそれでも安心は出来なかつた。

するとその時父は再び下へ降りて来た。彼女は父と話をするのが憶劫であつたから、食堂へ這入つて行つて女中を呼ばずに電氣装置でお茶を沸かし始めた。彼女は客室へ通ずる扉を開けたまゝにして置いたので父が寢衣のまゝ降りて来て、走り戸を開けて事務室へ這入つて行く所を見た。

大佐は戸を開けたまゝ、入口の方を向いて机の前に腰を掛けたので、客室を横切る者は必ず彼の眼に附くわけであつた。

ラーニユヒルドは針の座に坐つてゐるやうな心地がした。中尉はまだ客室に居るのだらうか。彼女は注意を集めて少しの物音をも聞き逃すまいとし、一秒毎に心は焦つて来た。けれど何事も起らなかつた。

その時、女中が這入つて来て四邊を片付け廳でお休みなさいと挨拶して出て行つた。ラーニユヒルドは再び恐怖に襲はれ遂にはもう堪へられぬ位になつた。誰かに話でもしなければとてもぢつとして

は居られなくなつたので、父と話をしようと思ひ切つて事務室へ這入つて行つた。併しながら父の皺められた額と、ぼんやりした表情とはとても話相手になりさうもなかつた。

それゆゑ彼女は父におやすみなさいと言つて二三冊の本をかゝ、客室の燈を消して、二階へ上つて行つた。

彼女は音を立てぬやうにすべての部屋を覗いて見たが誰もゐなかつた。やつと幾分か心が落ついて寢室へ這入つた。

ところが寢室の扉を開けるか開けぬかに下の方から父のヒヤツと言ふ叫び聲を聞いた。何か災難が降つて来たのだらうと思つて下へ駆け下りると父は眞蒼な顔をして開かれた鐵の手提文庫を見つめて居た。言ふまでもなくそれは今日の晝、彼が出懸ける前に金庫の中へ入れておいたものである。机の上には二三枚の白紙が散らばつて居た。

彼女の姿を見た時、大佐は留守中大變なものを盗まれて萬事休する旨を告げた。

彼女は父を慰めようとしたが駄目であつた。彼の怒りは一分毎に増して行つた。彼女は父が卒倒しやしないかと思つた。とても父の心を静める事は出来さうになかつた。

大佐は走り戸や喫煙室の扉の方へ走つて錠をあらためた。それから窓を一々あらためた。

「さつぱり分らん。」と大佐は我を忘れて叫んだ。留守中に誰もこの部屋へ這入つた筈はない。

「どうなさつたのです。何を盗まれたのですか。」とラーニユヒルドは聲を慄はして叫んだ。

「機密書がみんな失くなつたんだよ。今日わしが文庫へ入れてそれから金庫へ入れた事をお前も見ただらう。それなのにみな失くなつてしまつてゐる。」

「それでは盜賊が這入つて金庫を開けて取出したのでせう。」

「いや。誰も錠には觸れてゐない。だから盗られる筈はない。」

「ほんたうにさうなのですか。」

「確かにさうだよ。まるで幽霊が何かした所爲のやうだ。」

「幽霊など信じてはゐなさらぬでせう。」とラーニユヒルドは言つた。

「理性の囁く事は何でも信ずるよ。」と彼は昂奮して答へた。「窓はみな中から閉してあるから誰も這入つて来る筈がない。喫煙室へ通ずる錠は内側から鍵を入れて置いてその鍵と扉の鍵に針金が結びつけてあるから誰も這入れる氣遣ひはない。走り戸は開けられた形跡もない。と言ふのは鍵穴に小さい装置をしておいたのでよく分る。だから誰も此室へ這入つた筈がない。」

彼は白紙を取上げて一枚々々検査をし、あだかも奇蹟によつて失はれたものが戻つて来て呉れることを願ふかのやうに空の手文庫を撫でた。さうして慄へる手先で白紙の中へ入れ、音を立て、蓋を下した。それからがつかりして机の前に腰を下し絶望の態度で顔を両手に埋めた。

「お父さん。」とラーニユヒルドは言つた。「しつかりして下さいよ。そんなに危険なことではないでせう。」

「危険でないつて？ わしはわしの信用を裏切つた事になる。我が國の軍機を外國の間諜に賣つたと
言はれても仕方がない。わしはもう立つ瀬がない。」

ラーニユヒルドが慰めようとしても彼は、駄目だくを繰返すばかりであつた。急に怒鳴り出すか
と思ふとまた急に黙つて考へ込んだ。あれだけ用心をしておいたのだから盗んだのは人間業でない
くり返しくり返し言つた。

彼の言ふ事を息をこらして聞いてゐたラーニユヒルドは益心配になり出した。彼女はこれまで、
真夜中に時々聞いた不思議な物音を思ひ出してぞつとした。

「成程、お父さんのおつしやるのも御もつともものやうです。」と彼女は言つた。「幽霊が確かにこの邸
に出るらしいのです。それをずつと前にお話したのですけど、信じて下さいませんでした。」

「ずつと前にだつて。何を言つてゐるんだ。」

「よく御存じの筈ですわ。夜分時々する妙な音や、階段をみしく歩く音や、ぼそく話をする聲
や、拔足で歩く音などを度々申上げたちやありませんか。ですから今度のこの盗みをしたのもこの幽
霊に違ひありません。」

大佐の顔は蒼くなつた。

「馬鹿な。なんのことだ。それは。」

「けれどこの耳で聞いたのですもの。」

「い、加減にして呉れよ。それはみんな夢だ。」

「けれどお父さんも今幽霊の所爲だとおつしやつたではありませんか。」

「本気で言つたのだと思ふのかい。子供ではあるまいし。人間業でないと云ふのは奇怪極まる事が起
つたと言ふ心算なのだ。無論人間のした事さ。今時奇蹟などと言ふ事がある筈はない。」

大佐はこの窃盗が復讐と憎悪の爲に行はれたに違ひないといふ考へを抱くに到つた。

「是程のひどい眼に會つたのは始めてだ。」と彼は言つた。「たうとう一生涯を棒に振つてしまつた。」

「けれど盗賊を捕へる事は全く出来ない事ぢやないぢやありませんか。腕の秀れた探偵でも呼びなさ
つたら。」

「探偵だつて？—と大佐は益々氣を焦立て、答へた。「探偵で解決出来る事だと思ふのかい。とても
解けがたい謎の事件だよ。」

「……でせうか。けれどどんな解けがたい事件でも解いてくれる人が居りますよ。レオ・カリングさ
んをあなたも御承知でせう。」

「うん、いかにもあの人は天才だ。それに國事探偵をも勤めた事がある。けれどいくらあの人もこ
の事件だけは手におへまい。」

長い間かゝつて勧めた後、ラーニユヒルドは大佐にカリングを頼むやう、納得せしめた。そこで彼
女は探偵に電話を掛け窃盗について出来るだけ詳しく語つた。

探偵は直様お伺がひすると答へ、非常に珍らしい事件らしいからベストを盡して見ませうと彼女に告げた。

大佐はそれから再び寢室に上つて行つた。彼は一人で考へたいのだと言つた。

暫らくの後ラーニヒルドも二階へ上つて今晚経験した事を日記に書きつけた彼女はこの沈黙の前の前には何事も隠さなかつた。中尉と内密に會つた事、中尉が大佐の姿を見て逃げ出した事まで書き加へ、最後に次の言葉を添へた。

「シキステンさんは何處へ隠れてどうして逃げて行つたのかしら。私にはどうしても分らない。」
書き終つてから彼女は再び客室へ下りて探偵カリングの來るのを待ち受けた。

第四章 不思議な闖入

カリングの自動車がベルグハイム莊の前に止つたのは夜の十一時過ぎであつた。ラーニヒルドは自ら出迎へて探偵を客室に案内した。

「よくこんな早く來て下さいましたのねえ。電話では充分お話も出來ず、祕密を守らねばなりませんのでよくお分りにならなかつたでせう。」

「僕はあなたのお言葉から普通の窃盜事件でないことを知りました。」

「全くさうで御座います。それは非常に大切な書類なので御座います。私もよく存じませんがあれが

失くなつては父の名譽に拘はるので御座います。若し書類が早く取戻せないやうでしたら、それこそ父の生涯は破滅してしまひます。罰を受けるのは當然の事ですが、或ひはもつと不幸な目に會ふかも知れませぬ。」

「然し不可抗力ですから大佐には、責任が無いわけではありませんか。」

「それがさうはゆかないのです。實はこの書類を自宅へ持つて來る權利は父に無いのです。つまり命令に背いて持つて來たので御座います。」

「それはいけませんなあ。今二階に聞える聲音はお父さんですか。」

「はあ。それはよく昂奮しまして氣違ひにでもならねばよいがと思ひます。あの通り少しも休まずに部屋中を彼方此方歩いて居ります。こんなに落膽したのを今まで見た事がありません。」

「どうかしてお父さんの過失を償ひたいものですねえ。お父さんが下へ降りてお出でになる前に出来るだけ詳しい話をあなたからして頂きたいと思ひます。豫め何もかも伺つておいた方が都合ですから。」

「喜んでお話をいたしますが、實は私もよくは存じて居りません。父は今日特別にその祕密書類を家で整理して居りました。午後の二時に電報を受け取りまして非常に焦々してそれから街へ出懸けて明日の朝しか歸つて來れないと申しました。それで書類を此處へ残しておくやうな事になつたので御座います。」

「その電報は誰から来てどんな事が書いてあつたか御承知ではありませんか。」

「下男のジョンの話では父を中央停車場まで送つたさうで御座います。下男は運轉手をも兼ねてゐるので御座います。私の存じて居りますのはそれだけで父は何事も話して呉れません。」

「するとお父さんは留守中、書類を何處へしまつてお置きになりましたか。」

「父の申しますにはどんな人でも盗む事の出来ない所にして、書類は大きな手文庫に入れ、更に事務室の金庫へ納めてありました。」

「合鍵さへ使へばどんな錠でも開きますよ。人間が狡猾になれば奇蹟でもやれます。」

「然し父は先づ部屋に這入る事が出来ぬやうにしてあつたと申します。事務室と喫煙室との間には簡単な錠の附いた扉がありますがこれには鍵を中へ入れて二度も廻し、強い針金で戸の蝶番ひに結へてありますので、その針金を切らなければ鍵を廻せぬやうにしてあります。」

「それで針金は何ともありませんでしたか。」

「はあ。ですから扉は開けられなかつたのです。もつとも部屋の中に居る人は容易に針金を除く事が出来ませぬけれど。」

「さうですか。その部屋にはまだ他に扉が御座いますか。」

「はあ。今此處から御覽になる扉がそれです。二重の走り戸にして、父はそれに盗賊遇けの錠を附けて置いたと申します。」

「盗賊避の錠と言ふものがあるわけはありません。」と、カリングは、言ひながらよく検査するため走り戸の傍へ寄つて行つた。「ほうら御覽なさい。」突然彼はさう言つて扉に附いて居る小さな血痕を指さした。

「この通り血が附いて居ります。指紋もあるやうです。觸らぬやうにして下さい。」

それから彼は急に腰を屈めて下から何か拾ひ上げてチョコレットのポケットへ入れた。ラーニヒルドはそれが何であるかを見る事が出来なかつた。

彼女は探偵の一家の行動に少なからず興味を持つてついで行つた。が、彼女はこの時烈しい恐怖の念に襲はれた。と言ふのは若しやその血痕がトルハルトの傷ついた指で残されたのではないかと不圖考へたからである。

カリングはそれから客室の敷物を調べ走り戸を開けて電燈をつけ、隣室を検査した。右の隅に斜に置かれた大きな机の上に蓋を下した鐵の手文庫が置かれてあつた。左の隅の走り戸の直ぐ傍に舊式の大きながつしりした金庫が置かれてあつた。二つの窓は机の接して居る右側に造られてあつてその机の直ぐむかうに喫煙室に通ずる扉があつた。カリングは戸の中間に立ち止つた。最初に見つけたものは暗赤色の敷物の上にある數個の灰色の足跡であつた。彼は膝まづいて蟲眼鏡でその足跡を検査し、ポケットから一枚の紙を取り出してその靴跡を寫した。その靴跡は彼が先刻苦心して見つけ出した客室の花色の敷物の上の走り戸に近い所にあつた足跡と同じものであつた。

「この走り戸を無論大佐は客室から閉められたのでせう。」と彼は言った。「成程、堅固な錠ではあります、馴れた泥坊ならわけなく開けてしまひます。」

「さうかも知れませんが。けれども父はこの錠が留守中、一度も手を觸れられなかつたと幾度も申しました。」

「その事は大佐御自身からもつと詳しく伺がひませう。窓にも手は觸れてなかつたのですか知ら。」

「はあ。御覽の通りしつかりホックが掛けられてあります。ですから誰も窓から出這入りしたものはありません。」

「成程、それに違ひありません。そこで大佐がお歸りになつた時、どんな事がありましたか。どうして窃盗を發見されましたか。」

「思ひ掛けなく父が歸つて來ましたのは九時半少し過ぎでした。非常に疲れてゐたらしく直様寢室へ上つて行きました。」

カリングは、大佐の歸宅後に起つた事及び彼女の觀察した事を聞いて益々興味を覺えた。事件が複雑であればある程、それを解決したいといふ望を増して來た。殊に事件は祖國の安危に拘はる間諜事件らしいから、いよく力が這入つて來た。彼が間諜事件だとラーニヒルドに話した時、彼女は少なからず驚いた。

「此事件をあなたが引受け下さつた事はどんなに嬉しいか分かりません。」と彼女は言った。「あなた

のお手に掛ればきつと間もなく解決します。」

「僕は決して手品師ではありません。」と彼は笑つて言つた。「ことに、盗まれた書類を取戻すことは容易ではありません。けれど兎に角やつて見ませう。」

「父をお呼びませうか。」

「一寸待つて下さい。まだ二三承はりたい事がありますから。先刻あなたは大佐が電報を受取られて直ぐ自動車の用意を命ぜられたとおつしやいましたが、電報の來た時からお父さんの出懸けられた時まで、どれ程の間がありましたか。」

「高々十五分程です。」

「書類をしまはれた時にあなたは傍にお出でしたか。」

「父が手文庫へ入れて更に金庫に納めるまで、見て居りました。それから私は二階へ上りましたが二度目に降りて來た時は、父が走り戸を掛けた後でした。」

「大佐は部屋を出られた時に確かに戸に錠を下されましたか。」

「それは確かです。」

「お父さんは歸らるゝなり寢室へ上つて行かれたと言ふ事ですが、寢室にもベルギー製の敷物がありますか。」

「はあ。」と彼女は少しく驚いて答へた。「どうしてそんな事をおたづねになりますの。」

「道があの通り泥濘つて居りますから外から直接來らるれば敷物に跡が附く筈です。若しさうでなくて……。」

「何故そんな事をおつしやるのでせう。」と彼女は遮つて言つた。「父は足跡を残す筈がありません。カバ―を着けてあまして方關でそれを脱ぎましたから。」

「大佐が街へ行かれましてから、表はまだ乾いてゐましたでせうか。」

「はあ。雨の降り出したのは六時頃ですから。」

カリングはそれを手帳に書き加へた。それから彼女の不安さうな顔を驚いて見つめた。

「よくお聞かせ下さいました。」と彼は言つた。「あなたのお話は大變爲になりました。」

「それであなたはもう何か重要な御發見をなさいましたでせうか。何か手掛りを得られましたか。」と彼女はたづねた。

「それをお話するにはまだ早すぎます。」と彼はその問題に觸れる事を嫌つた。

「さうおつしやらないで何卒聞せて下さい。ほんたうに聞きたくてなりませんから。」

「ではお話しますが。」とカリングは彼女が餘り熱心になつて來たので笑つて言つた。「僕はある事實を突き止めました。それはお父さんの留守に、客室から一人の男が走り戸を開けて這入つて來たといふ事なのです。」

「そんな筈はない。」

「この時彼の後の方で聲がした。」そんな筈はありません。確かにそんな筈はありません。」

「その間にか大佐は這入つて來てカリングの言葉を聞いてかう言つた。彼はいかにも失望した様子をしてゐたが、さすがに嬉しさに探偵に挨拶をした。」

カリングは大佐の長靴を見てつい今し方カバ―無しに外に居たに違ひない事を知つた。それ故先刻令嬢が大佐のカバ―を附けてゐたと言つた事は間違ひであるか、或ひは大佐が歸宅後更に戶外へ出たのであるか何方かである。

然しカリングはその事については何も言はなかつた。と言ふのは敷物の上に附いてゐた靴跡が大佐の附けたものでない事を知つたからである。大佐の靴の形は靴跡とは全く違つてゐた。

「あなたに來て貰つて居るだけでも大變心強いです。」と大佐は言つた。「どうかあの書類を取返して下さい。どんな費用でも拂ひますから。而も大急ぎにやつて貰はなければなりません。今回の出來事を誰にも聞かせてはなりませんから。」

「出來るだけの事をいたします。併し斷わつておきますが僕には何もお祕しなさつてはいけません。どんな質問にもはつきり答へていただかなければなりません。」

「なんでもたづねて下さい。」

「ではお聞きしますがあなたが急に街へ出懸けられるやうになつた電報はなんの要件でしたか。」

此質問は大佐に取つてはいかにも迷惑であるらしかつた。彼はその答へを避けようとして言つた。

「あの電報はこの事件にはなんの關係もありません。」

「然し僕はその電報とこの窃盜とに密接な關係があると思ひます。」

「けれどその質問に僕はお答へ出来ません。」と大佐は手短かに言つた。「電報はこの事件とは絶対に關係がないです。」

カリングは不思議さうな眼付きをして大佐を眺めた。

「初手からもうこの通り秘し事があつてはとても事件の解決は難かしいです。」

「そんな馬鹿な。どうしても必要ならば電報を見せますよ。併しどうして閉ざされた部屋の中へ人間が這入り込んで来たかと言ふ謎を解くには電報は要らないぢやありませんか。」

「それこそ馬鹿げて簡単な話です。御覽の通り何も奇蹟は起つて居りません。盜賊はこの戸をある方法で開けてこの道から通つたのです。」

かう言つてカリングは客室を通ずる廣い扉を指さした。

「そんなことのあるはずがありません。象が針の穴をとほつたと言ふ話と同じに、有り得べからざることです。」

「それは本氣でおつしやいますか。」とカリングはたづねた。

「では證據を見せませう。この小さなものを御覽下さい。」かう言つて大佐はカリングに、舊式な飾りの付いた銀製の鍵の形をしたものを見せた。

「是は非常に精巧に造られた安全錠です。この軸を扉の錠の鍵穴へさしてこの平たい小さな鍵で掛けるのです。すると是が門と同じ作用をします。」

「門でも馴れた手ならば折り切る事が出来ますよ。」

「そりやさうかも知れません。併しこの門が普通のと違ふ所は一旦掛けた以上取去られたり開けられたりすれば必ずわしに知れる事です。」

「どうしてですか。」

「今にお目にかけます。」と大佐は得意げに言つた。「わしは是まで種々な器械の製造に携はつて來ましてこの器械もわしが發明したのです。この装置を人に話すのはあなたが始めて、すから秘密をよく守るといふ條件がなくてはお話出来ません。」

「確かに秘密を守ります。」

「よろしい。かうなんです。」

かう言つて大佐は小聲でその不思議な錠を説明した。カリングは初めの中は大佐の發見に餘り重きを置いてゐなかつたが、大佐が話し終つた時には別の考へを抱くに至つた。

「成程立派なものです。實に天才的な發明です。お目出度うと申上げたいです。」かう言つて彼は熱心の餘りその錠を試す爲に走り戸を閉めてその鍵穴に門をはめてそれをねぢ廻した。それから再び開いてその道具を熱心に觀察した。「最早疑ふ餘地はありません。道具その物は馴れた盜賊ならば何

でもなく破りますが、開けられた時には必らず分るやうになつて居ります。この點だけは僕が降参いたしました。」

「ですから僕の留守中に誰もこの道から這入つた者がないと斷言出来るでせう。」

「その通りです。あなたが扉を閉められた瞬間から再び開かれるまでは窓からも扉からも誰も這入らなかつたに相違ありません。」

「それだのにその留守に窃盜が行はれたのです。」と大佐は絶望して言つた。

「さうです。」とカリングも眞面目な心配さうな顔をして答へた。「いかにもさうです。それにも拘はらず窃盜が行はれたのです。」

第五章 びつくり

レオ・カリングは再び走り戸の検査を始めた。隅といふ隅、合せ目といふ合せ目を盡く検査して到る處を叩いて見た。最後に彼は框の方に移り同じやうに精密に調べた。殊に枠の上の方を熱心に調べたが、調べ終つた時彼の顔には満足の色が幽かに浮んだ。

「いかにも奇怪な事件ですが矢張り僕は初めの主張を捨てません。いや、あなたのお歸りになる直ぐ前に、一人の男が後の庭から客室を通つてこの走り戸を開けて這入りました。」
大佐は妙な笑ひ方をした。

「カリングさん。是までわしはあなたの評判をよく聞き、あなたの超人的な鋭い觀察力について感心しましたが、どうも是では噂が信じられません。」

「とお思ひですか。」かゝ言つた彼の語調は少し嘲罵的であつた。

大佐はそれに氣附いて顔色を變へた。

「若しあなたが窃盜の有様を詳しくお話下さるならば世間の噂を信じますよ。盜賊の年齢、身長、その髪の色、服装の模様を言つて見て下さい。もうあなたには分つてゐる筈だ。」

「それはこの際問題ではありません。その點に就いては僕はまだ何も存じません。然しあなたのお留守中此處に他の男がゐたといふ證明は與へられません。その證明はあなたが例の錠を以つて反對せらるると同じに論理的のものです。」

誰があなたをお訪ねしたかと言ふことは推察して居りますけれど、まだお話は出来ません。けれど二三の事實を是からお話いたします。

その男は立派な服装をしてカバーは穿かず手の内側、いや恐らく一本の指に傷をしてゐて此處へ来た時、その傷からまだ血が出て居りました。そして何か怖れてゐたらしく大急ぎで這入つたため、此處へ来たといふ跡を消す事が出来ませんでした。」

大佐は馬鹿なと言ひかけたが無理にそれを止めた。彼はカリングが只彼をやり込める爲にい、加減な作り事をしたのだと思つた。

然しカリングの言葉はラーニヒルドにとつては全く別の力を持つてがんと響いた。彼女は再びトルハルトの事を考へねばならなかつた。カリングの言つた盗賊の服装や指の傷や、急いでゐたといふ事や、時間の點はどうしてもトルハルトと思はずに居られなかつた。然しトルハルトはどうしても窃盗をしたとは思はれない。彼は一時、父の眼を避けてヴェランダから大佐の下りて来る前に逃げ出したに違ひない。而も父は走り戸を確かに閉めておいたのである。それ故その戸を開ける事はシキステンに取つても不可能でなくてはならない。だから中尉の事を考へるのは愚の骨頂である。それにも拘はらず彼女は氣掛りでならなかつた。彼女は例の「土龍の王」と署名した手紙の文句の中に、中尉が尊敬すべき人ではないと書かれてあつた事を思ひ起した。

「成程こゝに誰か居たと言ふことは書類が盗まれたことから否定することは出来ない。」と大佐は言つた。

「然し盗賊がどうして出這入りしたかといふ事は少しも理解が出来ません。」

「今に段々分つて參ります。」とカリングは確信を持つて言つた。たとひこの錠がはめられてあつても確かにそれを破つて這入つたのです。併し今はこれを説明してゐるよりも、もつと大切な事に取り掛らねばなりません。言ふまでもなく盗まれたものを出来るだけ早く取返さねばなりません。」

「無論さうです。然しそれは出来る事ですか知ら。」

「出来ない事ならばこの事件をお引受けはいたしません。どうか手文庫の鍵をお貸し下さい。」

絶望の太息を吐いて大佐は彼に鍵束を與へた。

カリングは手文庫を開いてその中の物を熱心に調べた。

「盗まれたのはどういふ秘密書類でしたか。」と彼はたづねた。

「それは残念ながらお話し出来ません。」

「ではあなたはどんな書類か知らないまゝ、取返させようとなさる心算ですか。」

「それでは。」と大佐は暫らく考へてから言つた。どう言ふ封印と番號が附いてゐたかを話すがどうですか。」

「それだけでは不十分です。」とカリングはきつぱり答へた。「封印や番號は容易に取換へることが出来ませんから。」

「するとそれ以上説明は出来ません。」と大佐は簡単に答へた。

その時、カリングは手文庫の蓋をバンと閉めた。その音は二人をきよつとさせた。彼はそれから大佐の方を向いて言つた。

「あなたは随分神経質になつて居られます。」と彼は冷静に言つた。「然しそれは無理もない事です。僕に説明を拒んで、いはゞあなたは自分の船に火をつけて居られます。即ちあなたは救助の爲に全力を注いで而も船そのものをなくしてしまはれるのです。」

「或ひはさうかも知れませんが。」と答へて大佐はうつむいた。けれどそれより外、致し方がないぢや

ありませんか。私自身としても多少の注意を拂はなければなりません。と言つて何もあなたを信用しないわけぢやありません。」

「よろしい。」と探偵は言つた。「もうあなたからその秘密を聞き出さうとは致しますまい。もつとももうその秘密は僕に分つてゐますけど。」

再び大位の顔には苦笑が浮びかけた。嘲笑であるべき筈のものが濫面に變つて行つた。

「さうですか。」と彼は言つた。「あなたはこの書類を御存じですか。」

「知つて居ります。」とカリングは冷静に答へた。「僕故にあなたの義務を破つていたゞく必要はありません。どういふ書類であつたかはよく存じて居ります。」

彼はいかにも確信有る者の如く力強く言放つたので、大佐は急に立ち上つて彼の傍へ歩き寄つた。

「知つて居られる筈はありません。」と彼は叫んだ。

「とお思ひになりますか。それでは證據を擧げませう。それはある地方に新設さるゝ要塞の設計圖です。その地方といふのは……」

最後の言葉を驚いた大佐の耳の中へ囁き込んだ。

大佐はさつと顔を蒼くした。

「どうして。誰から聞いたのです。」と彼は聲を慄はして叫んだ。

「それから沿海防衛の設計圖は……。」

再び最後の言葉を大佐の耳へ囁き込んだ。

「どうして。」と大佐は益々昂奮して叫んだ。「どうしてそれが分つたんですか。古い設計を見たのですか。」かゝ言つて彼は机の抽斗を開けて書類の束を取り出し机の上に置いた。「御覽なさい。」と彼はそれを開けながら言つた。「これが廢棄された古い設計圖です。あなたは何處かでこれを見て白痴脅しをする心算ですか。」

「そんなことは決して致しません。」とカリングはつんとして答へた。「僕は決して書類を見たことがありません。」

「では益々分らなくなつた。」と大佐は氣を腐らして言つた。

「實際あなたはいつもこの大切な書類を机の抽斗などに入れて置くのですか。」とカリングは訊ねた。

「それは少しも危険がありません。これは廢物ですから、間諜は嬉しがつて盗むかも知れませんが、むしろその反對です。」

カリングはその書類を徐々にはぐつてやがて言つた。

「成程さうですな。新しい設計圖では要塞は……。」

そこで再び最後の言葉を大佐の耳に囁いた。「そして全く違つた基礎の上に立てられてあります。」

それからなほ彼ははぐつて行つた。そして二三の紙を取出しながら、「この點は今度の設計圖には全然取り入れてありません。」

大佐は餘りに驚いて長い間、ものを言ふ事さへ出来なかつた。遂に彼はカリングに寄り添つて兩眼を輝やかし、兩手を握つて怒りに聲を慄はせながら言つた。

「一體何處から聞出したのですか。あなたはよもや……。」

「國事探偵だとおつしやるのですか。」とカリングは笑つて遮ぎつた。「その點は安心して下さい。僕は却つてすべての間諜の最も危険な敵です。」

「然し……。」

大佐は再び言ひ掛けたがカリングに遮ぎられた。

「そこで、今、僕がいつでも欲する時にあなたの書類の内容を研究する事が出来ると申しましたらあなたは恐らく僕を誑吐きか又は手品師だと思はれるでせう。」

大佐はうなづいた。探偵のいかにも自信のある様子が段々彼を征服した。

「ところが僕にとつてそれくらゐ容易な事はないのです。」とカリングは續けた。「と言ふのはです。い、ですか。盗まれた書類は皆あなたの手文庫にちやんとありますから。」

この言葉を聞いて大佐は恰で雷にでも打たれたやうな様子をした。はじめ彼はカリングが又冗談を言つて居るのではないかと思つてカリングの顔をちらと眺めたが、やがて緊張に顔を蒼くしながら手文庫の傍へ駆け寄つて慄へる手先でそれを開いた。次の瞬間その部屋から歡喜の叫び聲が起つた。言ふまでもなくカリングの言つた言葉がほんたうであつたので、大佐は思はず聲を上げたのである。

彼は書類を取り出して前に置き、熱心に調べて手帳に書かれた符號と比較した。

何といふ奇蹟が起つたのだらう。すべての書類は彼が出懸ける前に入れて置いたと同じ順序に再び發見せられたのである。

第六章 蓄音器

「そこでこれからもつとよく事情を考へて見ませう。」とカリングは大佐が少し落着いてから言つた。

「無論この書類が實際盗まれてゐたものと假定して……。」

「何を言ふのです。」と大佐は聲を荒らげて言つた。「先刻わしが手文庫を廣げた時は白紙が入れてあつたばかりです。わしだつてまだ氣は違つてゐません。」

「確かに間違ひはありませんね。」

「無論です。一枚々々改めて見ました。」

「それはわたしも保證します。」とこの時、ラーニヒルドは熱心に言つた。「傍に立つて居りました。一字も書いてはありませんでした。」

「さうですか。では書類はあなたの御歸宅の時に失つたとして仕事にかゝりませう。」

「けれどまた戻つて来たんぢやありませんか。」と大佐は得意げに言つた。

「餘り喜び過ぎぬやうにして下さい。」とカリングは眞面目な顔をして言つた。「も一度事情をよく考

へて御覽なさい。書類があなたの留守中に失つてつい今し方不思議な方法で再び返つて来ました。するとどれだけの間人手に渡つてゐたと思ひますか。」

「それをわしが知らう筈はありません。」

「どういたしましたして、容易に分る事ではありませんか。勘定して御覽なさい。凡そ八時間かそれ以上間諜の手に渡つてゐた事になります。それだけの時間があれば寫し取るのにわけはありません。」

「八時間ですつて。それは僕が出懸けるなり直ぐ盜賊が這入つたと假定してのこととせう。そんな筈はありません。ねえ、さうぢやないカラーニユヒルド、あれからまだお前は長いこと客室にゐたらう。」

「さうですよ。ほんの二三分、物を取りに二階の部屋へ行きましたがそれから直ぐ歸つて七時半までずつと居ました。もつとも晝食の間だけは別ですけど、それに食堂に通ずる扉は開けてありましたから、客室へ通ふ人は直ぐ見つかるわけです。」

「お聞きになりましたか。」と大佐は言つた。「七時半前にはそれ故盜賊は這入らなかつたし、僕が家に歸つたのは九時半少し過ぎでした。」

カリングは肩をすくめた。

「寫眞に撮ればわけなくやれます。」と彼は言つて椅子に腰を下したまゝ、頭を両手でおさへた。五分間の沈黙の後、カリングは再び立上つた。悪感が彼の全身を慄はせた。

「實は僕は病氣でして。」と言はゞ申譯のやうに言つた。「重いインフルエンザに罹つてまだ充分熱が去つて居りません。ですからいつもの元氣もなくはつきり考へる力もありません。これは非常に残念な事です。この込入つた事件を解くには明敏な冷靜な頭腦が要ります。最も大切な事は敵の仕事の方法及び計畫を見破ることです。彼等の行動は一寸見たところいかにも不可解であつて又いかにも亂暴な行り方です。例へばこの書類を再び返して來たのはどういふ心算なのでせうか。」

「それは大して難かしい事ではありません。」と大佐は熱心に言つた。「恐らくかうして人手に渡つてゐたといふ事を報せない心算だつたのでせう。」

「或ひはさうかも知れません。けれど大切な問題はこの書類が返される前に寫し取られたか又は寫し取る必要のないくらゐ充分研究し盡されたかといふ事です。」

「この精密な設計を數時間に研究するといふ事は決して不可能です。少なくとも數日を要します。」

「すると書寫したといふ事になります。僕はどうも書寫することも不成功に終つたのぢやないかと思ひます。多分その書類を取出した時にあなたがおかへりになつたものだから大いに狼狽して再び夜中にも取りに來て寫しを作る心算で一旦返しに來たのでせう。あなたのおやすみの間に寫し取る事は充分可能ですから。」

「さう言へばさうかも知れませんが。」と大佐は答へた。

「然しこれはいゝ方に考へて見ただけの事です。」とカリングは言葉を續けた。「ですからその反對即

「書類が全部寫し取られて不用になつたから返されたものだ」と考へて出發した方がよからうと思ひます。」

「無論さうです。」

「あなたは何でもない事のやうに言はれるが。」と大佐は焦々して言つた。「どうしてそれを取返す事が出来ますか。」

「間諜達がまだ發見されないと思つて居れば、今頃は全然安心して居るに違ひありません。」とカリングは説明した。「そして彼等をして何時までもさう信ぜしめて置かねばなりません。彼等を欺むかうと思へば少しも彼等に氣附かれないやうに注意をしなければなりません。さもなくて少しでも危険だと見てとれば直ちに安全地帯へ逃げてしまひます。」

「然しわしには彼等に打勝つ豫想が少しもありません。」

「さうとも言へませんよ。既に彼等はある意味に於いて失敗してゐますから。」

「だつて書類を寫した以上は失敗ではないぢやありませんか。」と大佐は反對した。

「いゝえ、たとひさうとしても失敗です。と言ふのは既に申上げた通り彼等は書類を借りた事を發見されないと思つてゐるに違ひありませんから。その點は確かに失敗です。」

「わしの不意に歸つた事が恐らくその原因となつたのでせう。」

「無論さうです。あなたが翌朝おかへりになれば多分あなたは書類が留守中に盜まれた事を氣附かれ

ますまいから。そして恐らくその仕事を内證で續けたに違ひありません。なほまた間諜共は——無論

二三の證據から一人でない事は明らかですが——その計畫を秘密に遂行したに相違ありません。」

「彼等はわしの日常の舉動を随分よく知つてゐるに違ひない。」と大佐は考へて言つた。「殊にこのベルクハイム莊の事をよく知つて居るに違ひありません。それを知らずにわしはその惡漢達を近づけて居りました。」

「いかにもさうです。間諜といふものは自分自身であらはれるか或ひは目的を報されないうで盲目的に働らく手下を使ふ者です。それですから僕はあなたがどんな客に今日接せられたかと言ふ事をお聞きしたいと思ひます。多分誰方かお客様がありましたでせう。」

「たつた一人ありました。それは若い中尉で特別な用事があつて訪ねて來たのです。然しこの事件とは少しも關係がありません。」

「書類がお宅にある事を誰か知つてゐた人がありますか。」

「恐らくありません。わしはそれを嚴重に包んだ黒い手鞆に入れて家へ持つて來まして、一度も眼を離した事はありませんでした。」

「その中尉の方はあなたが機密書類を取扱かはれて居る事を見ましたか。」

「確かに見たでせう。わしは士官の前では祕しませんが。」と大佐は語調を強めて答へた。

「その他の客はありませんでしたか。」

「一人も無かつたです。」

カリングはそこで今まで二人の會話を熱心に聞いてゐた令嬢に向つてたづねた。

「あなたは大佐が街へお出懸けになつた時からこの室におゐでになりましたか。」

「はあ。」

「その間お宅へ誰も来ませんでしたか。」

「はあ。」と言つた彼女の答は恰もその質問が彼女を苦しめたかのやうな調子を帯びてゐた。

カリングはそれを知らぬふりして言葉を續けた。

「誰方か知つた方で大佐に用があつて来た人はありませんでしたか。」

ラーニヒルドはこの質問の爲に顔が赧くなつたやうな氣がした。彼女は内心少しく狼狽して直様

それを否定する事は出来なかつた。

カリングが探るやうな眼付きをして彼女を見つめると、彼女は益々顔を赧くした。大佐は大きな心

配の爲に心を奪はれてゐてそれには氣附かなかつた。

「わしが晩に歸つて来た事は實に幸福だつた。」と一人言のやうに言つた。

「若しさうでなければ今ごろ萬事は駄目になつて居ります。」とカリングは眞面目な顔をして言つた。

「惡漢共は確かにあてがはづれたに違ひありません。彼等は電報故にあなたがもつと長く滞在されると思つたでせうから。」

「電報ですつて。」

「さうですとも。何も驚ろきになる必要はありません。あなたもこの電報が間諜の仕事だといふ事は夙くに御承知でせう。多分その電報はあなたに取つて大切なものですから間諜共はそれをも取返しはしなかつたかと僕は思ふのです。」

これを知りて大佐は急いで上衣のポケットへ手を入れた。そして驚ろきの叫び聲を發した。

「確かに此處へ入れたはずだが。」と彼は顔色を變へて言つた。「それともマントに入れたかしら。」

かう言つて彼は立關へ急いで行つた。

父の立去つたのを見るや否やラーニヒルドは眼を輝やかしてカリングの方を見た。

「あなたはまあどうしてあんな……」と彼女は言つた。「あなたは私が見て……」

「僕がお父さんのポケットから電報を取出した事をですか。」とカリングは極めて平氣で言つた。「無論あなたにはかくさない心算でやつた事です。この電報がなくては事件の解決が出来ない事をよく御

承知でせう。」

「さうかも知れませんが。けれどそれかと言つてすりのやうな行爲を許す事は出来ません。私は電報の在所を父に話します。」

「そりやいけません。そんな事をなさつてはいけません。何處までもあなたがお父さんにお話になるなら私もあなたがお父さんの留守中に楽しい會合をされた事をお話いたします。」

ラーニユヒルドは顔色を變へた。

「どうしてあなたはそれを。」と彼女は吃つて言った。

「僕は祕密を發く能力を持つて居るのです。ですからあなたも僕の敵とならずに味方となつて下さつた方があなたの爲になると思ひます。僕もこの事件があなたを卷込むやうな事があつた時にはあなたの爲になり得るだらうと思つて居ります。」

ラーニユヒルドは憎らしさうに探偵を見て言った。

「目的の爲には手段を選ばぬといふ方ですのね。」

「さうではありませんよ。正面から堂々とやつて行ける時には決してかう言ふ手段を取りません。然し祖國の安危にかゝる間諜を逮捕しなければならぬやうな時にはどんな手段をも選びません。それはさうとお父さんが歸つて來られたやうです。確かに電報を探しに寢室へ行かれたのでせう。で恐れ入りますが女中を起して下さいませんか。一分間も無駄に費やしてはなりません。直ぐ訊問したいですから。」

「どう言つて起しませうか。」

「盗人が這入つたとおつしやつて下さい。しかし何が盗まれたかといふことをお話になつてはいけません。」

ラーニユヒルドが立去るとカリングは大佐の這入つて來る前にチラとその電報に目を通した。大佐の機嫌は益々悪く探偵の質問に對して極く簡單に返答するばかりであつた。

「あなたが書類を文庫にお入れになつて金庫に納め、戸に錠を下されたとき、あなたお一人限りでしたか。」

「確か娘が居りましたよ。」

「その他には。」

「誰も居ません。」

「すると誰かゞ同じ形をした手文庫と取換へたといふ事は考へられませんねえ。」

「けれどさうとすると、わしが書類をなにか入れて、まだ蓋をせぬ先にしなければならんぢやありませんか。」

「さうです。」

「それは全然不可能ですよ。わしと娘の他には誰も居ませんでした。わしは書類を入れるなり金庫に手文庫を納めその場で金庫の錠を下しました。それから直様戸に錠を下しました。」

「自動車の用意が出來たとあなたに告げたのは誰でした。」

「確か娘でした。客室の窓から見たのです。」

「さうですか。」

「すると直ぐ下男が迎ひに來ました。」

「この部屋へ這入りましたか。」

「いゝえ。走り戸に錠を下したところで、下男とは客室で逢ひました。」

「すると下男には嫌疑をかけないでもいゝですねえ。信用のおける男ですか。」

「今まで使つた下男の中でジョンほど善い男はありません。ジョンはなんでもやつて呉れます。下男でもあれば馭者でもあり自動車の運転手でもあります。馬を大變に可愛がりまして取扱ひも實に上手です。」

「大變な男ですなあ。年は幾つですか。」

「三十ばかりです。身許證明書は實に立派なものです。見せませうか。」

大佐はそれを取出すべく再び金庫を開いた。

「をかしい。確かに此處へ入れておいた筈だが。」と彼は言つた。それから机の抽斗を調べて見てもたうとう見つからなかつた。

「何處かへ置き違へたのかしら。」と大佐は言つた。「わしは時々思ひ違ひをします。然しジョンは今申上げた通り少しも疑がふ可きものではありません。わしは全然信頼して居ります。」

「もう長いこと居ますか。」

「半年以上です。」

「それだのにそんなに信用を得たのですか。」

カリングのこの言葉には驚き以外の何物かを含んでゐた。少なくとも大佐はそれを疑惑の含まれて居るものと解釋して顔色を變へ、力を籠めて反對した。

「お聞きになつた通りわしはジョンを自分自身のやうに信用して居ます。これだけ申せばもう澤山でせう。」

彼は明らかに憤慨して居たやうである。そこでカリングは自分の質問が大佐に不愉快な感を與へたと見て取つて急に話題を變へた。

「おや。蓄音器が御座いますねえ。」かう言つてカリングは箆筒の上の蓄音器を指さした。「ラッパ無しですから最良品で御座いますねえ。」

「ほんの飾りです。」と大佐は答へた。「家内が好きでしていつもカルーソーやホールゼルなどをやりました。亡くなつてからは少しも使ひません。」

「するともう五六年お使ひになりませんのですねえ。」とカリングは言つた。「折角のものを惜しい事です。」かう言つて彼は蓄音器の傍へ歩き寄つて精密に觀察した。彼の顔には驚きの表情が浮んだ。蓄音器はその横側を部屋の方に向けその側に箱の漏斗が開いて居た。カリングはその口を覗き込んで箱を廻し、うんと力を出して此方へ引き寄せた。大佐は彼が蓄音器の裏側を熱心に見て居る事に氣附いた。それから彼は再び蓄音器を元の位置に返した。

「この部屋を掃除するのは誰ですか。」とカリングはたづねた。

「女中ですよ。何故そんな事をおつしやるのです。ほこりが溜つて居ますか。」

「さうです。をかした事は筆筒にはほこりがあるに拘はらず蓄音器にはほこりが無い事です。」

「それをどう考へますか。」

「つまり今日誰か蓄音器を廻したに違ひありません。お聞きにはならなかつたかも知れませんが、確かに廻したに違ひありません。」

「そんな馬鹿な事があるのですか。」と再び大佐は怒りかけて言った。「最と明瞭説明して下さい。」

「あなたは間諜共があなたの舉動を何もかも知つた事に驚かれたではありませんか。」と探偵は答へた。「それはこの蓄音器がこの部屋で話されるすべての事を裏切つた爲です。」

「そんな筈はない。」

「この蓄音器は簡単に電話の装置に變へられて居ます。中の方の漏斗はその漏斗の後部に附いた振動膜に音波を集めます。その部分には音聲擴大器が附いて居ります。つまりこの箱は一口に言へば極上の送話器と變へられて居ます。この部屋で語られたどんな事も先方へ送られる事になつて居ます。後の方に電話線が附いて居ましたが僕は今それを取除きました。それ故もはや今僕等の話す事は聞かれらる憂ひはありません。」

「するとこの部屋で話されたことは皆立聞きされたといふ事ですか。」と大佐は蒼ざめて言った。

「一語残らず聞かれてしまひました。多分間諜達は一方の端に音聲記録器を附けて居るでせう。」

「それではわしは自分の家に居りながら悪漢どもに取り圍まれて居るのですか。」と大佐は驚いて叫んだ。

「それ等の間諜共はあなたの秘密を知る爲にはあらゆる手段を講じてゐるのです。この事件を解決するまでには恐らく僕は激しい戦ひをしなくてはならないだらうと思ひます。と言ふのは間諜共は今や警戒する事になつたのです。それは彼等は今僕等が窃盗について話した事を聞いてしまひましたから恐らく書類の寫しを安全地帯へ運ぶに違ひありません。」

「わしはいよく駄目だ。」と大佐は絶望の聲を上げた。「とてもこんな悪漢達と戦ふ事は出来さうもない。」

「然し僕は戦つて見せます。」とカリングは力を籠めて言った。「未だ嘗つて僕は失敗した事がありませんが。間諜共とも屢戦つて来て居ます。」

「それを聞けば幾分安心が出来ます。どうしてこれから手を下さうとされますか。」

「先づ第一にこの電話線が何處へ引いてあるかを調べねばなりません。」かう言つて彼は筆筒を少しく壁からあざらせた。「若し戸外に電話が引かれてあればあなたもお氣附きになつた筈です。」

「無論氣附く筈です。公の電話器が廊下にかけてある外にわしはなほ小さな室内用電話を持つてゐます。それは二本の電線が既の下男部屋へ棟越しにつながれて居ります。」

大佐はかう言つて机の傍の窓掛けを片寄せてカリングに鉦の上に掛けられた受話器と送話器の

つになつてゐる器械を示した。

「なるほど。」とカリングは言つた。「すると下男はその部屋に電鈴の附いた同じ機械を持つて居ますねえ。けれど下男があなたに話しかけたい時はどうするのです。」

「わしはさういふ習慣を許さないので。」と大佐は誇らしげに言つた。「わしが下男を呼び出すばかりで下男には呼出させない事にして居ます。」

カリングはその電話を多大の興味を以て調べた。彼は受話器のかゝつて居る盤の後側まで、觸つて見た。すると其處には振動器用の小さな電磁石が附いて居た。即ち大佐があゝ言つたにも拘はらず、小さい音ではあるが下男はいつでも大佐に合圖をする事が出来るわけである。それは果して何の意味であるか。何故大佐はそれを祕さうとしたのであるか。

「すると誰でも何時でも下男に話をする事が出来るわけですね。」とカリングはたづねた。

「いゝえ。實はこの器械はこの頃中使へないので。わしはまだそれを直させてゐないので。電鈴は併し通じて居ますがたゞ電話で話は出来ないのです。」

「成程それで充分なわけですねえ。」とカリングは言つた。

「それはさうと蓄音器から何處へ通じて居るのですか。あなたはそれを発見されたのですか。」と大佐がたづねた。

「発見しましたよ。併し今女中が此方へ来るやうですから二三訊問して見ようと思ひます。」

第七章 走り戸の問題

フォン・ヘーデン嬢が二人の女中を伴つて這入つて来た時、カリングは直ちに訊問を始めた。年取つた方はレーナと言ふ料理女で一日中臺所で働いてゐた旨を答へた。彼女はトルハルト中尉が午前大佐を訪ねて相當の時間、居つて行かれた事、電報配達の來た事を知つて居るだけでその他には誰も來ないやうであつたと言つた。

女中のアンナは可愛らしい顔をした女であるが矢張り多くを語る事は出来なかつた。然し彼女は電報配達の風采をよく知つて居て今まで一度も見た事のない人であると語つた。年は十六位であつたが妙な感じのする男だと言つた。

「番號を覚えてゐますかね。」とカリングはたづねた。

「いゝえ。」

「何か見覚えでも無かつたかね。」

「青い眼をした黒い髪の男でした。」と彼女は暫らく考へてから言つた。「それが誠にをかしいと思ひました。それに毛は縮れて長いこと理髪しない様子でした。本當に綺麗な顔をした男であんな美しい人は今まで見た事がありません。」

「ではこの次會へば直ぐ思ひ出せるね。」

「思ひ出せませすとも。」

「どうしてそんなにあなたは電報配達に重きをおきなさいますの。」

とラーニユヒルドは好氣心に驅られて言つた。

「僕は今日此家へ来たすべての人に重きを置きます。」とカリングは答へた。「大佐のお出懸けになる前と留守中とに拘はりません。」それから彼は再びアンナの方に向いた。「御主人の留守に來た人は無かつたかね。」

女中はラーニユヒルドをチラと盗み見て大膽に「いゝえ。」と答へた。

「下男が自動車で歸つたのは何時だつたかね。」

「三時半頃だつたらうと思ひます。」

「この部屋を掃除するのはあなたの役でせう。」

「さうです。」と女中は驚いて答へた。

「箆筒を掃除したのは何時でしたかね。」

女中は眞赤な顔をしてカリングを怨めしさうに眺めた。

「それは旦那様がおたづねになる事ではありませんか。」

「この方の質問に返事して呉れ。」と大佐はぶつ切ら棒に言葉を挟んだ。

女中は人々の顔を交互に眺めた。

「少しお粗末に致したかも知れません。」と聲を顔はせて彼女は答へた。「今日は箆筒にはたきをかけませんでした。」

「蓄音器にもかね。」

「はあ。」

「いつも拭く時には蓄音器をゐざらかすかね。」

「滅多に動かしません。」

「よろしい。そこでお下男は自動車で歸つて來てからずっと家に居ましたかね。」

「はつきりした事は存じません。」と彼女は頭を不作法に動かして言つた。ジョンの守りをしては居りませんから。」

「さうでせう。僕もさう思つた。けれど歸つて來てから長い間留守だつたか、又何か特別な事をして居た位は氣が附かなかつたかね。」

「よく存じません、けれど今日も誰か訪ねて來たやうでした。」

「いつもよく訪ねて來る人があるかね。」

「はあ。よく訪ねて來ます。けれどどんな人が訪ねて來るのか、一度も見た事がありません。」

「どうして。」

「その客と言ふのは門から這入つて來るのではないのです。」

では何處から来るのかしら。眞逆芝の上を匍つて来るのではあるまい。」

「ジョンは厩の直ぐ傍に内證で一つ別の門を造つたのです。それは母屋からは厩の蔭になつて見えません。ジョンの部屋の入口も向う側にありますから、ジョンの部屋へ出這入りする人を此方から見ることは出来ません。」

「垣根に内證の門を造つたと言ふのはほんたうかい。」と大佐は全く驚いてたづねた。

「本當です。私も此頃其處から出入りして居りました。街通りからは殊に分り悪くなつて居ります。」

「何の爲にそんな入口を造つたのか知ら。」と大佐はいよゝゝ驚いて言つた。

「それは分つて居ますわ。」とアンナはにつこり笑つて言つた。「ジョンのやうな若い人は……。ですからやりたい事をするのでせう。」

「馬鹿な事を言つてはいかん。」と大佐は怒つて叫んだ。「ジョンは眞面目な男だよ、あれくらゐ忠實に勉める者はない。そんな咎め立てをしてはいけない。」

「ジョンを伴れて來たらどうでせうか。さうすれば種々爲になる事を聞かして呉れるでせうから。」

「然し先刻あなたはジョンはこの事件に關係ないと言つたではありませんか。」と大佐は顔を曇らせて反對した。

「さうぢやありません。」と探偵は力をこめて言つた。「僕はたゞ今一時だけはジョンには關係ないと言つたばかりです。」



「それでは彼を訊問する立派な理由があるのですか。」

「立派な理由があります。今訊問しなければ飛んでもない失敗をする事になります。」

「仕方がない。」と大佐は肩をすくめながら言つて電話線の釦を押した。

人々はしばらく待つてゐたけれど下男は來なかつた。大佐は更に釦を押したけれど矢張り來なかつた。そこでカリングは女中にジョンを呼んで來るやうに頼んだ。料理女には寢床へ這入つてもよい旨を告げた。

大佐は頗る不満な様子をした。彼はカリングがくだらない事に時間を費したやうに思つた。

「あなたは何か手掛りになることを發見しましたか。」と彼は氣短かにたづねた。

「書類の盜まれた事についてですか。」

「無論です。盜人は誰で、どうして失つた書類が再び返つて來たかといふ事です。」

「そんなに一時におつしやつては困ります。」とカリングは笑つて言つた。「若し僕が誰に嫌疑をかけ

て居るかをお話したらあなたは信用して下さらないでせう。尤もはつきり證據が擧つて居りませんか。今は黙つて置きます。第二の質問はわけなくお答へが出來ます。戸は開いてゐましたし、文庫は金庫から出して机の上に乗せてありましたから。部屋が閉ぢてあつて金庫に錠が下りてゐてさへ、易々と取出したくらのみですから返しに來るのはわけのない事です。」

「けれど返しに來たのは僕が家の中にゐた時ではありませんか。」

「あなたはお歸りになつてからずつと家に居られましたか。」とカリングは大佐の汚れた靴を見てたづねた。

「さうです。歸つてから戸外へは出ません。」と顔の筋一つ動かさないうで答へた。

探偵は何とも言はなかつた。然し彼は大佐が嘘を言つたのか、或ひはカバーを穿いてゐたと言つた。ラーニユヒルドが嘘を言つたか、何方かであると思つた。多分大佐が嘘を言つて居るのだと判断した。「さうですか。」と彼は言つた。「あなたが家に居られたに拘はらず、書類があなたの御存じのない間に返つたといふ事はつまり……」

「何ですか。」

「返しに來たものは眼につかぬやうにする術に通じて居るものか、或ひは……。」カリングは再び黙つた。彼は何か適當な言葉を考へて居るらしかつた。

「或ひは何ですか。」と大佐はもどかしさうに言つた。

「或ひは家中の、自由に出入りする事の出来る者でなくてはなりません。」

大佐と令嬢は驚いて顔を見合せた。

「家の者ですつて。そんな馬鹿な、誰の事をおつしやるのですか。」

「誰に嫌疑を掛けていらつしやいますか。」とラーニユヒルドも機嫌を損じてたづねた。

「別に誰といふ事は定つて居りません。僕はたゞ二つの可能性を申しただけです。」

「たとひ盜賊がこの家の者でも錠の下りた扉を開けずに這入つた事實を説明する事は出来んぢやありませんか。」と大佐は言つた。

「あなたは扉に錠を下したく、頻りにおつしやいます。絶対に不可能と思はれる事も時として行はれる事です。これから私は……開けなくつても書類を取れるといふ證據をお示しいたしませう。」

「は、は、は。また十八番が始まりましたね。」と大佐は嘲るやうに言つた。「あなたはまるで大道の香具師が球を扱ふやうに説を立てられますが、冗談は宜加減にして止めて呉れませんか。」

「冗談ではありませんよ。」とカリングは冷静に言つた。「僕の言ふこともよくお聞きになつて僕が誤つて居るかどうかを判断して下さい。盜賊はあなたのお出懸けになる前にこの部屋に隠れてゐたのです。それにはこの道具の並べ方が頗る都合よくなつて居ります。金庫と筆筒とは隅に斜に置かれてありますから恰度その後で隠れるだけの隙間があります。それに厚い窓掛けが垂れ下つて居ります。そこで盜賊はあなたの御出發の前及びお留守中ずつとこの室にゐてあなたが再び戸を開けられるのを待つてゐたのです。」

「それは或はさうかも知れませんが。けれどさうすれば書類はずつとこの室にあつたわけで寫されなかつたではありませんか。」

「近頃は至急に寫し得る方法が澤山あります。お留守の時間はその爲には充分です。精巧なレンズと感光板とさへあれば二三時間に全部寫真に取る事が出来ます。併し何も書類はこの部屋でなければな

らぬ事はなく、容易に他の場所でも書き取る事が出来ます。」
「又ヨタが始まりましたね。」

「どういたしまして。この部屋の戸や窓を開けずに書類を取り出すのは誠になんでもないことです。御覽の通り走り戸の下は敷物にびつたりと密着しては居りません。一枚の紙を抜き差しする位は容易に出来ます、それから古い金庫の簡単な錠を開けたり、手文庫を開けたりする位の事はなんでもありません。かうすれば窃盗の模様は容易に説明がつくではありませんか。」

「うむ。」と大佐は少し恥かしく思つて言つた。「成程さう言へばあなたのおつしやる事は事實です。」
「然しこの場合は決してさうやつて盗まれたものではありません。扉や窓が閉ざされてあなたに拘はらず、あなたの留守中、この室へ這入つたものがあるのです。」

「それぢやあどうしてそんな事が出来るのですか。」と大佐は叫んだ。

「わけのない事です。試みに走り戸を閉めて下さい。僕が二つやつて見ますから。」

一同は客室へ出た。大佐は走り戸を閉めて充分注意して錠を下し、門をもちめた。

カリングはそこで戸の真中どころに椅子を持つて来てその上へ上つて框の上の端へ手をかけた。次の瞬間、弱いピシッと言ふ音がしてカリングは二つの物體を手に受けた。それは毛氈の切れの上に載つた木の栓と正方形の平つたい鐵板とであつた。框の中央には一つの穴が開いてゐた。彼は椅子から下りて錠で結びつけられてある二枚の戸をそのまゝ一緒にずつと一方に押しやると、こはそもいかに、入口の半分だけが其處に開かれた。

大佐はびつくりして暫らくの間、物が言へなかつた。彼はカリングが二枚の戸が立て合ふ所にある横の棒を取り去つた事を知つたのである。

「何といふ狡猾な奴等だらう。」と自ら大佐は椅子の上へ上つてその部分をあらためて言つた。「この横の棒だけが取れるやうになつて居る。兩脇の部分は下からのぞくと、いかにもしつかりと出来てゐるやうに見える。成程わしの部屋の方からでもこの棒は取る事が出来る。毛氈の切れが破り取られてゐるやうですなあ。」

「勿論です。盗人は静かに仕事をしようと思へば戸を閉めた方が都合がよいからこの棒を客室から取りはづして部屋の中から差し込んだに違ひありません。」

「この鐵の支へを變へるには随分長くかゝるが何時やつた事でせう。」と大佐はたづねた。
「多分夜分にやつた事でせう。尤も代りの装置を豫め用意しておいた事でせうから手早く交換したに相違ありません。それよりもこの壁に穴を開けて毛氈の切れを附けた木の栓を差込むのに随分時間がかゝつたでせう。それを誰も氣が附かなかつたのは不思議です。」

「私は夜分に度々變な音を聞いたので御座います。」とラーニユヒルドはこの時口を出した。けれど父はどうしても信じて呉れないのです。
「いやそれは矢張りお前が夢を見たのだ。」

と大佐は言った。

カリリングは探るやうな眼付きで二人を眺めた。

「初めてその音をお聞きになったのは何時ですか。」と彼はラーニユヒルドにたづねた。

「一ヶ月程前です。」と彼の女は暫らく考へてから言った。「私、それを日記に書いておきました。」

「お前日記をつけるのかい。それは知らなんだ。」と大佐は驚いて言った。

「さういふ日記が時として大變役に立つものです。」とカリリングは言った。「誰でも大切な出来事は書いておくやうにしなければいけません。」

兎に角、盗人は早くから書類を奪ふ計畫をしてゐたに違ひありません。」とカリリングは大佐の方を向いて言った。「戸は機會があれば何時でもやれるやうに準備されたのです。この蓄音器に電話の装置をするにもその必要があつたわけです。あなたには少しも知らさないでそれ以來あなたの行動はすべて悪漢共から監察されてゐたのです。」

大佐は呪ひ聲を上げた。

「あなたはかう言ふ大切な書類を度々家に持つて來られることがありますか。」

「今度が初めてです。」

「どういふわけであなたは今度だけさうなされたのですか。」

「それはある特別な理由があつたので日曜にこの邸で仕事をする事になつたのです。」と、大佐は

この質問を不快に思ふやうな風をして答へた。

「命令に背いてまでさうなさるには餘程大切な理由があつたものと見えますねえ。」とカリリングは相手を鋭く見つめて言った。もつと詳しく聞かせていたげませんか。」

「それはいけません、この事件とは何の關係もない事です。」

「さうとは限りません。確かに間諜共が書類を家に運ばせるやうにしたのです。間諜共が知つてゐたやうにあなたは日曜日にまで仕事をされねばならなかつたほど、忙がしかつたのです。つまり間諜共はあなたを自宅で仕事させるやうに仕向けてそれから質の電報であなたを誘き出したに違ひありません。」

再び大佐は呪ひ聲を上げようとした。

「一體どういふ理由で自宅で仕事をされねばならなかつたのです。何の爲にあなたは大急ぎで出懸けて書類をあとに残しておいたのですか。この事件を解決する爲にはどうしてもこの二つの質問に答へて頂かなくてはなりません。」と探偵は頑固に言ひ張つた。

「それは出来ません。何卒それだけは問はないで下さい。」と大佐は聲を咽らして言った。

「それでは仕方がない。自分で探り出させよう。僕は既にあまり深くこの事件に這入り過ぎましたから今更、手を引きたくはありません。けれど大佐殿、あなたの責任は實に重いですよ。あなたはこの事件の秘密の鍵を握つて居りながらそれを渡して呉れません。それも已むを得ません。自分でこの謎

を解いて見せます。一かう言つて彼は大佐の返答を待たずに二人の會話を心配さうに聞いてゐたらニューヒルドに向つて言つた。

「あなたに御忠告申したい事があります。それはあなたの日記を充分安全な所へ藏つて置かれることです。さもないと盗られてしまひますよ。」

「有難う御座います。直ぐ上つて行つて錠を下して來ませう。前に一度日記の置いてある抽斗が開けられた事がありますから。」

「何か無くなりましたか。」

「いゝえ。却つて無名の手紙が這入つて居りました。」

「どんな手紙でしたか。」

「内容はお話出來ませんが、名前には『土龍の王』としてありました。」

「大變な名ですねえ。成程この土龍は、晝間は顔を見せないで夜だけ仕事をするのです。」とカリングは言つた。

第八章 又々びつくり

ラーニューヒルドが部屋を出て行くとカリングは再び大佐の方を向いた。

「お嬢さんがおゐでなりませんから申上げますが、あなたのこの事件に對する態度は非常に變に思はれます。」

「それは一體なんの事ですか。」と大佐はむつととして叫んだ。

「私の申上げる事はよく分つて居ると思ひます。どんな秘密をあなたが持つていらつしやるかも知れません。なほ又あなたの個人に關係する事を無理に話させられる事はいかに不愉快であるかも知れません。この大きな目的、即ち祖國の敵を滅ぼすといふ爲には實に何でもない事に過ぎません。」

大佐の額には深い皺が刻まれた。彼の顔には悲痛の表情があらはれて突然五つ六つ年取つたやうに見えた。彼はカリングに疑惑の眼を向けたがやはり黙つて答へなかつた。

「お答へがありませんね。」と探偵は續けた。「然しよく思つても見て下さい。間諜共は既にその目的を達したのです。即ち書類を寫したか、或ひは今回は失敗しても又試るに違ひありません。吾々はただ間諜を滅ぼす他に道はありません。さもなくば彼等は又々新しい方法を見つけるに違ひありません。歐洲戦争が段々我が國に餘波を寄せて、今にも我が國を渦の中へ卷込まうとしてゐる矢先、間諜に見舞はれるといふ事は非常な大事だと言はねばなりません。ですから何卒話していただきたいのです。僕にお話になる事はどんな事があつても他へは知れません。」

「カリングさん。」と大佐は眞面目な態度で答へた。「若しあなたの言はれるやうに軍事上の秘密書類をこの家に運んで來た事とわしが留守にした事とがあなたの言はれる通りに間諜共の企んだ事であるならばわしは直ちにお話してしまひます。けれどそれは決してさうではありません。若しあなたの要

求される事をあなたにお話してしまつたならば却つてわしはある約束を無視する事になるのです。何卒わしに誓を守らせて下さい。それともあなたはわしを不信の人としようと思はれますか。」

「どうしまして。」とカリングは言つて思はず大佐に手を差出した。「決してその心算はありません。お聞きしなくつても充分目的を達する決心です。」

「ありがたう。それで安心しました。お互ひに紳士としての態度は充分たもちたいと思ひます。今更言ふまでもありませんがわしは自分を生んで呉れた祖國に對してどんな犠牲をも捧げようと思つてゐます。」

「僕もそれを信じます。一時あなたに疑ひをかけようとした事に對しては何卒お許し下さい。いまはもうその疑ひは晴れました。」

丁度其處ヘラーニユヒルドが來たので二人は話題を變へた。

「どうしてあなたは走り戸の祕密を知つたのですか。」と大佐がたづねた。

「さあ、別に大した發見と言ふほどの事ではありません。たゞ理論上さう思つただけです。走り戸と言ふものは一般に他の扉と違つて餘り安全なものではありません。是までその經驗は度々あります。既に申上げました通り、闕の無いといふ事は戸を開かずに薄い物を出し入れする事が出来るのです。僕はこの走り戸の兩側に夕方の六時以後につけられたらしいあなたのでない靴跡を見つけたのです。あなたの考案になつた錠を見てから錠が破られたのだらうと思つた初めの考案を、誰か他の方法

で戸が開けられたに相違ないと考へたのです。その時突然仕掛けが分つたのです。それに僕は客室の椅子の一つに泥の附いた靴跡のあるのを發見しました。」

「その靴跡は敷物の上にあるのと同じですか。」

「いゝえ。全く違つたものでして、敷物の上にあるもの程に、泥や砂が附いて居りません。それによつて此處へ二人の男が來た事が分ります。その一人は乾いた綺麗な靴を穿き、今一人はよく靴を拭かないで、外から走り込んで來た事が分ります。即ち非常に急いでゐたのでせう。あなたが不意にお歸りになつたのを仲間に報せる爲に飛込んで來たのか、或ひは他の事情の爲だつたかは分りませんが、兎に角戸に指紋を附けて、それを消す餘裕が無かつた程、急いだ事は事實です。」

「あなたの推理の力は感心の外ありません。」と大佐は言ひ掛けたが急に口を噤んで驚いた顔をして金庫の方をちつと見つめた。

二人も驚いて大佐の眺めた方を見つめたがその途端にラーニユヒルドは驚きの叫びを發した。とその時、突然部屋の電燈が消えた。

彼等は今し方一本の手が金庫の後からぬつと突き出されて走り戸の傍にあつたスキッチの方に伸ばさるゝのを見たのである。しかもラーニユヒルドは、驚いた事にその手の食指が血に染まつてゐるのを見つけたのである。トルハルト中尉は食指に傷をしてゐたではないか……。

人々があつと思ふ間にその手はスキッチをひねつて電燈を消してしまつた。

次の瞬間の出来事は、語るより遙かに早く行はれた。金庫の後から音をも立てずに黒い人影があらはれた。それからその人影は戸の入口にあらはれたが客室から来る光で見ると帽子を被らず、毛もちやもちやさせた脊の高い男の姿であると分つた。まるで疾風のやうに人影は客室を通つて外へ出て行つた。

カリングは直ちにその人影を追ひ掛けた。大佐はそれよりも早く矢庭に手を伸して手先に觸れた品物即ち机の上の重いインキ壺を取上げて、力をこめて逃げて行く男を目掛けて投げつけた。併しその男には當らないで、耳をかすめて遙か彼方に飛んで行き、花色の客間の毛氈に黒い中味をばつと散らした。次の瞬間、二三の扉を閉てつける音が聞え、聽て庭の上を走つて行く音が聞えた。

「年齢を取ると追ひ驅けて行けないのが残念だ。」大佐は口惜しさに言つた。「誰だつたらう、彼奴は？ あんな大膽な奴には今まで會つた事が無い。みんなの眼の前で逃げ出すなんてほんとに圖々しい奴だ。併し中々賢い行き方だ。」

「ほんたうにさうですわ。」と何か言はなければならなくなつたので、ラーニユヒルドは言つた。

「ずつと今まで此室にゐるなんてなんと云ふ偉い奴だらう。」

「私達が出懸けるのを待つて逃げる心算だつたかも知れませんか。」

「そんなことがあるものか。わざと立聞きをして居たのだよ。蓄音機の電話では足らぬので立聞きに寄越したのだらう。實際わしは幾重にも御丁寧に見張られてゐたものだ。」

ラーニユヒルドは殆ど氣絶せんばかりであつた。なんとも言へぬ心配な心持が、むら／＼と湧いて來た。彼女は今の男がトルハルトに思へてならなかつた。中尉は身を隠す爲ではなく書類を盗んだ人人に注告する爲に這入り込んで來たのかも知れない。父に復讐する爲に間諜の仲間を引きづり込まれたのかも知れない。中尉を追ひ驅けた探偵は、聽て中尉を捕へて、歸つて來るかも知れない。かう思ふと彼女は、眼が眩むやうな氣がしたので思はず身を支へる爲に腰掛けの上に腰を下した。

「馬鹿に顔色が悪いぢやないか。」と大佐は言つた。「早く床に這入つてはどうだい。」

「この場合、眠れるものですか。ほんたうに恐い事ですわ。」と言つて痙攣的な太息を吐いてその身體を慄はせた。

「まあ／＼安心をおし。萬事巧く解決するよ。カリングさんはきつと捕へて來るに違ひない。」

ラーニユヒルドの頭は種々の疑問を以て満たされた。瑞典の士官たるトルハルトの如き人が果して間諜の味方をするものであらうか。彼が味方となつた時は、間諜がどんなものであるかと言ふ事を知らなかつたのであらうか。或ひはほんの氣まぐれに事件の渦に巻き込まれたのであらうか。彼女には今逃げて行つた男がどうしても中尉であると思はれてならなかつた。彼女は直覺的にそれを信じて疑はなかつた。その上彼女は傷ついた食指さへ見たのである。

大佐は再び電燈をつけて客室のインキ壺を見つめた。インキは四邊に散らばつて敷物の上に大きな汚點を作つた。逃げ出した男と探偵とはその中へ踏み込んだと見えて、黒い靴の足跡が澤山ついてゐる。

た。彼はぶつ／＼言ひながら再び自分の部屋へ歸つて更にラーニヒルドを慰めにかゝつた。其處へカリングが息をはずませ、ぐつたりとして歸つて來た。彼は只一人きりであつた。

「捕まりませんでしたの？」とラーニヒルドがたづねた。

「駄目でした。あれは確かにランニングのチャンピオンですよ。普通の男には僕は決して負けぬ心算ですが今の奴は風船のやうに垣根を飛び越えて、鐵砲玉のやうに暗に隠れてしまひました。」

ラーニヒルドはほつと安心の太息を吐いた。中尉は少くとも一時救はれたのである。かう思つて再び自由に呼吸する事が出來た。彼女はその短かい時間に、中尉がこの事件にどういふ役割を勤めて居るかを確かめようと思つた。都合によつては彼女は彼に何かの役に立つかも知れない。彼女の希望は再び甦つて來た。トルハルトは決して不名譽な事をする筈がない。愛も憎みも決して彼を卑しい人間にするわけがない。

「一體誰だつたでせう。」と大佐はたづねた。「あなたが追ひつけない程の男でしたら、非常な運動家であるに違ひない。」

「確かにさうです。それに暗夜が敵に取つて好都合でした。」

「何だか黒人のやうぢやありませんでしたか。」

「それは確かに間違ひです。尤も誰であるかと言ふことははつきり言へませんが、大體見當がついたやうに思ひます。自分の目的の爲に、危機一髪のことでも敢てする大膽な男です。マスクを掛けてゐた

といふのは立派な思ひつきです。」

「マスクですつて。」とラーニヒルドは驚いてたづねた。

「黒いマスクを顔にかけてゐましたよ。氣が付きませんでしたか。」

「顔を見せませぬやうでしたが。」

「然し、マスクを掛けてゐたことはよくわかりましたよ。顎の下までずつと掛けてゐました。」

「悪漢を逃がしたのはいかにも残念な事だ。」と大佐は言つた。

「ところが奴は逃げおほせることは出來ません。と言ふのはあなたがインキ壺を投げて下さつたおかげです。御覽の通り敷物の上には、名刺を残して行きました。實に申分のない靴跡でこれによつて確かに捕縛する事が出來ます。」

かう言つてカリングは客室へ行つて靴跡を検査した。彼は最前大佐の部屋で取つた靴跡の圖と比較し、それから大佐自身が客室の敷物の上に残した靴跡を寫し取つた。

「どうするのですか。」と探偵のやる事を注意して見てゐた大佐がたづねた。

「かうしてあなたの名刺をも寫し取つておきますと、他のと區別する時大變に都合がよいのです。」とカリングは笑つて言つた。「マスクを掛けた男の足跡はもう先刻取つてしまつてあります。」

「さうですか。」と大佐は好氣心に驅られて言つた。「するとあの男は誰です。」

「這入つて來た時に餘り急いでゐたので足跡を消す事を忘れたその男です。」

「戸に指紋を残したのもその男ですか。」

「さうです。職業的犯罪者でない事はそんなに澤山證據を残した事で分ります。」

それから探偵は大佐の部屋を一層精密に検査した。彼は敏捷に而も精密に働いて、どんな小さな隅をも見逃さず時々手帳に書込んだ。殊に彼は金庫の置いてあつた隅を一層綿密に調べた。彼は金庫の後側と壁との距離を計つて見た。

「この隙間は餘り大きくありませんねえ。」と彼は言つた。「此處へ這入つてゐたのですから瘦せた若い男であつたに違ひありません。僕ではとても這入れませんから。」

大佐の力を借りて彼は金庫をあざらせ、その後には匍つて行つた。そこで彼はある重要な発見をしたのである。若しそれをラーニユヒルドが見たならば彼女の一縷の希望も微塵に碎かれてしまはねばならなかつた。即ち彼の見つけたのは三つの金冠の附いた、青エナメル塗りの帽子釦で造られたカフス釦であつたのである。斯様な釦は陸軍士官の帽子により他は無かつたのである。カリングは然しそれを誰にも見せないでチョコッキのポケットへ入れた。

「これで一通り僕の検査も済みました。」と彼は言つた。「今夜はこれ以上の驚くべき出来事はないやうにしたいものです。只この上は下男に少し話して歸らせて頂きたいと思ひます。」

「ジョンはどうしたのか知ら。家には居ないのかも知れん。」と大佐は言つた。

丁度その時、大佐の心の質問に答ふるかのやうに女中が慌しく駆け込んで來た。彼女は死人のやうに蒼白めて全身をぶる／＼と慄はせて居た。

「どうしたと言ふのだ。」と大佐は驚いてたづねた。

「ジョンは。」と女中は聲を慄はせて小聲で言つた。「ジョンは殺されました。」

第九章 マスク第二號

「事件はいよくドラマチックに發展しましたですねえ。」とカリングは大佐と急いで走り出しながら呟いた。

アンナが、今見て來た事を熱心に報告しようとした時、カリングはそれを遮つて二三の短かい質問を發し、その返答によつて彼は二つの重要な事實を發見する事が出來た。その一つは女中がジョンの殺されたのを發見した直ぐ後で自動車置場で黒いマスクを掛けた男によつて喰止められた事であり、今一つはその暫らく後で自動車街の方を指して走つて行く音を聞いた事である。

これによつて、カリングは下男を殺した者が恐らくその自動車に乗つて逃げたのだらうと思つた。彼は大佐に一寸待つて呉れと言つて急いで邸宅に引返した。

彼は即ち彼の最も腕の秀れた二人の手下に電話を掛け、オートバイで直ちにやつて來て若し途中で自動車に會つたら直ちにそれを追跡して見逃さないやうにするやう命令した。

探偵達の使ふオートバイは最新發明のエンジンが附けてあつて而も殆んど音を立てずに非常な速力

を出すから、自動車を内密に追跡するには至極適當であつた。

その間、アンナは他の人々に彼女が發見した事實について、種々物語つた。初め彼女はジョンの部屋が暗かつたので既に床に就いて居る事と思つた。彼女は扉を幾度も叩いたが、返事はなく、尙も激しく扉を叩いても矢張り中からは何の音も聞えて來なかつた。それ故ジョンは留守であらうと思つたが、歸りがけに念のため窓から部屋の中を覗いて見た。丁度月の光はむかう側の壁にさして居てそれによつて椅子が亂雑に投げ散らされ、その中の一つは全く壊されてゐるのを見つけた。箆筒の抽斗は盡く抽出されてあつて、見たところ空にされてあつた。いつも箆筒の上に立てかけてある鏡は隅の方に粉微塵に碎かれてゐた。殊に其處此處に血痕らしいものが散らばつてゐたので彼女は烈しい格闘が行はれた事を覺つた。彼女は非常に驚くと同時に好奇心に驅られて、充分部屋の中を見届けるために家の後に廻つて反對の側の窓の所へやつて來た。すると驚いた事にジョンは寢臺に横たはつた儘半分頭を寢臺の縁に突き出し頂に大きな傷が口を開いてゐた。ジョンが殺された事はもはや疑ひなかつた。その時彼女は氣が遠くなりかけたが、兎に角、本邸に歸つて逐一報告しようとして走り出した。すると突然恰も地の中から生え出したやうに、黒いマスクを掛けた一人の男が眼を輝やかせて彼女を喰止めた。

「何處へ行くのだ。」と彼はマスクに押しつぶされた太い聲でたづねた。「何をしてゐたのだ。面白い物を見たのだらう。氣持がよかつたか。」

アンナは驚きのあまり聲を立てる事が出来なかつた。彼女が男の傍を通り抜けようとする時、男は彼女の腕を力をこめて握つたので、思はず悲鳴を上げた。

「靜かに。」と男は脅すやうに言つた。「都合の悪い所へ來たものだ。命が惜しかつたら黙つてついて來い。」

彼女は慄へながら男について行つた。男は彼女を先へ歩ませて自動車置場の扉の所へやつて來て、それを開いて中へ這入らせた。

「五分間、此處に居るのだぞ。」と彼は言つた。「五分間、いゝかい。それよりも早く逃げ出すなら生かしては置かぬぞ。こんな美しい女を殺すのは罪だ。」

この最後の言葉は全く變つた語調を帯びてゐた。彼女は男がにや〜笑つてゐるやうに思つた。彼女は極端に腹が立つたけれど、どうする事も出来なかつた。

彼女はこの男の目印しを覺えておく爲に充分男を観察した。彼は全部黒装束で外套の襟を高く折り戻し、やはらかに大きな帽子を、頭の毛が全體隠れる程、深く冠つてゐた。そして顔一面、顎までもマスクを掛けてゐた。

アンナがこゝまで語り終つた所へカリングは歸つて來て彼女の言葉を遮つた。

「マスクは耳まで冠つてゐたかね。」

「いゝえ。普通のカーニバルのマスクのやうでした。耳の直ぐ前までありまして、ゴムの紐が附いて

あました。」

「どうしてあなたはそんな些細なことを聞くのですか。」と大佐がたづねた。

「些細な事が最も大切です。」とカリングは言った。「見たところ何でもないやうな些細な事が大切な證據になる事は度々御座います。この際この質問を發したのは、その男が先刻逃げ出した男と同じであるかどうかを定める爲です。」

「同じですか。」

「いゝえ。即ちマスク第二です。手を分けて仕事をしてゐたらしいです。」

アンナはなほも語り續けた。

マスクを掛けた男が扉を閉めて彼女がたゞ一人暗い自動車置場に殘された時、彼女は言ふに言へぬ不安の情に驅られた。彼女は大佐所有の「スカニア・ヴァヴィス」(自動車の名)の踏臺の上に腰かけて一生懸命に耳をすました。すると扉を閉てたり、道具を動かしたりする音が聞えて最後に自動車のザワ／＼言ふ音がした。間もなく四邊は靜かになつた。

彼女の心の中で好氣心と恐怖心とが戦つて居たが矢張り恐怖心の方が勝つてしまつた。暫らくの後彼女は外へ忍び出して大急ぎで本宅へ走り着いたのである。

大佐は自分の最も信頼した下男が人手に斃れた事を非常に悲しんだ。彼は眼に涙を溜めてジョンは主人の爲に惡漢達を亡ぼさうとして却つて殺されたのだらうと説明した。

大佐を鋭く觀察してゐたカリングは大佐のこの悲痛の情が心から出て居るのでないことを見て取つて、手帳の中へ次のやうに書き込んだ。

「大佐は下男之死を口では悲しんで居るが、心では却つて喜んで居る。何故であらうか。」

人々は離れ／＼に下男部屋の扉のところへ來た。道々カリングは、砂利の中にはつきり印せられた足跡を見つけた。それは何か重い物を持つて歩いて行つた足跡である。なほその他に彼方此方歩いた多くの足跡を發見した。これによつて見ると澤山の人が下男部屋と格子づくりの門の小さい扉とを度々往復したことが分つた。さうしてカパーを掛けた靴が印したらしいこれ等の不明瞭な足跡の中に、二本の竝行に走つた條がついてゐて、それは死んだ人を引ずる場合に足で附けられたものゝやうに思はれた。

カリングが下男部屋に這入ると、果して彼の想像通りに殺された下男の姿はその部屋に發見されなかつた。寢臺の傍の地面に血溜まりがあり、枕や敷布はすつかり血に染まつて寢臺の附近に投げ捨ててあつた。

「初め見た時に死骸は何處にあつたかね。」とカリングは女中にたづねた。

「前に申しました通り、頭を寢臺の端に半分ほど出してゐました。」

「それは分つてゐる。たゞ毛布の下に寝たかどうかと言ふのだ。」

「いゝえ。ジョンは日曜服を着て毛布の上に寝てゐました。」

「するとジョンを擔ぎ出すにはかうして毛布や敷布を散らばらせなくてもよいわけだね。」
「さうです。」

「たとひ大急ぎでやつたとしたところがその必要はない。」
「さうです。」

「するとどうしてこんなに寢臺を滅茶々にしたのかしら。」

「何か探したのだらう。」と大佐が言つた。「藁布團の中に金でも隠してあると思つたのでせう。」

「ふむ。」とカリングはちつと考へて言つた。「この事件では、少くとも金が主ではない筈です。」

「一體何の爲に下男を殺したのでせう。何か理由がなくてはならない。」

「無論あります。その理由が分れば他の謎も自然解けます。」

それから探偵は床の上を搜索した。血溜まりの中へも誰も足を踏み入れて居なかつた。大急ぎで死體を運び出したにも拘はらず、彼等は血溜まりに足を踏み入れるやうなへまを行はなかつたのである。しかし、床の上には泥の足跡が澤山附いてゐて、少くとも二人の男がこの室にゐた事が分つた。

一人の男はカバーを穿いてゐたのでその跡は非常に不鮮明であつたが今一人の方ははつきりとした特徴ある足跡を残した。

カリングは本邸で寫し取つた紙を取出して再びこゝでも寫して見ようと思つた。然し彼は一目見たばかりではつきりした方の靴跡が大佐自身の靴によつて附けられたものである事を認めた。

彼は女中の方を向いて、彼女を遮つたマスクの男がカバーを穿いてゐたかどうかをたづねた。彼女は暫らく考へてゐたが、聽て非常に汚れたカバーを附けてゐた事を思ひ出した。

カリングはそれ故大佐が歸宅してからこの部屋へ來た事を知つた。マスクを掛けた男も恐らくそれを知つたに違ひない。彼は手帳に次のやうに書き込んだ。

「大佐は今晚下男の部屋へ何をして來たであらうか。彼はマスクを掛けた男と同時にこの室へ來たのであらうか。」

彼はそれから下男部屋の精密な検査を始めた。部屋の有様は女中の語つた通りであつた。確かに格闘が行はれて、その際下男が殺されたに違ひなかつた。併し何の目的で彼は殺されたのであらうか。いろいろの状態から窃盜殺人が行はれた様子が明らかに示されて居た。即ち道具が亂雑に散らばつて抽斗といふ抽斗は皆開けられてゐたのである。

然しこんな簡單な下男部屋で何を盗む心算であつたらうか。本宅にある金庫か物置の鍵でも盗まうとしたのであらうか。或ひは例へばある婦人の不義の證據となるラヴ・レターでも盗みに來たのであらうか。

或は又この驚ろく可き殺人が間諜の仕業と關係があるであらうか。或は反對に殺人と本宅の窃盜事件とは何の關係もないのであらうか。若し關係がないとしたならば、偶然の出來事の爲に探偵に取つては頗る事件が面倒になつたと言はなければならぬ。

カリングは呪ひ聲を上げんばかりであつた。未だ嘗つて彼は失敗した事が無かつたのに今や短かい時間の間に二度までも背負投げをくつたのである。それは言ふまでもなく彼自身の手落ちであつた。若し彼が大佐の部屋の搜索にあんなに長い時間をかけなかつたならば、金庫の後に隠れてゐた男を捕へたに違ひない。又若し女中を遣はず代りに彼自身がジョンをたづねたならば、死體を持運ぶわけが無かつたわけである。而も彼自身が來さへすれば果して殺人が行はれてゐたか、どうかといふ疑問も起さずに済んだわけである。

いかにも彼は幸運の神に見放されたかのやうに思つた。先刻間諜共をやがて捕へて見せると言つたが、今や敵は彼の想像して居たよりも手強い事を認めねばならなかつた。

「手文庫を。書類を。」と突然大佐はこの時、叫び出した。彼は急に恐しい手ぬかりを思ひ出したのである。下男の殺された事を聞いて誰も彼も走り出して來たので、本宅には今誰も居ないから或ひは二度目に書類を盗まれたかも知れぬと思ひついたのである。

大佐は狂人のやうに本宅に向けて飛び出した。カリングはラーニヒルドと女中とに番をして貰つて大佐のあとを追つた。

手文庫は机の上に置かれたまゝ、別に手の觸れられた様子は無かつた。大佐は手を慄はせてそれを開いたが、次の瞬間、悲鳴を上げてよろめいた。

手文庫の中は空であつた。

全く空ではなく底に一枚の紙片が横つて居た。二人はそれを取り上げて同時に讀んだ。いかにもくやくした筆蹟で次のやうに書かれてあつた。

探偵君

君は餘計な世話をしないで引込んでゐた方がよい。さもなければ爲にならぬよ。

君は決して僕等と戦ふ腕はない。書類は一時間前には寫しも讀みもしてなかつた。これからそれをするのだ。

土龍!

再び土龍に出會つたのだと、カリングは考へた。よし、自分は何處までも彼等を暗い穴からほり出して明るみへ出してやらう。

カリングは併し口へ出しては何も言はなかつた。たゞ第二の窃盜を發見して大佐がどんな態度をとるかを氣を付けて觀察した。

第十章 カリング笑ふ

フォン・ヘーデン大佐は今や我を忘れて怒り立つた。餘りに烈しくわめいたので、カリングは聞くに堪へずして耳の中へ指を差し入れた。

「何と言ふ馬鹿だつたらう。」と充分罵り盡してから大佐は叫んだ。

「仰せの通りです。」とカリングは落着いて言った。

大佐はこれを聞いて眼を輝かせてカリングの方を向いた。カリングは大佐がいまにも飛びかゝつて来るかと思つた。彼は大佐の怒り聲をたつぷり聞いてもう澤山だと思つたに拘はらず、まるで、益々大佐の怒りを煽り立てるやうな態度を取つた。

「なんですつて。」と大佐は罵つた。

「僕はたゞあなたが馬鹿なおつしやつたのを保証しただけです。」とカリングはいかにも落着いた態度をして言つた。

「人を……」

「馬鹿にするとおつしやるのでせう。」とカリングは遮つて言つた。「僕は決して馬鹿にする心算はありませんが、たゞあなたのお考へに賛成しただけです。もし言はして貰ふならばあなたは今馬鹿であるばかりでなく、これから先も馬鹿でせう。」

大佐はこの無禮な探偵の態度に向つて、かのラーニヒルトと中尉とが抱き合つたのを見せつけられた時と同じやうな氣持になつた。彼は一言も發しなかつた。然し兩手を固く握つて顔の筋肉をピリピリ慄はせたので、カリングは今にも癩癩玉が破裂するだらうと思つた。これを見たカリングが唇に微笑を浮べたので大佐は益々憤慨した。

「君はわしを馬鹿だと言つたね。」と彼は叫んだ。「君は成程偉い探偵かも知れんが、まるで子供の習

慧にも劣つてゐるではないか。かうして皆で駆け出すやうになつたのも君のお蔭だ。二度目に盗まればせぬかと注意する位の事はしてもいゝぢやないか。」

カリングはこの言葉には答へないで、笑ひながら腰掛に腰を下した。そしてその際にも拘はらず、

彼はたうとう噴出してしまつた。

彼は止め度なく笑つて、いかにも上機嫌に見えた。

「君は氣が違つたのか。」と大佐は叫んだ。

「笑ふべき場合ぢやないぢやないか。こんなへまをやるなら泣くのが當り前ぢやないか。」

「まあ。よくお聞き下さい。僕達は一筋縄で行かぬ敵と戦ふのだとあなたは思つてゐられるでせう。

だからあなたは今、全然僕等が負けたと思つてゐられるでせう。」

「君だつてさう思つてゐるぢやないか。少し氣を附けたならば二度目には盗まれますにすんだのだ。まるで眼の前で盗まれたやうなものだ。」

「は、は、は、は、は、は。」とカリングは再び笑つた。「いやどうも中々賢い盗みですよ。けれど僕は何かと言へぬ嬉しい氣がします。」

大佐はカリングの肩に手を當て、力任せにゆすつた。

「君。どうしたんだ。一體。かうして見りや別に氣が違つてゐるやうでもないが、それとも……」

「宜加減にして下さいよ。」とカリングは叫んだ。「そんなに逆上してしまつてはいけません。先づ鍵

束をお出しになつて、昔の設計圖の入れてあつた抽斗を開けて御覽なさい。併し一寸前に戸を閉めておきませうや。」

カリングが戸を閉めに立つと大佐は探偵が言つた事に好氣心を持つて抽斗を開いた。

「書類を手を取つてよく改めて下さい。」とカリングは言つた。

大佐が書類にチラと眼をやるや否や驚きの叫び聲を發し、躍り上つて喜ぶのであつた。

「僕の愉快な理由が分りましたか。」とカリングはたづねた。あなたは大切な書類を手を持つてゐるではありませんか。盗人はつまり昔の設計圖を持つて喜んでゐるのです。喜ぶのが少し早過ぎたやうですわねえ。」

大佐は我を忘れて熱心に書類を調べた。それは彼が駆け出す前に手文庫の中に入れておいた設計圖であつた。彼の驚きは無限であつた、彼は呆れて探偵の顔をじろく眺めたので、探偵は再び笑ひ出した。

「そんなに顔を見ちやいけませんよ。」とカリングは遂に言つた。「あなたが先程一寸後を向かれた時に僕は机の上にあつた二つの設計書の束を取換へておいたのです。つまり僕は間諜共に入れておいた手文庫に又もや大切な書類を入れておくのはいけないと思つたのです。いつ何時、又取りに来るかも知れませんから。僕は奴等が目的を達し得なかつたのを残念に思つて、折さへあれば直ぐ盗みに來るに違ひないと考へたのです。」

お嬢さんも僕が書類を取換へた事は氣附かれなかつたやうです。そこで下男の部屋に駆け出す時にあなたが私のした事を少しも氣附かずに、古い書類を手文庫に入れ、新しい方を机の抽斗へ入れられたのを見て、實に愉快に思ひました。一かう言つて彼は再び笑ひ出したので、大佐も笑はざるを得なかつた。

「いやどうもあんな亂暴な事を言つてすみませんでした。」と彼は言つた。「何と言つて感謝していかかりません。實に立派な行方でした。萬事は救はれました。」

「さうです。昔の設計圖などは外國の手へ這入つても何の害もありません。」

「無論、ないです。それはもう前にもお話ししました。この要塞の秘密を嗅ぎ出さうとしてゐる連中がいよいよその目的を達したと思つてその設計圖を信するならばこの國に取つては又とない幸です。盗まれた設計圖は今の要塞とは、全然違つてゐます。今度の設計はまったく別な基礎に立てられてゐます。」

「萬歳です。」とカリングは言つた。「これで惡漢達を根本的に欺く事が出来ました。併しゲームはまだこれで終りではありません。敵は驚くべき手段を持つてゐますから。若し誤りを發見したならば、どんな手段を講じても再び眞正の設計圖を手に入れようとするに違ひありません。下男を殺したといふ事は手段を選ばぬといふ一つの證據です。」

「全くです。」と大佐は言つて大きなブローニングを取出し、丸を籠め始めた。及ぶ限りの事をして

おかねばなりません。この書類を安全な所へ置くまでは決して再び肌身を離しません。」

「今一度、暴力を以て盗賊が迫つて来るだらうと要心なざる事は確かによい事です。」

「このピストルに當る奴の顔が見たいものです。」

「結構です。然し、あなたの射撃の腕前をお見せになる時機のあるのも結構ですが、それよりも安全なのは間諜にやられたやうに見せられる方がいゝと思ひます。つまりいかにも落膽して悲しんで居るやうに見せらるゝのです。殊にこのお宅では尙更さう見せられなければなりません。お嬢さんにも眞實を知らしてはなりません。二度目の窃盜によつてすつかり氣落ちしたやうに見せてゐて下さい。女中の前でも同じやうにしてゐて下さい。」

「あなたはこの家の中の誰かを……」

「僕は度々かういふ連中のする事を見ましたがどんな所にも彼等は巢をかけ、無制限に金を使つてどんな人をも買収してしまひます。たとひ主人に忠實な下男でも黄金の爲に變心をし、主人を賣るやうな事をします。殊に戦争は國事探偵連は平時の二倍の努力を以て働いて居ります。」

「仰せの通りです。あなたのおつしやる通りにしませう。」

「結構です。では書類を安全な場所へ片付けて下さい。そしてそれを誰にも知らせないやうに地獄の番犬のやうに護つて下さい。そして一方で自殺でもし兼ねないやうな様子をして下さい。僕は僕としてこの事件に全力を注ぎます。誓つて申しますがどんな事があつても土龍を捕へるまでは手を引きません。」

せん。」

かう言つて彼は再び彼に宛てた文句の書かれた紙片をながめた。

「このわざとらしく偽られた筆蹟はどうやら見覚えがあるやうな氣がします。一と彼は深く考へるやうにして言つた。その時突然彼はある事を思ひついて、紙入れから中尉が渡して呉れた無名の手紙を取出した。彼はそれと手紙とを比較した後、二つながら大佐に渡して言つた。馴れない眼には一寸分りませんがこの二つの手紙は同じ人の書いたものです。」

大佐は二つを一目見て急に立上つた。

「どうしてあなたはこの無名の手紙を手に入れたのですか。一と彼はたづねた。

「何故ですか。」

「これはこの頃中僕の所へ盛にやつて来る手紙の一つで、娘の戀人に關係したものです。今初めて思ひついたので、あの澤山の手紙を僕の出懸ける前に手文庫の中へ入れておいたのです。」

「手紙をみんな盗られたのですか。」とカリングは驚いて叫んだ。これは非常に尊い手掛りです。間諜の仕事以外に外の動機も交つてゐるやうです。」

それから彼は大佐に向つて、トルハルト中尉が午前大佐と會談した時、大佐の知らぬ間にフィツボンと書いた手紙を一通だけ持つてカリングの所へ來て、誰がかういふ事をするのか探して欲しいと頼んで行つた事を物語つた。

大佐の顔は再び曇つた。

「わしはこの絹がそんなに容易くは取去り得ないだらうと思つてゐました。」と彼は言つた。「あなたがこの手紙の主を探して下さる事には無論反對はしません。殊に間諜の仕事と關係があれば尙更の事です。然し手紙に書いてある事もある程度までは眞實であるといふ事を確かに知りました。」

「さうかも知れませんが、僕は中尉の人と成りをまだよく知りませんが、そのうちには充分しらべ上げます。」

「あの男は實に輕率な男です。」と大佐は腹立たしさうに言つた。あれは惡魔に魅入られたのですよ。探偵は大佐の言葉の鋭いのに驚いた。

「まあそれはそれとしておきませう。」と彼は言つた。「御承知の通り書類が寫されてないと言ふ報告は私達の方針を變へて呉れました。即ち僕等に取つて直接の危険は去つたわけです。惡漢を捕へる爲にさう急ぐ必要は無くなりました。それに僕は彼等を見張るべき手順を定めました。即ち僕は二三の忠實な手下に命じてこの邸を見張らせる事にしました。先刻、僕が一寸歸つたのは手下に電話をかけたのです。彼等もこの家の女中さんたちと同じやうに何事が起つたのかは存じません。グリーンマーとローランドと申します。グリーンマーはもと、盗人でありましたから、多分あなたも二三年前に新聞でその名を御覽になつた事がありませう。今は全く改心をして僕の手傳ひをしてゐて呉れます。非常に腕利きの男でして直接この家を見張つて呉れます。ローランドの方は今警察に……。」

「警察には全然干渉して貰ひたくありません。」と大佐は驚いて遮つた。

「まあ、お靜かに。僕も警部のザンデルソン君と仕事をする氣はありません。僕は自分一人で働きたいのです。同様に新聞にも知られたくはありません。新聞はたゞ議論ばかりをするだけです。僕はザンデルソン君の腕前には少しもたよる事が出来ません。」

「わしもあの人の腕前には感心しません。」と大佐は言つた。

「ですから警察はこの際決して呼ばぬ事にします。」とカリングは言葉を續けた。「警官のローランドは實は祕密に僕の手先を勤めてゐるのですから、決して氣にかけないで下さい。彼はそれに非常に敏捷な男です。そしてこの家では下男の役を勤めさせる事にしました。彼はもと、輕業師でありまして自動車の運轉手でも何でもしますから、ジョンの役を勤めさせるに至極適當です。」

「萬事お任せしますから宜しく取計らつて下さい。」と大佐は言つた。

そこでカリングは大佐と別れて、ラーニユヒルドと女中とが心配して待つて居る下男部屋へ引き返した。

「あなたはお父さんの所へ歸つて上げて下さい。」と探偵はラーニユヒルドに向つて言つた。又盗人が這入つてお父さんは大變今、昂奮して居られますから慰めて上げて下さい。」

ラーニユヒルドは直ちに本邸へ急いだ。

「君だけは一寸待つて呉れ給へ。」と探偵はアンナに向つて言つた。「種々聞きたい事があるから。」

第十一章 訊問

ラーニユヒルドが去つてからカリングは語調を改めてたづねた。

「何故君は僕等をだましたのです。」

「どうしましたつて？」

「嘘を言はないでほんたうを話して下さい。先刻電報配達の外に御主人の留守中、誰か来はしなかつたかとたづねた時、誰も来ないと言つたでせう。」

「さうですわ。誰も来ま……」

「嘘ですよ。誰がお嬢さんを訪ねたか知つてゐるでせうも」

「いゝえ。誰も見えませんでした。」と答へたが彼女は顔を赧くした。

「それぢや言ひますがね。僕は太佐の歸らるゝまでトルハルト中尉がこの家へ来て居られた事をよく知つてゐます。それからお嬢さんがあなたに頼まれた事も知つてゐます。然し今は誰も聞いてゐないし、僕は決して他人には話さないから何もかも打明けて下さい。打明けて呉れた方がかへつてお嬢さんの爲になるのです。」

アンナはそれでも躊躇してゐた。

カリングは彼女の返答を待たずに言葉を續けた。「僕はこの事件の底まで突きとめねばおかないのです。今こゝで正直に話して呉れさへすれば大變、時間が助かるのだ。」

「この事件とおつしやいますが、私はどんな事だか存じません。」とアンナは傲慢な返事をした。

「事件と言ふのは御主人のお留守中に盗人の這入つたことです。とても金に換へられないものが盗まれ、その上下男は殺され……」

「殺されたのは盗人と關係ないだらうと思ひます。」彼女は力をこめて言つた。「ジョンは確かに女關係で殺されたのです。ジョンに戀人を奪られた男か、奥さんを奪られた男が復讐をしたに相違ありません。」

「君はジョンとは餘り仲が善くなかつたやうですね。」

「ジョンは悪者です。あんな厭な人つたらありません。」と女中は眼を輝かせて言つた。

「ジョンは君に何かしたのですか。」とカリングは訊ねた。彼は女中を質問するよりも、むしろ女中に言ひたい事を言はせた方が得策であると考へたのである。

「他の女同様に私の心を弄んだのです。」とアンナは悲しさに言つた。「如何に女中だからつて餘りです。けれど今はもうドン・ファンも死にました。」と如何にもいゝ氣味だと言はんばかりに言つた。「まるでジョンの死んだのを喜んで居るやうな顔に見えるねえ。他人が聞くと君が殺したのだと思ふかも知れない。」

「まあ。」と彼女は驚いて叫んだ。「あなたはよもやそんなに思つていらつしやいますまい。」

「ふむ。」とカリングは深く考へて言つた。「君の言ふところを見ると、どうもジョンと戀愛關係が成立つてゐたやうですねえ。して見ると君の言葉だけではジョンの性質もよく分らぬかも知れんが、然し萬更爲にならない譯でもあるまいから、一應ジョンがどんな人間だつたか聞かせて呉れませんか。女關係ばかりでなく、君の知つてゐる事をみんな話して下さい。」

アンナは心を取直して落着いた態度で答へた。「あの人はほんたうに悪い人でした。いつも如何にも男らしい態度で女を騙すのです。無論昔はもつと身分のあつた人であつたに違ひありません。けれど旦那様の前ではそれはくお阿諛つかひでした。あの人は人の心に取り入る事がほんたうに上手でした。」

「先刻君はジョンがドン・ファンだと言ひましたねえ。」

「確かにさうだと思つてゐます。旦那様と、お嬢様の外は誰でもよく知つて居ります。ジョンの所へは随分澤山の女の人が出入りします。その中でもたつた一人だけは度々やつて来るやうでした。」

「誰ですか。」

「それが分りますものか。いつも自動車で街の方から來るのです。汽車では決して來ないのです。いつも後の道から素早く出入りしてゐるので横顔さへ見た事がありません。」

「話聲を聞いたのですか。」

「はあ。二三度、偶然通りかゝつた時に、女の笑ひ聲を聞きました。今晚は笑ひ聲どころか喧嘩をし

て居たやうです。それにもう一人の男の人が居りました。」

「何時頃でした？」

「旦那様がお歸りになつてからです。」

「お歸りになつて直ぐですか。」

「いゝえ。十時半頃だつたらうと思ひます。」

「立聞きしましたね。」

「少しも何を言つて居るのか分りませんでした。」

「どうして？ 瑞典語では無かつたかね。」

「外國語のやうでした。」

「一言も分らなかつたのですか。」

「はあ。お互ひに罵り合つて、恐しく早くしゃべり合つてゐました。ジョンの聲はよくわかつて、落着いて話してゐるやうでしたが、もう一人の聲はがさくした大聲でした。女は泣いたり、太息を吐いたりして居りました。」

「ジョンの外に男と女のゐた事は間違ひないですね。」

「もつと外に澤山ゐたかも知れませんが、私の聞いたのは三人の聲です。」

「君は外國語は分りますか。例へば、獨逸語や佛蘭西語は。」

「少しは分ります。二三年前に或る方にお伴して瑞西へ行つた事がありますから。」

「三人の話した言葉は佛蘭西語や獨逸語では無かつたのだね。」

「確かに違ひます。」

「英語ではなかつたですか。」

「英語ならば私は直ぐ分ります。元の奥さんが英國の方でしたから。」

「その他の言葉、例へば伊太利語やスペイン語や露西亞語を聞いたことはありませんか。」

「ありません。」

「すると恐らく、この三つの中でしたらうねえ。」

彼女はうなづいた。そこでカリングは再び大佐の留守中の客についての質問に歸つた。アンナはもうすつかり折れて何もかも語つてしまつた。

彼女は即ち午前中大佐と中尉とが喧嘩をして大佐が以後決してよりついて呉れるなど言つた事から語り始めた。晩の八時頃に中尉は突然やつて来て、お嬢さんと前の林の中で話合つた。二人とも非常に悲しきうに見えたから餘り愉快な話では無かつたらしい。固よりどんな話をしてゐるのか分らなかつたけれども中尉が聲を高めた時、二三の言葉を聞き分ける事が出来た。

「それは許し難い悪事です。そんなことがあると信ずるだけでも、卑劣なことです。」と中尉は言つた。それから暫くたつて、「けれど僕は復讐します。確かに復讐します、どんな苦しい思ひをしても、

やり遂げて見せます。」

大佐の歸る直ぐ前に中尉は薔薇で指を傷けたらしく、令嬢が家に駆け込んで絆創膏を取りに来た。

「普通の絆創膏でしたか？」とカリングは訊ねた。「こんな風のものぢやなかつたかね。」と彼は四角な小さな絆創膏を彼女に見せた。

「確かにそれです。何處で見つけになりましたか。」

「それはどうでもよろしい。御主人が突然歸つて來られた時、どんな事があつたかね。」

「トルハルトさんは非常に驚かれたらしく轉がるやうに、後のヴェランダから家の中へ走り込まれました。お嬢さんは然し平氣で門の所へ行つて旦那様をお迎へになりました。」

「中尉が出て行かれたのは何時かね。」

「存じません。お出懸けになるのを見ませんでした。」

「その他に何か變つた事は無かつたかね。」

「それだけです。はじめお話しなかつたのは、お嬢さんが話して呉れるなとおつしやつたからです。レーナもそれですから黙つて居りました。」

「よろしい。僕に話したとて決して悪いことはおこりやしません。ではもう寢床へ這入つてやすんで下さい。」

アンナは挨拶をして行かうとした。

「あ、一寸。」と探偵は扉に手をかけた女中を呼び止めた。「ジョンの寫眞が欲しいんですがね。持つてみませんか。」

「レーナのお婿さんが取つて呉れたのが一枚あります。」と彼女は躊躇して言った。「けれど私も一緒ですよ。」

「それはかまひません。決して誰にも見せないから直ぐ取つて来てくれませんか。」
かう言つて彼は女中の手に五クロネの札を握らせた。女中は急いで取りに行つてやがてカリングに寫眞を渡した。

女中を訊問してゐる間、カリングは注意深くその部屋を見廻してゐたが一層詳しく検査し始めた。ストーヴの中には灰になつた紙が澤山あつた。その中へ手をやつて見ると半分焼けたフェルト帽が出て来た。その外には下男の殺人に關係のある客を探偵する手掛かりになるものは何もなかつた。

アンナが寫眞を持つて歸つて来た時、カリングは焼け残つた帽子を見せた。彼女はそれを物珍らしさうに眺めて言つた。

「これは絹天鵝絨の新式の帽子で御座いますねえ。」

「ジョンはいつもかういふ帽子を冠つてみませんでしたか。」とカリングはたづねた。

「いゝえ。ジョンはいつも山高帽を冠つてみました。こんな帽子を冠つてゐたのを見たことはありません。けれど……」

「どうしました。」

「トルハルトさんが今日さういふ帽子を冠つて見えました。旦那様の所へお出でになつた時に私が御脱がせしました。あんまり立派な服装でしたから、よく帽子を見たので御座います。」

「中尉は晩にもこの帽子を冠つて居られたのかね。」

「冠つて居られました。」

探偵は今一度その帽子の殘片を調べて見た。そして熱の爲に縮んだ内側の縁革の上にMCAといふ文字の書かれてあるのを見つけた、即ちこの帽子は軍人用の品物を賣る店の印であつて、すべての士官はそれを買ふのである。なほ縁革をよく調べて見ると燃え切れた端の所に小さい澤山の穴があつてそれがTの字を形造つて居た。疑ひもなく中尉のものである。Sの字の部分は既に焼け切れたと見えて革の所には見つからなかつた。カリングは前記の店が品物を賣る場合にはいつもかう言ふやうな穴を開ける事を知つてゐた。それ故この帽子は多分トルハルト中尉のもので、中尉はそれを晩にも冠つて来た事が明らかとなつた。

カリングは然しこの事に就いてはアンナに何も語らなかつた。彼は彼女の持つて来た寫眞を熱心に眺めた。それはこの邸の庭園で撮られたものであつて、下男がアンナと熱心に語つてゐる所が寫つてゐるから彼は寫眞に撮られる事知らなかつたらしい。顔は横顔であつて餘り大きくはなかつたが、はつきりと寫つてゐたので、死人の身許鑑定を行ふには充分役に立つと思はれた。

カリングはジョンの風采に就いて女中の語つたことを手帳に記した。即ち漆黒の髪を左側に分けて額の奥深くまでよく櫛の這入つて居ること、黄色い皮膚をして黒褐色の眼を持つてゐること、短かい頬髯を生じてゐるだけでその他の部分にはよく剃つてあること、尖つた顎を持つてゐること、髯が濃い爲に剃刀を當てた直ぐ後でも、皮膚が青く見えた事などを書きつけたのである。

それからカリングは女中を歸した。彼は女中を訊問した結果について少からず満足した。すべての事情を綜合して見るとトルハルト中尉はこのドラマに甚だ怪しい且つ甚だ有利な役目を勤めて居る事が分つた。彼の復讐の目的は單に匿名の手紙を書いた男に對してばかりではなく、その手紙によつて中尉を判断して中尉の滅亡をもたらさうとする人に對してでもあるらしい。然しながら士官たる者が復讐をするのに上官の祕密書類を盗むやうな大膽な行爲を取るだらうか。それは餘りに卑劣な事だと言はねばならない。

そして先刻の足跡や指紋が中尉によつて造られたものであらうといふ事はまだ證明されてゐないし、大佐の部屋に隠れてゐたのが中尉であらうといふ事も證明されてはゐない。

なほ又中尉は如何にして大佐の部屋へ這入つたのであらうか、その唯一の證明は彼が盗人と結託してゐて盗人に置き去りにされたと考ふる外はない。

して見ると大佐が歸宅後初めて這入つた時には二人の男がゐたものと考ふべきであらうか。されにまた、どうして中尉の帽子が下男部屋に來てゐるのであらうか。何故にそれが燃やされたので

あらうか。

最後に探偵はアンナが下男部屋で聞いた聲が中尉の聲であつたらうかといふ疑問をおこして見た。

若しさうとすれば中尉は普通人々が使ふ三ヶ國語の外に、なほ一ヶ國の言葉を話すことが出来るわけである。

何はともあれ、先づこの帽子が軍人用の品物を賣る店で買はれたかどうかを確かめねばならない。

レオ・カリングはいまや、ある深い迷路へ這入り込んだやうな氣がした。と言ふのは多くの證據はトルハルト中尉の行爲を裏書きしてゐるやうであつたが、さうでないと言ふ證據も相當にあつたからである。

又カリングの心の中ではトルハルト中尉が盗人の仲間であつて、且つ下男を殺したものだと思へる事はどうしても堪へられない事だと思つた。

次にフォン・ヘーデン大佐自身はどうであるか、彼はこのドラマに如何なる役割を演じてゐるのだらうか、彼はその實見た所とは違つた人であるであらうか。彼が特に下男を偏愛した事は女中たちの眼にも餘つた事である。アンナは大佐が下男にやりたい放題をさせて居たのだとまで言つた。そしてジョンも亦それをい、事にして女狂ひを始めてゐたらしい。いかにジョンがよく間に合ふ人間であつたとしても、たゞそれだけでジョンの我儘を大佐が許したといふ事は考へがたい事である。

カリングは大佐の使つたカバーが玄關に置かれてあつたのを目撃した。即ちフォン・ヘーデン嬢は

眞實を語つたのである。然し大佐が歸宅後にカパーを附けずに戸外へ出た事はその靴から明らかに分つてゐる。而も此處にある足跡からして大佐が下男を訪問した事も疑ふ餘地はない。

カリングは先刻大佐にその事を餘程きいて見ようかと迷つたが、いや待て〜と思つた。主人が下男を訪ねる事は當然の事である。たとひその後、下男が殺されたとは言へ、それはたゞ偶然の出来事だと言へばそれまでの事である。アンナは十時半にジョンの聲を聞いたと言つたから、その時ジョンがまだ生きてゐた事は疑ひ得ない。

すると今一人の男の聲は大佐の聲であつたであらうか。

然しカリングはこの考へを撤回した。大佐が下男と話をするのに外國語を使ふ必要がないではないか。それともジョンを訪ねて来た謎の婦人の爲に使つたのであらうか。

探偵は手帳の中へ次のやうに書き込んだ。

「大佐が下男を訪ねたのは何時であつたか。トルハルトはジョンを訪問したか。ジョンの殺されたのは何時であるか。その女は誰であるか。」

この時扉を叩く音がしてローランドが顔を見せた。

「這入り給へ。グリーンマーは何處にゐるかね。」とカリングはたづねた。

「途中で會つた自動車をつけて行きましたよ。自動車は黒い色をして覆ひがありました。」

「宜ろしい。うまくつけて貰ひたいものだ。顕微鏡を持つて来て呉れたかね。」

「持つて来ました。硝子板も電燈も此處にあります。」

「有難う。それでは先づ君の仕事の手筈を定めよう。」かゝ言つて彼は今までの重要な點を簡単に話した。

第十二章 意外な發見

警官のローランドはカリングの手下の最も腕の秀れた一人であつた。彼が彼の先生を崇拜し心服して居ることは何物にも比べられない程であつた。彼はカリングを超人であると思つてゐた。

警部のザンデルソンもローランドの多才を褒めて最も有望な探偵であると人に語つた。然し人の好い警部はローランドが警察の知らない事までやつて居る事に氣が附かなかつた。そしてそれを知つて居るのはレオ・カリング一人であつた。

カリングはローランドに話をしながら下男部屋の検査を續けた。扉の上に附けてある小さな電鈴が彼の眼を引いた。よく調べて見るとその下の扉の附目の傍に大佐の部屋にあつたと同じ撞撃器が附いて居た。電線は戸外に引張られてあつたから、カリングは念のために何處へ連續されて居るかをローランドに調べさせた。

その間に彼は押入れの扉を開けた。すると押入れは全く空で着物を掛けるホックさへ一つもなかつた。懐中電燈を照すと驚いたに事には人の出這入りして居る跡を見つけた。そこで彼は多分この押入れ

が何處かへ通ずる通り道になつてゐるのだらうと思つた。

彼はそれ故、何處かに入口はないかと熱心に壁を検査して見た。

その時、ローランドが歸つて来て電線は本邸の方につながつてゐる旨を告げた。ローランドの報告によつてカリングは電線が直接、大佐の事務室に通ぜられてゐる事を知つた。

「今面白いものを見つけたよ。」と彼はローランドに告げて押入の床を示した。「下男は此處に秘密の通路を造つてゐたらしい。それで今秘密の扉がありはせんかと探してゐるのだ。」

然しながらカリングは推定を誤つたらしい。と言ふのは幾ら方々を押したり、叩いたりして見ても扉は開かなかつたからである。が、最後に横側の方に移つてズボンを破られさうになつた大きな赤錆の釘を引張つて見ると、押入れの後の面が音もなく開いた。それを見たカリングは思はず、驚きの叫びを發した。

と言ふのは目の前に現れたのが、彼の豫期したやうな秣部屋や厩ではなくして、非常に贅澤に東洋風に飾られた小さい部屋であつたからである。隅の方に広いトルコ椅子が置かれてあつて、その上に格子造りの印度風の懸燈が下つてゐて、ぼんやりした光を部屋に投げてゐた。トルコ椅子の上には、非常に美しい刺繍をした澤山の絹蒲團が置かれてあつた。道具にはすべて眞珠や象牙細工がちりばめてあつて、床には波斯毛氈が敷かれ、壁には眼の覺めるやうな、東洋風の絨壇や、蒐集家の眼を喜ばせるやうな金糸で織つた布が掛けられてあつた。土耳其椅子の前にはエナメルをはめた低い土耳其風の喫煙臺があつて、その上に大きな虎の皮が敷かれてあつた。そして更にその上に煙管や小さなパイプや、高價な巻煙草が置かれてあつた。今一方の隅には檜の木に彫つた祈禱臺があつて、その上には金の縁取りをしたモザイク製の聖母像が掛けられてあつて、その兩側に二本の蠟燭が半分ほど燃えて立つてゐた。

カリングは美しい婦人が今し方まで、此處にひざまづいて、お祈りをしてゐたのであると考へずには居れなかつた。

今一つの隅には、象牙をちりばめた黒檀の化粧臺と彫刻をした柱とが立つてゐた。その柱は壁によつて結びつけられてあつた。其處にはすべての新式の化粧道具をはじめ、香水罌や白粉箱や、美爪用のボールドなどが、置かれてあり、土耳其の薔薇油の這入つた長い硝子罌が二三置かれてあつた。馥郁たる香水の匂ひが、枕や絨壇から流れて来る匂ひと、土耳其の樹脂の香りとが交つて何とも言へぬ氣持のよい空氣を漂はせて居た。それは恰も一千一夜物語の中にある部屋を見るやうであつた。

ローランドが初めて口を開いた。

「大變なものですなあ。」と彼は叫んだ。

「實に立派なものだよ。」とカリングも全く驚いて言つた。「このヘーデン事件には随分變つた事が澤山ある。下男は實際驚く可き人間であつたに違ひない。このやうな東洋趣味を持つて、自由に金が使へるといふ事は下男として只事ではない。」

「實に主人を欺くに特別の才があつたのでせう。」とローランドは言つた。「この部屋は大きくはないけれど随分澤山厩の中に突出てゐるらしいです。見たところ厩の半分を取つてゐるらしいではありませんか。ですから大佐もそれを知つてゐたに違ひありません。」

「君は大佐がそれを確かに氣が附かなかつたと思ふかね。」

ローランドは軽く唇を拭つた。

「先生。」と彼は言つた。「あなたのおつしやる事は分りました。多分大佐自身が……。」

「いかにもさうだよ。下男は特別な關係に立つ大佐の寵兒であつたのだ。だから自分のしたいことが出來たわけだ。従つて彼は又大佐の内密の事にも携り種々柔しい取持ちもしたに違ひない。小さな門を造つた事や毎晩女が訪ねて來たといふ事等はこれで別の解釋が下せるわけだ。」

「下男が突然死んだ事もせう。」とローランドが言つた。

「或ひはさうかも知れん。大佐は十時と十一時との間に下男の部屋にゐたのだ。女中の話によると三人の聲がしてその中二人は男で更にその男の一人はジョンであつたといふ事であり、外國語を使つて言ひ争つてゐたといふ事だ。残りの一人は女で、泣いたり太息を吐いたりしてゐたといふ事だ。」

「多分下男が女と楽しんでゐた所へ大佐が突然やつて來たのでせう。」とローランドは想像した。

「或ひはさうかも知れん。が、想像は兎に角として、君は厩へ出て行つて、どうして部屋を此處へ隠す事が出來たかを見給へ。僕はその間にこの部屋をもつとよく検査するから。」

ローランドが出懸けて行くとカリングは直ちに立派な化粧臺を精密に検査し始めた。

厩の中でローランドは二個の馬置場の隣にある大きな部屋が確かに一年分の秣を入れるべく造られてあるにも拘はらず、ほんの少しの枯草しか入れてない事を發見した。と言ふのは條板の内部に厚い板の壁があつてそれが秘密室と境してゐたからである。この壁と條板との間には枯草が巧につめてあつて、厩から見れば全部枯草の束だと思はせるやうにしてあつたのである。それ故この枯草はたゞ後の壁を覆ふだけの目的で此處に置かれてあるのであつて確かに使用せられた形跡はなかつた。すると秣は何處に置いてあるであらうか。

ローランドは屋根に窓の附けてある事を見つけた。彼は梯子を持つて來て跣足で上つた。其處には建物全部に廣がつた天井があつてその上に澤山の枯草や藁がつめられてあつた。

ローランドが歸つて來るとカリングは土耳其椅子の上の柔らかい枕の間に寝ころんでゐた。「何とも言へぬ靜かなゆつたりした氣持になるよ。」と彼は言つた。「扉を閉めると幕が垂れ下つて來てそれを隠してしまひ、窓がないのでいかにも世間の眼から隠れてしまふ事が出来るのだ。」

「耳からも隠れます。」とローランドは言つて、壁板の前に音響を遮ぎる枯草のつめてあつた事を話した。

「さうだと思つた。」とカリングは言つた。

「この部屋へ這入れば少しも人に發見されずにやりたい事が出来るのだ。扉はあの通り厚い板だし、

君の留守中に調べた所によると、安全錠を外からはづす事は絶対に出来ないのだ。

ローランドはその中にスキッチを見つけて何気なしにそれをねぢつた。するとベツと天井に電燈がついて部屋全體が眞晝のやうに明るくなつた。

「これでは日光は要りませんですねえ。」と彼は言つた。

「何もかも非常に趣味の深く發明的才能のある人が考へて造つたものらしい。」とカリングは言つた。

「僕はどうかして先刻此處にゐた人が誰であるかを知りたいと思ふ。殊に金髮美人が誰だかを知りたい。」

「金髮ですつて。どうしてそれが分りますか。」

「そりや君、わけないさ。」とカリングは笑つて言つた。「僕はあの化粧臺を調べて種々な事を知つたよ。まさか此處を調べられやうとは思つてゐなかつたらうからねえ。」

「けれど早かれ遅かれこの部屋は發見されるではありませんか。」

「僕も今さう思つたところさ。今度新らしく来る厩番が枯草の仕掛を見つけてしまふかも知れない。けれども下男はこの部屋を他人に發見される事は好まないらしい。」

「奴等は今にこの貴重な品物を取返しに來やしますまいか。」

「それはしないだらうよ。却つてこの儘にしておくに違ひない。一番大切な品物だけは盗つて行つたかも知れない。下男が不意に殺された爲に、取る物も取敢へず逃げ出したのだらう。」

「けれどもこの證據を隠さうともしなかつたのは不思議ではありませんか。少くとも火をつけて燃してもしたらいゝでせうに。」とローランドは言つた。

「何、燃すつて。」とカリングは急に立上つた。「如何にも君の言ふ通り何もかも破壊するのは火に越した物はない。けれどどうするのか知ら。はて。一か言つて彼は再び二本の燃えかけの蠟燭のある聖母の像に眼をつけた。その時彼は走りよつてそれを消した。

「よかつたよ。」と彼は言つた。「本當にいゝ都合だつた。一彼が一本の蠟燭をやつとのことで取除くと黒い粉末が剝抜かれた蠟燭の下から敷物の上に落ちた。「火薬だ。」と彼は叫んだ。「ほうら、聖母像の後の燭臺を貫いて導火線が引張られて居る。何處へつながつてゐるだらうか。一か言つて彼が線を通つて行くと、線は壁掛と祈禱臺の後を通つてゐた。祈禱臺を取つて見ると二個の口火が四角い大きな包みに終つてゐた。「これは大變な地獄の道具だ。表面はかうした極樂で裏にはかう言ふ恐い仕掛がしてある。まるで中世の暗黒時代に見るやうな仕掛だ。爆彈はあらゆる痕跡を破壊するだけの火災を起すに足つて居る。少くともこの場合はさう考へていゝが元々これは別の目的で装置されたに違ひない。さあそこで奴等の豫期しない事を計畫しなければならぬ。下男部屋の抽斗に普通の蠟燭が五六本あつたからその中二本を取つて恰度この室にあつた位の長さにして呉れ給へ。」

ローランドが去つた時にカリングは二本目の蠟燭を抜き去つて導火線を危険な包みの直ぐ傍で斷つて祈禱臺を元の位置に据ゑた。

「一時間経たぬ中にこの蠟燭は火薬もろとも燃え盡すであらう。」とカリングは時計を出して眞面目に言った。「導火線はそれから火花を出して祈禱臺の下にある爆弾に移り、それから……。一時間経たぬ中に大騒動が起るのだ。」
彼はそれから仕掛のしてある蠟燭のかはりに、ローランドの持つて来た蠟燭を取つてそれに火をつけた。

「これでいゝ。」とカリングはにつこり笑つて言った。「まるでもとの通りだ。然しまだ決して危険は去つてゐない。殊に今晚君は下男部屋に居て貰はなければならぬから覺悟をし給へ。」
「どんな危険も恐しくはありません。」とローランドは答へた。「この世界戦争の中は誰だつて命なんぞ惜しがつてはゐませんよ。」

「然しいざとなれば命は惜しいものだよ。」とかう言つてカリングは天井の電燈のスイッチを切つて扉を開けようとしたが急に立止つて小聲で言つた。「誰か来たから隠れよう。」

二人が土耳其椅子の下へ這ひ込んで床まで垂れ下つて居る大きな被布の下へ隠れ終つた時、扉が靜かに開いた。

盗人のやうに抜き足で這入つて来たのは……フォン・ヘーデン大佐であつた。

カリングが被布の穴から覗いて見ると大佐は蒼ざめてゐた。彼はつかくと聖母像の所へ歩み寄つてふつと蠟燭を消して安心の太息を吐いた。「よかつた。みんな庭に居るから。」と彼は呟いた。

それから彼は急いで出口の所へ行き電燈を消して、来た時と同じやうに靜かに出て行つた。二人は隠れ場所が彼が扉を閉めて行つたのを聞いた。

カリングはその他になほある音を聞いた。弱いキイと言ふやうな音で油の切れて居る錠の中味をゐざらせるやうな音であつた。

暫らくの間二人はちつとしてゐて聽て俯ひ出した。カリングは手探りで扉の傍へ行きスイッチを見つけてねぢつた。

「何故大佐の前へ出なかつたのですか。魂消る顔が見たかつたですな。」とローランドは言つた。

「いや。飛び出しちやあ萬事滅茶々だ。それこそ馬鹿を見てしまふ。事件の謎は僕が思つたよりも深くなつた。」

「さうかも知れません。けれどももう出ようではありませんか。」

「出よう。」とカリングは言つた。

ところがローランドが扉を開けようとする時、扉には錠が下りてゐて少しも開かなかつた。ローランドは呪ひ聲を上げた。

「まるで袋の鼠ですよ。」と彼は聲を荒ら、げて言つた。「あの時、大佐を驚かしてやれば、こんな事にはならなかつたらうに。」

「まあ、よく聞き給へ。大佐を驚かすといふことはいたづら事ではないよ。」とカリングは落着いて

言つた。「大佐はブローニングを持つてゐるから、さうした場合には容赦なく打つ放すよ。」
「大變々々。」とローランドは言つた。

それから僕等は、大佐にも又この事件に關係のある連中にも、秘密室を見た事を決して話してはならないのだ。誰だつてこの平和な邸にかういふ小さな洋式の部屋があるとは夢にも思はぬからねえ。壁に口があつたらそれこそどんなに意外な秘密が聞き出せるか分らない。」

「先生は詩人ですねえ。」とローランドが驚いて言つた。

「何とでも言ひ給へよ。」とカリングは平氣で言葉を續けた。「僕はこの秘密を解かすにはおかない。それにはこの聖堂が發見されない事にしておかなければならない。すると今にもつと面白い場面が現れて来るよ。」

「併しその場面に出る人物は爆弾を仕掛けた連中ではありませんまい。」とローランドは言つた。

「それは分らぬよ。もう一時間経たぬ中に幕はあくのだ。或ひはもつと早くあくかも知れない。」

「そんな事がありますものか。」

「さうかも知れぬ。けれど感情と鋭い理性とは必ずしも一致しないものだよ。」

「感情ですつて。何の事です。」

「君は既に居る二つの馬のことを忘れて居る。動物に對する感情は時として犯罪者を愚にみちびくものだよ。」

「そりや僕もさういふ例を知つてゐます。ある盗人が他所の家へ忍び入つて、鼠が鼠にかけられてゐたのに同情してその鼠を解いてやつたために指紋をのこして、かへつて捕へられたといふ話を聞きました。」

「指紋、さうだく。僕もこれから指紋の撮影をやらう。」かう言つて彼はポケットに手を入れて道具を取らうとした。

「けれど僕等は袋の鼠ぢやありませんか。」

「君は僕が袋の鼠になるやうな馬鹿だと思つてゐるのかい。」

かう言つて彼は扉の所へ歩き寄つて、扉を覆つてゐる幕を傍へ寄せた。そして何處かをねぢるとキイといふ音がして扉が開いた。

「閉て込められる憂ひがあるかも知れんと覺悟をしてゐれば十中の八九まで樂に開くものだよ。けれどそれには矢張り豫め手加減をしておかなければならん。僕は君が既に行つてゐる間にその手加減をしておいたよ。」かう言つて彼は部屋の中へ戻つて床の上にある危険な包みを出來るだけ用心して運んで來た。

「爆烈弾は持ち出しておいた方がいゝ。」と彼は落着いて言つた。どんながこと起るかも知れないからねえ。」

彼等は再び下男部屋に這入つてそつと扉を閉めた。部屋の中は先刻と全く同じであつた。小さな天

井から下つて居る電燈はそのまゝついてゐてローランドが蠟燭を取出した抽斗は開いたまゝになつてゐた。

「さてローランド君。君はこの室に居て呉れ給へ。」とカリングは言つた。よく氣を附けて押入れの中へは大佐といへども這入らせないで呉れたまへ。それから二匹の馬を忘れぬやうにし給へ。」

「馬ですつて。」

「さうだよ。馬の番をせねばならぬよ。此處に居る限りは大佐の下男だから、馬の番をするのは當り前ぢやないか。それから主人の信用を得るやうに、出来るだけ役に立つて上げて呉れたまへ。僕等の見つけた事や、枯草の話などは無論してはならぬよ。」

「大丈夫です。」

「よろしい。それではこれから僕は本邸へ歸つて指紋の撮影をしよう。どうかしてその間にグリーンマ―がよい報告を持つて来るやうにしたい。」

「彼の追跡したのが目指す自動車ならばいゝですがねえ。若し下男を殺した連中が別の道を……」

「だつて僕等は馬を握つてゐるではないか。忘れてはいかんよ。一時間経つと幕が開く事をよく覚えてゐ給へ。」

然しながらカリング自身は何よりも大切なことを忘れたのである。下男部屋の机の上へあの恐い爆弾を忘れて来たのである。

第十三章 指 紋

カリングが走り戸の指紋を撮影するとして客室へ來ると、驚いた事に指紋はもはや消えてなくなつてゐた。即ち何者か、小さい血痕を拭ひ去つたに違ひない。

彼は直ちに大佐の方に向つた。

「實に不思議ですなあ。」と大佐も言つた。

「わしもあれからずつと机に向つてゐました。客室に通ずる戸は開いてゐて、猫一匹通つたつて分りません。」

「僕が行つてから、ずつとこの室におゐででしたか。」とカリングはたづねた。

「居ました。」と大佐はこの明らかな偽りを少しも恐れないで答へた。「ずつとこの室にゐてグリーンマ―と言ふ人を待つてゐたのです。」

「ほんたうに誰も來ませんでしたか。」

「先刻娘がおやすみなさいと言ひに來た外は誰も來ません。まさか娘を兎や角おつしやるわけではないでせう。」

「無論さうです。併し出来る事なら一寸お嬢さんにお目に懸りたいですが。」

「よろしいとも。寢てさへゐなければ。」

ラーニユヒルドはまだ日記を書いてゐたところであつたから直様降りて来た。

「何かお見つけになりました。」と彼女は熱心にたづねた。

「見つめましたよ。この事件には僕がはじめ考へたよりも澤山の共犯者があることを見つめました。」とカリングはきつぱり言つた。「指紋が消えて失くなりましたよ。」

「それで私にお話なさうとするのですか。」と彼女はつんとしてたづねた。

「さうです。お父さんとあなたの外に誰も此處にはゐませんでしたもの。」

「わしはたゞ誰も見なかつたと言つただけです。」と大佐が口を出した。「けれど實際は誰かこの室にゐたに違ひありません。」

「勿論さうです。あなたは何も怪しいものを見なかつたとおつしやいました。それにも抱はらず指紋は消えて失くなりました。ですから指紋を消した者はこの室に隠れてゐた者をかばふ心算でやつたに違ひありません。」

「するとまだ悪漢共が近邊に居るのか知ら。」と大佐は叫んだ。「まるで幽霊のやうな奴等だ。」

「さうらしいですね。」とカリングは言つてラーニユヒルドに向ひ、

「一寸二人でお話して下さいませんか。」と大佐に聞えぬ位の小さい聲で言つた。

彼女は暫らく躊躇して不安と恐怖の眼を以て彼を見つめた。然しやがて立上つて二階へ上つて呉れるやうに合圖をした。

「わしに隠さなければならぬ事があるのですか。」と大佐は不愉快な顔をしてたづねた。

「決してさう言ふわけではありません。」とカリングは言つた。重要な捜索の際には二人でやるのが僕の手段です。別に御異存は御座いますまい。」

「何卒御自由に。」と大佐は奥齒に物のほさまつたやうな返事をした。

二階に来るやいなヤカリングはいきなりラーニユヒルドが顔を赧くするやうな質問を始めた。

「あなたはトルハルトさんの指紋を消して、それでトルハルトさんの爲になるとお思ひですか。」

「私、私が？」と彼女は吃つて言つた。「ひどいですわ。」

「ひどいかも知れませんが。」と彼は冷淡に答へた。「然しこの際何事も容赦は出来ません。僕は指紋がなくても金庫の後に隠れてゐて、逃げ出したのがトルハルト中尉であるといふ證據を擧げる事が出来ます。」

それから彼は彼女に向つて中尉が晩方、内密に訪ねて来たこと、指を傷付けたこと、大佐が不意に歸つて来たので狼狽して家の内へ逃げ込んだことなど、よく知つて居る旨を語つた。そしてなほ走り戸の前の客室の敷物の上に小さな絆創膏を見つけたこと、スキッチをひねる時に食指に傷のあつたことを認めたことを話した。

「それだけで充分だらうと思ひます。がその外に僕の寫した靴跡も立派な證據となります。」

「誰がそれをあなたにお話したですか。」とラーニユヒルドは聲を慄はせてたづねた。

「誰にも聞きません。」とカリングはアンナに約束したことを忘れないうできつぱり答へた。

「けれど僕はあなたが何か秘しておるでいることを直ぐ見破りました。中尉がお父さんのお留守にあなたを訪問する、であらうことは當然だと思ひました。そして種々観察をし、推理をしてこの結論に達したのです。」

ラーニユヒルドの眼には涙が一ッぽい溜つた。

「ほんたうに何もかも意外でしたわ。私どうしたらいいでせう。」と彼女は言つた。

「僕の味方になつて下さるお考へでしたら、何卒正直に何もかも打明けて下さい。無論眞實を突き止めねばおきません。中尉が此處に居られたならば確かに腹藏なく話して呉れたに相違ありません。」

「トルハルトさんがこの犯罪に關係していらつしやらうとは、どうしてもおもへません。」と彼女は言つた。

「偶然と言ふものは人を危機一髪一髪の所へ連れて行くものです。たゞその渦に巻き込まれずに再び出て來得るか否かが問題です。中尉は僕が手を下して居ることを知つて居らるゝから恐らく巧く逃れ出られるでせう。」

「ではあなたはトルハルトさんには嫌疑をかけてはいらつしやらないのですか。」と言つた。彼女の顔は急に明るくなつた。

「瑞典の陸軍士官は誰でもそんな嫌疑のケの字もかけられない人ばかりです。」と探偵は答へた。

「正直に申しますならばトルハルト中尉は實に立派な方だといふ印象を僕に與へられました。僕は無名の手紙の主が知れ、中尉が窃盜にも殺人にも間諜の仕事にもなんの關係もないと言ふ事が分る日が來ると確信いたして居ります。」

「嬉しいですわ。」とラーニユヒルドは眼を輝やかせて言つた。「あなたのお言葉を信じますわ。なんでもお聞き下さい。お答へしますから。」

カリングは時計を出して見た。それは一時に十分前であつた。

「もう大變遅いですねえ。」と彼は言つた。

「もうおやすみにならねばなりません。何もかもおたづねしてゐてはとても時間がありません。それに僕はこれから外の方へ手を廻さねばなりません。ですから指紋をお消しになつたかはりに明日の朝まで日記を拜借することにしたと思ひます。僕の知りたと思ふことはみんな書いてあると思ひますから。」

ラーニユヒルドはぼつと顔を赧らめた。

「それは困りますわ。一年間の出來事を何もかも書いてしまつたのですもの。」

「尙更結構です。僕はあなたやお父さんやトルハルトさんが巻き込まれなかつたこの事件は昨日や今日起つた事ではないと思つてゐます。殊にトルハルトさんに對する中傷的な仕事は、餘程以前にその源があると思ひます。」

ラーニユヒルドはうなづいた。

「その事はトルハルトさんも今晚私にお話なさいました。けれどあなたのお考へになつてゐるやうにはねつけられた男の復讐行爲では決してありません。私はその説明をあの人にして上げました。」

「けれど分りませんよ。多分あなたにも分らせないやうにして居るのです。少くとも賤しい仕事が付くまでは自分より幸福な男を倒さうとはしますまい。そして若しのこの賢い男がその行爲を繼續するならば、トルハルト中尉はすつかり滅ぼされてしまひます。」

「まあ、どうしたらいいでせう。」

「日記を貸して下さい。」

「けれどそれは無理ですわ。その日くの出来事はばかりでなく、感じた事や考へた事や空想までも包まずに書いてあるので。今晚トルハルトさんは父が歸つて来る直ぐ前に誰か男と前に婚約をしやしないか、話して呉れとおつしやいました。それで私はたつた一人だけさういふ人がありました。今は瑞典には居ないといふ事を話しました。名前を聞かせて呉れとおつしやいましたが、それだけは申上げられないと言ひました。トルハルトさんにさへお話しな秘密を、あなたは私に話せとおつしやいますか。」

「あなたがトルハルトさんを眞實に愛していらつしやいますならば貸して頂かなくてはなりません。」
ラーニユヒルドはこれを聞いて急に立上つた。彼女の黒い眼は異様な光を發した。カリングは十八

歳になる少女がこれ程、美しくい姿をして居るのを未だ嘗て見た事はないと思つた。

「愛して居りますとも。」と彼女は言つた。「私は決して指紋を消すやうな賤しい事をしたことはありませんけれどトルハルトさんの身が危なくなつたと思ひつめたものですから、あんな事をしてしまひました。」

「けれど却つて中尉を救ふどころか、反對に嫌疑を深めるやうな事をなさつたのです。あなた自身が中尉を疑つてゐたればこそ、さうなさつたのではありませんか。」

「いゝえ、決してさうではありませんわ。トルハルトさんがかう言ふ悪事に關係してゐなさるなどは夢にも思つて居りません。父にさへもあの事故にたてをつきました。あの人の爲ならばどんな事でも私は致します。」

カリングはうつむいた。この若い令嬢に對して彼は外の所でやるやうな脅し文句や、その他の緊急な探偵方法を應用するわけには行かなかつた。彼は却つて彼女に壓迫されてゐるやうに思つた。若し日記を自發的に貸して呉れなければ、とても借り出す事は難かしいと思つて、それで方針を變へて言つた。

「今のところ種々の重大な問題が起つて居ます。トルハルト中尉ばかりでなく、お父さんの一生涯が左右されやうとさへして居ります。あなたもお聞きになつた通り、お父さんは秘密書類を盗られて、一生を破滅にしたとおつしやいました。」

「では二度目に盗られたといふのはほんたうですか。」と彼女は息をはずませてたづねた。
「さうです。お父さんはあなたにお話しになつたでせう。皆が下男部屋に行つてゐた留守中に盗まれたのです。」

「私はたゞ父が餘りに昂奮して宜加減の事を言つて居るのだと思ひました。今晚はほんたうに妙な事ばかりしてゐましたもの。」

「とおつしやると。」

「例へばつい今し方した事を忘れてゐました。先刻庭の方へ出る聲音がしましたので窓から見ますと確かに厩の方へ歩いて行きました。ところが何しに行つたのですと聞きましたらお前の氣のせゐだ。外へなど出やしないと申しました。」

「さうですか。確かにこの事件がお父さんの氣を變にしたのでせう。ですから成可く靜かにさせて上げなければいけません。けれどこの事件はお父さんや、中尉ばかりでなく祖國の生命に抱はる重大事件です。世界戦争中、この國はあらゆる方面から脅かされてゐます。そして敏捷な間諜共は土龍のやうに明るみへ出せないやうな仕事を盛に行つて居ります。姿も見せず、音もさせないで彼等は到る處を走り廻つて、少し爲になりさうな處ならば何處にでも巢をかけます。」

「とおつしやると此處の家へも巢をかけたと言ふ意味ですか。然しそれはいゝ事です。父は餘り人を軽く信用する質ですから、いゝ見せしめになるかも知れません。けれど若しトルハルトさんに嫌疑がかつたらばどうなりませうか。」

「ほんたうに冗談や遊びごとではありません。若しあなたが中尉を救はうとお思ひになるなら日記を貸して頂かなくてはなりません。單にトルハルトさんの將來ばかりでなく、その一命にかゝはる大事です。」

彼女の内心では恐しい争闘が始まつた。彼女は自分だけに書いた日記を他人に讀ませねばならないのであらうか。殊にこの事件とは何の關係もない記述までも讀まれねばならぬであらうか。

「トルハルト中尉を救ふ方法があれば僕は直ぐそれをおこなひます。」と彼女の躊躇してゐるのを見てカリングは言つた。「けれどそれにはあなたの力を借りねばなりません。日記の内容は決して漏らしませんから、暫らく貸して頂きたいのです。」

彼女は眼を輝やかせて探偵を見たが、その眼には絶對的の信用が現れてゐた。

「日記を差上げます。一枚も破らず持つて行つて頂きます。」

彼女は日記を取りにその部屋へ這入つて行つた。後に残されたカリングは心の中にこの勇敢な美しい女に果してトルハルト中尉が匹敵し得るであらうかと考へて見た。

やがて彼女が戻つて来て彼に日記を渡した時、彼は彼女の手を固く握つて言つた。

「ありがたう御座います。決して後悔なさるやうな事はいたしません。」かう言つて下へ降りようとしたが不意に思ひついてたづねた。

「トルハルト中尉は熱心なスポーツマンださうですね。」

「はあ。金メダルまで持つて居られます。」

「何が一番お上手ですか。」

「馬術です。何度も一等賞を貰ひました。」

「も一つ伺ひますが。」とカリングは満足さうに頷いて言つた。「中尉は外國語に堪能ですか。」

「露西亞語だけです。露西亞語は父に劣りません。父は世間の噂によりますと、露西亞人そつくりの露西亞語を話すさうです。トルハルトさんは三年間露西亞に居ました。」

二人の會話はこの時、庭の方から起つた騒々しい音で遮ぎられた。カリングは高い嘶きと蹄の音を聞いた。

「馬が。」と彼は叫んだ。「一時だ。」かう言つて彼は階段をころがるやうに走り下りた。

第十四章 午前一時

美しい女の眼に見惚れてうっかり仕事を忘れてしまつたのだとカリングは自分を責めた。彼はローランドにあれ程まで、馬を見張つて居れと言ひつけ、午前一時に悪漢達の計畫した爆發の起る事を言ひ聞かせて置いたのである。それにも抱はらずたうとう取逃がしてしまつた。立關の所で彼は同じく走り出さうとする大佐に出會つた。

「いけません。」と彼は大佐に向つて言つた。「決して誘き出されていけません。ピストルを握つて何卒此處にゐて下さい。」

大佐は不本意ながらもカリングの言ふ事を聞いた。カリングは客間を通つてヴェランダから後庭へ出た。本宅から射して来るぼんやりした光の中に、二つの大きなものが動いて居るのを見た。大佐の馬が嘶きながら走り廻つて居るのであつた。

カリングはその外になほ別の音を聞いた。厩の方に當つて人の叫び聲を聞いたのである。その叫び聲は騒いでうーんと言ふ音に代つて暗の中に消えた。彼は矢庭にその音の方へ駆け出して行つて見ると庭の中程に二人の男が格闘して居る様子であつた。傍へ近寄つて見て初めて彼はそれが死物狂ひの格闘であると分つた。

その中の一人は黒い髭を生じた見知らぬ男で今一人の男即ちローランドの上に跨がり兩手を持つてローランドの首を締め當に息の根を止めようとしてゐた。

探偵は電光の如く駆け寄つて上の男を突き飛ばした。それと同時に拳を以て彼の得意な顎打ちを喰はせた。すると男はうーんと言つて氣絶してしまつた。カリングは立上らぬ先に氣絶した男に手錠をはめて、本邸に引返して、麻繩を貰ひその足を縛つた。

その中にローランドは幾分か氣力を恢復し唾を吐いて呪ひ聲を上げた。

「先生、ほんたうによい時に來て呉れました。もうすこしで殺られてしまふ所でした。」と彼は嬉し

さうに言つた。

「どうして君はたつた一人の男に負けたのかい。」とカリングは驚いてたづねた。

「先生のお言葉にも似合ひませんねえ。」とローランドは笑つて言つた。「丁度この男が馬を出しに忍び込んで来たので、捕へようとしてゐると馬が急に驅けて来て後から僕を突き倒したのです。丁度私は奴のカラーを握つてゐた時でしたから、二人ながら地上に倒れました。所が不幸にも私が下敷きになりましたから奴に咽喉を締められたのです。いやもう危ない所で先生のお蔭で命を拾ひました。」

「さうかも知れん。それは兎に角此奴を自動車置場へ運ばうぢやないか。今に正氣に復するだらうが覺めて見たら餘りいゝ氣持もすまい。」

二人は男を運び込んでそれから馬を捕へてませに結びつけた。

「僕はこれから邸を一まはり見廻つて来る。君は此處にゐてこの男の番をして呉れ給へ。決して逃がさぬやうにし給へ。若し知らぬ男が近附いたら容赦なく撃ち殺し給へ。」

「承知しました。」とローランドはポケットからピストルを取出した。探偵は其處で下男の造つた小さな門から暗の中へ出懸けた。鎌のやうな月が雲の後に隠れて空には星一つ見られなかつた。

十分ばかりローランドは自動車置場の扉の前に立つてゐた。二三度大佐がヴェランダへ出て覗いて見た外には、何の物音も人影も現れなかつた。突然カリングはローランドの傍に現れた。

「何ともないかね。」と彼はたづねた。

「はあ、まだ奴も正氣になりません。」

「よろしい。それではなかへ這入つて、大佐の自動車を用意して呉れたまへ。もう直き街へ歸りたいから。」

「グリーンマーはどうしました。」とローランドは扉を開けながら聞いた。

「グリーンマーは丁度今道で會つたから今頃は本宅へ行つて居るだらう。歸る前に一應彼の報告を聞いておかう。」

「この男はどうします。」と懐中電燈で氣絶した男の顔を見ながらローランドがたづねた。

「一緒に連れて行くよ。ほんの手先であまり役に立たぬかも知れぬがこの事件の祕密を知つて居るに違ひない。兎に角一時、探りに使はう。」

かう言つてカリングは本宅に来て廊下でグリーンマーの報告を聞いた。

グリーンマーは道で會つた自動車を先方に悟られぬやうにつける事が出来た。その自動車は殊更に種類な廻り道をして最後に極く細い舊式なファルハラ街へ廻り、最も古い家の前で止まつた。

グリーンマーはオートバイで追かけ、直ぐ近くにある家の入口に隠れて覗く事が出来た。彼は自動車の乗つて来た運轉手が家の扉を開いて中へ這入つて行く姿を見た。

グリーンマーは直ちに自動車の傍に走り寄つて中を覗き込んだ。客はゐなかつたが人間の形をした大きな包みとその他の物が置かれてあるのを見た。併し充分見届ける暇がなかつたので、そつと再び入

口に引返した。

すると運轉手は外の男を連れ立って出て来た。

「そりや結構。」とその男は言った。「思つたより好都合だ。君は失敗を償つたわけだ。」

「さうです。もうこれでジョンの方は片附きました。」と運轉手は笑つた。「いやどうも、中々骨でし
たよ。」

二人は自動車に近づいて大きな包みを取出した。

「馬鹿に重いぢやないか。」と男は言った。

「だつて軽くなるわけはありませんや。」と運轉手が言ふと二人は苦笑した。

やがて二人は庭を通つて扉の内側に消え去つた。街に面する門の扉も自動車の扉も開けたままになつてゐた。

そこでグリーンマーは再び自動車に近寄つて手に當る物を掴みとつたが、それは紙包であつた。そこへ二人が戻つて来たので、グリーンマーは自動車の後側へしやがんだ。

「巧く行つたでせう。」と運轉手は非常に満足したらしく言つた。「書類は手に這入るし、下男の奴は死んでしまふし、誰にだつて分りつゝありません。」

「さうしたいものだ。」

「集會はいつですか。」

「明日の晩七時だ。」

「いつもの通り此處のインフェルノですか。」

「さうだよ。可哀さうな奴等に齒切りりさせるには持つて來いのところだ。このインフェルノのお蔭でどれだけ澤山仕事をしたか分らない。」

二人はグラ／＼と笑つて自動車からすべての物を取出して家の中へ運び込んだ。もはや自動車の中には何もなくなつたと知つたので、グリーンマーはオートバイを走らせて最大速度でもどつて來たのである。

「巧くやつたねえ。」とカリングは言つた。彼はその自動車の立止つた家の番號を書き寫してグリーンマーに見張りの手順を指圖した。

「自動車から取出して來た包を開けて見たかね。」と最後にカリングはたづねた。

「いゝえ。その暇はありませんでした。これがそれです。」と言つて彼は小さい四角い包を外套のポケットから出した。

カリングがその包を開いて見ると中からランプカードの束と同じ大きさの手帳とが出て來た。彼がその手帳をはぐつた時、一枚々々彼の興味を増して行くやうに見えた。それから彼は巧な手附きでカードを指の間からすべらせて再び手帳もろともしまつた。

「思つたよりいゝものが手に這入つた。」と彼は言つた。「中々の大手柄だよ。然し今はこれを詳しく

研究してゐる暇がない。これから直ぐ歸つて明日の活動の準備をせねばならぬ。」

「明日は御一緒に仕事をさせていたゞけますか。」とグリーンマーは眼を輝やかせてたづねた。

「さうなるかも知れぬ。兎に角僕はインフェルノの集會に列席しようと思ふ。きつと面白い事があるに違ひない。」

それから彼はグリーンマーを大佐の事務室に案内して見張番をせしめた。大佐が庭の一件を頻りに聞きたがつたので、彼はどう言ふわけか馬が放ち出されたが、多分それは皆の者を再び誘き出す計畫だつたらうと説明した。

「兎に角今晚はもう大丈夫です。」と彼は言葉を續けた。「もう決して誰も這入つて來ません。御都合によつてはおやすみになつてもよろしい。僕はこれから直様街へ引返さなければなりません。お差支へなかつたならば、自動車を貸していたゞきたいと思ひます。」

「よろしいとも。」

「新しい下男が運轉手になつて呉れます。明日なんとかまたお報せいたす心算です。では失禮いたします。」

カリングが厩に歸つて行くと、ローランドはガソリンが使ひ切つてしまつてあるから入れなければならぬ旨を告げた。「成程」とカリングはちつと考へて言つた。「かうして直様追跡されないやうに企んだのだね。けれど流石に……。」

彼は急に口を噤んだ。と言ふのは人事不省の男が身を動したからである。ローランドは直様その傍へ寄つて嘲るやうに彼を眺めた。

「君の拳は固いやうだねえ。」と彼は言つた。「けれど此處ぢやあなんと言つても駄目だよ。」

自動車のヘッドライトと天井の電燈がついて居た。男は妙な顔をして四邊を見廻し、起上らうとしてゐた。その時彼は手足が縛られて居るのに氣附いて呪ひ聲を發した。

「お前達は誰だ。」と彼はたづねた。「何故俺を縛つたのだ。」

「放しておくのは危ないからなあ。」とカリングは嘲つて言つた。「殊に君に取つてはなあ。」

「俺にだつて。何の話だい。」

「馬と駆けつこをするなどは冗談ぢやあるまい。」

「分らん事を言ふねえ。」

「分らなければ分るやうにしてやらう。僕はレオ・カリングだ。君を生捕つたと言ふ寸法さ。」

男は顔を蒼くして黙つた。

「君には僕達の言ふ事が分らぬかも知れぬが、僕も君が何故馬を放しに來たかは分らぬよ。尤も聖壇に供へた蠟燭の煙を吸はんやうにする爲だつたには違ひなからうけれど。」

男はびつくりした顔付きをして、幽霊でも見て居るかのやうにカリングを見つめた。

「貴様は悪魔だ。」と彼は吐き出すやうに言つた。

「さうかも知れぬ。」とカリングは落着いて答へた。「けれど僕が探さうとして居る奴も天使ではないらしい。」

男は手錠を取らうと思つて腕に全力をこめた。然し手錠はカリング自身が考案したもので容易に壊れる性質のものではなかつた。そこで彼は縛られた手を高く舉げて、矢庭に全力をこめて手錠もろとも三度地面を烈しく叩いた。

「手を引いた方が爲だよ。」と男は嘲笑して言つた。「俺が此處へ一人で來たと思つてゐるのか。」

丁度この時既の何處かで扉の開く弱い音が聞えた。探偵はローランドに男を見張つて居るやう、目くばせして直ちに走り出した。瞬く間に彼は建物の後の方に廻つた。

下男部屋に通ずる扉は少しく開いてゐた。カリングがそつと覗いて見ると誰もゐないばかりか爆弾の包が依然として机の上に横つてゐた。

今し方聞いた音はどの扉から發したのであらうか。誰でも此處へ這入つた者は眞逆爆弾が傍にあらうとは氣附くまいから何處か安全な所へ運び出さねばならぬが、その前にカリングは誰か祕密室へ忍び込んだのでないかを確かめようと思つた。

彼は押入れの扉を開いた。とその時、後に硝子の碎ける音と嘲り笑ふ人聲が聞えた。電光の如く彼が振向くと机の傍の窓硝子の破れ目から一本の杖がぬつと突き出されて將に爆弾の包が地面へ落され



かけやうとした。

カリングは全身に氷水を浴びたやうな氣がした。はつと思ふ間に爆弾は突き落され、すはや爆發が起ると思ひの外、彼は爆彈が落ちると同時に硝子の破れる音を聞いた。彼は次の瞬間、包の中から或る液體が流れ出て見る／＼地面に廣がつて行くのを見た。取る物も取敢へず扉を開いて探偵は外へ飛び出した。とその時再びあざ笑ふ聲を聞いたが、それは然しずつと遠い所からであつた。ところが彼が戸を閉て切らぬ中に下男部屋の地面は一面に火の海と化してゐた。

「憐だ、二硫化炭素に溶した燐だ。何といふ恐しい薬品を使ふのだらう。」と彼は呟いた。とてもこの火の海を消す事は出来ないから彼は直ちに本宅の人々に警報した。彼は手早く命令を告げると大佐初め唯々として服従した。

グリーンマーは本邸に止まつて見知らぬ者が來たならば容赦なく撃ち殺すこと、大佐は二匹の馬を前庭に連れて來ること、かう告げておいてカリングは自動車置場を目がけて走つて來るとローランドは附近の騒動には頓着なしに忠實に捕虜を護つてゐた。

「愚圖々々しては居られない。奴をもう一度氣絶させて呉れ給へ。」とカリングは簡單に命令した。ローランドが直ちにゴム棒を振上げて男の頭上に振下すと男はうーんと言つて再び氣絶した。

「餘り丁寧な行き方ではありませんが。」と彼は笑つて言つた。「けれど若し……」

「叱つ。」とカリングは叫んだ。「家が燃えかけたから直ぐ出懸けなければならぬ。人に見られぬやう

にこの男を自動車に運びたまへ。」

次の瞬間男は自動車の中へ運び入れられた。ローランドはひらりと運轉手臺に飛び上つた。

「一寸門の所へ廻して其處で待つて、呉れ給へ。」とカリングは命令した。彼が厩を見ると半分は既に火になつてゐたから丁度いゝ都合であつたと思つた。幸に風が吹いてゐなかつた爲に本邸に飛び火する憂ひは更に無かつた。

その時、四方から提灯を持つた澤山の人々が叫び聲を上げて駆け寄つて來た。消防には不自由がないと見て取つたカリングは出來るだけ早く逃げて捕虜を安全地帯へ運ばうと決心した。大佐は二匹の馬を他人に番して貰つてカリングの所へ走り寄つて來た。

「この大切な場合に逃げて行くのですか。」

「火事の憂ひは是以上ありませんよ。」とカリングは大佐の眼を鋭く見つめて言つた。

「どうしてですか。」

「聖壇の蠟燭は燃え切れましたよ。」とカリングは一語々に力をこめて言つた。大佐は何かで殴られたやうにたぢ／＼としたが何とも言はなかつた。

一手の空き次第ローランド君をかへします。」と探偵は言葉を續けた。「決して書類から眼を放さないやうに、いつ何時また意外な事が起るかも知れませんが用心して下さい。」かう言つて彼は自動車に乗つて萬一の爲にピストルを取出した。

「さあ出懸けよう。」と彼はローランドに言つた。

「どうして火事になつたのですか。」と自動車を走らせながらローランドがたづねた。

「僕が一寸／＼つかりしたからさ。」とカリングは答へた。「なにしろまだインフルエンザが癒つたばかりであの爆弾を机の上に置き忘れるやうなへまな事をしたのさ。」

ローランドは小聲で口笛を吹いた。

「うつかりどころぢやありませんよ。」と彼は言つた。「どうしてあの馬の一件が分つたのですか。」

「そりやあ君どんな悪漢でも人情といふものがあるからねえ。犯人は殊に動物を愛するものだよ。矢張り僕の言つた事が當つた。」

「さうです。そのお蔭でこの男を捕虜にしました。」

「そればかりぢやない。」とカリングは言つた。「この事件の、いはゞ秘密の扉を開く鍵まで手に入れたよ。」

「扉の後には何が隠れてゐますか。」

「或る女さ。」

第十五章 カードの秘密

自動車は途中無事にストックホルムへ着いた。カリングは捕虜の相棒達から追跡されるに違ひない

と思つて豫め用心してゐたが何事も起らなかつた。火をつけた男は固より自動車に火を避ける爲に引出されたものであると思つてゐたに違ひなかつた。無論自動車の中に縛られた男がゐるやうななどは思はなかつたであらうし、或ひはよく放火者のするやうに自分の見物場所から離れる事を欲しなかつたかも知れない。

カリングの家に自動車に着いたのは午前二時であつた。捕虜はまだ人事不省に陥つてゐたからカリングは表の客間に運び込ませ、ソファの上に寝かし足枷を取り去つた。

「これから直ぐストックズンドへ引返させうか。」とローランドがたづねた。

「いや、此處にゐて呉れ給へ。大佐よりも僕の方が君を欲しいのだ。僕は非常に疲れたからどうしても君にゐて貰ひたい。」

カリングはそれから連れて来た男を精密に検査した。男は附け髭も鬘もかぶつて居らず、髪も染めてはなかつた。シャツには名前が書かれてなかつたから名前を知る手掛りはなかつた。ポケットの中には、二三枚の紙幣の這入つた小さな紙入と錢入と鍵束と、なんにも書いてない手帳と黒いマスクとがあつた。

「ははあ。」とローランドが言つた。「かう言ふマスクは土龍にはなくてはならぬものですな。」

カリングはうなづいた。彼は少しく失望した。彼の見つけたものはあまり大した説明を與へてくれなかつた。彼はもつと多くを期待してゐたのである。

そこで彼がもう一度念入りに調べて見ると左の袖の裏地に小さな秘密のポケットがあつてその中にトランプカードと手帳とが入れてあつた。しかもそれはグリーンマーが悪漢達の自動車から持つて来たものと同じであつた。

「ふむ。」とカリングは喜んで言つた。「土龍どもは時々歌留多遊びをするらしいねえ。多分インフレに秘密の俱樂部でもあるのだらう。」かう言つて彼は直ちに手帳を調べ始めた。するとその中には全く読み難い暗號が書かれてあつた。段々はぐつて行くと、その後にはなんにも書いてなく更にその次の頁には普通の文字で、

Demetris Office, Postbox 913 København. (デトメリス事務所、郵便局私書函九一三、コーペンハーゲン)

と書かれてあつた。

それからその手帳の最後に次のやうな表が書かれてあつた。

27/7.....	IV:5
3/3.....	III:7*
10/3.....	II:10**
17/8.....	III:1
24/8.....	I:4*

「ふむ。」とカリングは更に呟いた。「こりや面白い。けれど残念ながら今は時間がない。一彼は一生懸命になつてこの表とコーベンハーゲンの宛名とを書き寫し、それからランプを數へて六枚だけ足らぬことを知つた。そこで彼はローランドに手傳つて貰つて歌留多を分類すると、缺けて居る六枚はスペードの四、とクラブの十と、ダイヤの七と、ダイヤの七と、ハートの五、とハートの九とであると分つた。

これを書き込んだあとで彼はカードと手帳とを、袖の祕密のポケットの中へかへし、次に數々の品物をポケットの中へ返した。

「君が強く毆つて呉れたお蔭で樂に仕事が出来た。」と彼はローランドに向つて言つた。「が、こゝで息を吹き返させてやつて呉れたまへ。僕はその間にこれを少し詳しく研究するから。」

かう言つて彼は机の前に腰掛けてグリーンマーから受取つたカードと手帳とを取出した。手帳の初めの部分には矢張り同じやうなわけの分らぬ暗號が書かれてあつた。それから何にも書いてない所があつて最後に同じやうな暗號で書かれた部分があつた。この手帳は今見た手帳よりも一層

要心深く書かれてあつた。すべて暗號が用ひられ、初めの部分は一層難かしさうな暗號で書かれてあつた。そこでカリングは直ちにこれには前の手帳とは違つた事が書かれてあるのだと知つた。然しやはり讀みがない同じ暗號であつた。

その暗號は數字や分數や文字や横棒や十字や、星形や種々な幾何學圖などで成立つてゐた。一見、何が何やらさつぱり分らず、カリングは愈解けがたい祕密に打つかつたと思つた。彼は已むなく、それはそのままとして、段々はぐつて行くと只二行だけ暗號で書かれた頁があつた。彼はその時、不圖これが前の手帳に普通の文字で書いてあつたコーベンハーゲンの宛名ではないかと考へついた。

その宛名もこの通り二行に書かれてあつたのである。暗號は次のやうであつた。

$v214h\frac{1}{2}g \quad \frac{1}{3}t - \frac{2}{5} \times 6 \quad j\frac{2}{3} \cdot \cdot \cdot z\frac{3}{5}c \quad \frac{1}{2} \quad d/10 \quad b/s$

$n/8 = \Delta krid*$

この符號は此處に書かれた如く五つの部分に分たれてゐて、即ち前の宛名の言葉と同じ數である。そして符號の數を數へて見ると全體で三十三あつた。

「このコーベンハーゲンの宛名が解式になりはすまいか。」かう呟いて彼は前の宛名の文字を數へて見た。すると矢張り三十三個あつた。

そこで彼は宛名の文字を書き下して、その下へ暗號の記號を書き並べて見た。すると彼は同じ文字は必ずしも同じ符號で現されてゐない事を發見した。宛名には例へばNの字が二度あつてOの子が三度ある。それから初めのeの字は2が當てはめられ、二度目のeには4が當ては

められ、二度目のeには4が當ては

められ、三度目にはり、四度目には正三角形が當てはめられてある。又最初のOの字には $\frac{1}{2}$ 、二番目のOの字には $\frac{2}{3}$ 、三番目のには $\frac{3}{4}$ と置かれてある。たつた一度しかないAの字には1が當てはめられ、iの字は二度あるが、初めのには $\frac{1}{2}$ 、二度目には $\frac{2}{3}$ が當てはめられてある。

それ故この暗號には一定の系統が立てられてあるに違ひなかつた。そこでカリングは手帳の初めの部分にある頁の文字を研究して見たところ、母音はすべて字數で現され、而も順序に従つて數が増して、行き四回目には幾何學的圖形で、現されてある事を知つた。

即ちAの字は寄數の135で現され、四回目では圓で現されて居る、eの字は偶數で現され三度目からは正三角形で現されて居る。iの字は $\frac{1}{2}$ といふ風で最後は正方形で現され、Oは $\frac{1}{2}$ 等て現され、最後に直角三角形で現されて居る。

子音はこれに反して他の子音で置きかへられてあつた。そしてそれはアルファベットの最初のもの最後のものと取換へ、次のものを最後の前のものと取換へるといふ風の行り方であつた。そして同じ子音が二回あると二回目的ものは特別の符號で現すことになつてゐた。

例へばCircleの語のiの字の初めはeで現され、二度目は横棒で現される如きがこれである。

この暗號は非常によく考へてあつて、非常に難解であつた。若しカリングがデンマークの宛名を見つけて出さなかつたならば、これを解決するに非常な時間がかつたに違ひない。然し幸に解式を得たので樂に解くことを得たのである。

一方の手帳には暗號ばかりで書かれてあつたにも拘はらず、他の手帳に同じことが普通の文字で書かれてあつたと言ふことは、どう考へても幸運であつたと言はねばならない。

それから彼は今し方寫した表の研究に取りかゝつた。左側の列は確かに日附けを書いたものであるらしかつた。そこで彼は曆を取出して調べて見るとすべてそれ等の日附けが月曜日である事を知つた。即ち最初の日附は七月二十七日であり、最後の日附は九月七日即ち今日である。突然彼は光明を認めた。今晚即ち九月七日にインフェルノで「土龍」の會合があるではないか。

それ故この表に書かれた日附はこれまで開かれた會合を書かれたものに違ひない。そこで彼はその他の數字を六枚の失くなつてゐたカードの名前と比較して見た。すると突然萬事解決したのである。實に簡單この上もない事であつた。

が、その時彼は研究を中止せねばならなかつた。と言ふのはローランドが男を蘇生せしめたからである。男は呪ひ聲を上げて立上つた。

「靜かにしてくれよ。」とカリングは命令するやうに言つて彼の傍へ近づいた。「今君は安全な場所に來て居るのだから安心するがよい。うっかりすると秘密警察の手に掛かるところだつたよ。」

「秘密警察？」と男は呟いた。「貴様こそ秘密探偵ぢやないか、先刻貴様は……」

「僕の顔をよく見たまへ。」とカリングは彼の言葉を遮つて言つた。「君は僕を知つてゐるのか。」
「知らない。けれど……」

「君を救ふためにあゝ言つたのさ。」

「救ふ？」と男は叫んだ。「けれど君はまさか……」

「同類の一人さ。」とカリングは言つた。

男はこの時ゲラ／＼と笑つた。

「静かに。」と探偵は言つた。「今晚インフェルノで會ふと君は笑つても居られまい。知つてのとほり今晚は八月十日の晩と同じやうに大切な相談があるのだ。」

男は恰も幽霊でも見るかのやうに驚いて彼の顔を見つめて言つた。

「どうして君は。どうして。」と彼は吃つて言つた。

「何もかも知つてるよ。僕は土龍の仲間だよ。その證據を見せようか。君のカードを貸し給へ、すれば今晚君に扉を開いて呉れるカードを探し出すから。」

男はきつと身づくろひして縛られた腕を脇腹におさへつけてカードを持つて居るかどうかを探つて見た。彼は今や笑ふどころの騒ぎでなく何とも言へぬ不安の表情がその顔に讀まれた。

カリングは靜かに机からカードを出してその中の一枚を抜き取つて男の眼の前へ突き出した。

「スベードのキングだ。」と男は叫んだ。「君は悪魔に違ひない。」

「さうかも知れぬ。」とカリングは落着いて言つた。

カリングがそのカードを東の中へ戻した時男はカリングの一舉一動に眼をそゝいだ。彼は立上つて手錠のき、探偵に躍りかゝらうとする様子をした。ローランドは要心の爲に一步前に進んだ。

「そのカードは誰のだ。」と男は小聲でたづねた。

「僕のさ。もつと證據が見たいかね。一かう言つてカリングは歌留多の束を男の眼の前に高く擧げた。裏だ。裏を見せてくれ。」と男は聲をしぼつて言つた。

探偵は裏返して十文字の書いてある裏を示した。

「執行官だ。」かう呟いて驚きの餘り、たち／＼とソファの上に踵き坐つた。俺はもう駄目だ。「氣をつけて呉れ。」とカリングはきつぱり言つた。この部屋には仲間でないのが居る。用心して呉れよ。」

かう言ひながらもカリングの頭は男が叫んだ今の言葉が何を意味するかを知らうとして盛に活動してゐた。男は確に執行官の前に立つてゐるのだと思つてもう駄目だと言つたのだ。して見ると執行官なる者はこの一味徒黨の者の中で餘程重要な男に違ひない。そして此處に居る男は確に執行官の前に顔出しの出来ぬ事をしたのに違ひない。男は祕密團體の掟を破つたのであらうか。自分勝手な事をし

て命ぜられた事をしなかつたのであらうか。或ひは口外を禁ぜられた事を喋つたのであらうか。彼は想像することは何にもならないことをカリングはよく知つてゐた。兎に角飽くまで、狡猾を以て應對して行かねばならない。そこで彼は男の傍へ近寄つて兩手を前に突出さしめ小さな鍵を持つて手錠を開いてやつた。

「僕が誰だか分つた上は手錠はもう入らない。」とカリングは言つた。「そして君を此處から歸してやつてもいい、が少し君の脈を診ておきたい。君の手帳も見せたまへ。」

かう言つた探偵の言葉はいかにも威嚴に満ちてゐたので男は直様手帳を取出して彼に渡した。探偵はそれを初めて見たかのやうに珍らしさうにはぐつた。そしてコーベンハーゲンの宛名の書いてある頁を見てきつぱりと言つた。

「こりやなんだい。君は本部の宛名を他人に報せる心算なのかい。偶然他人の手に這入つたらどうする。何故暗號で書かなかつたのだ。」

「僕は、僕は、それ位はかまはぬと思ひました。」と男は吃つて言つた。

カリングはそれから集會の表のところへ來てわざと怒つた風をして叫んだ。

「こりやどうだ。君は又この大切な秘密を漏らしてゐるのだ。おまけに會合の時の君のパスカードまでも書いてあるぢやないか。これは規則違反だよ。辯解が出来たら言つて見たまへ。」

「暗號は誠に難かしいです。」と男は辯解して言つた。「暗號で書くと非常に長く時間がかゝります。この數字は誰も察して讀む者はありません。」

「さうか知ら。」とカリングは落着いて言つた。「この前の集會に君はハートの九、その前はスペートの四、その前はダリヤの一、どうだね、これまで言へばもう充分だらう。」

この時男はわつと言つて不意に探偵に躍りかゝつた。その男は熊のやうな力を持つてカリングと床

の上どころがりながらカリングの咽喉を締めようとした。

その時、ローランドが手早く男を引放して再び手錠をはめた。

「此奴はかますにでも入れたらいいでせう。」とローランドは昂奮の餘り續け様に殴りながら呟いた。カリングは身體をゆすぶつた。

「君はどういふ罰を受けねばならんか知つてゐる筈だ。」と彼は脅し句調で言つた。「君は君の誓ひを破つて秘密を漏らしたばかりか上官に手を掛けたのだ。間諜の道具に使ふには適して居らん。」

「間諜ですつて。」と男は驚いて叫んだ。「僕は間諜ではありません。」

「だつて君は誓文を書いて何でも命令に従ふと誓つたではないか。」

「そりやあさうです。けれどどんな事をするのか知らなかつたのです。間諜の仕事をするのだと知つたら決して足を入れる心算はありません。間諜と言へば賣國奴ぢやありませんか。」

「君はそれを僕の前でも憚からず言ふのか。」

「言ひますとも。あなたの前でも他の奴等の前でも何時だつて言ひます。今までは何でもないやうな事ばかりに使はれましたが、どうやら仕事の筋が分つて來たやうです。かうなつた以上は確かに御免を蒙ります。何とでもいゝからして下さい。」

「すると君は僕等を密告しようと言ふのか。」

男は齒を噛み合せて暫らく考へてゐたが、聽て言つた。

「いゝえ、それだけはしません。」

「よろしい。」とカリングは答へた。「君と二人だけで一寸話がしたいから、別室へ来たまへ。」

かう言つて彼は男を先へ歩ませて次の部屋の中へ這入らせた。男は頭を下げ足を引きすつて奥の訊問室に這入つた。彼はこの室へ這入ればカリングの意のまゝに取扱かはれる事を知らなかつた。

餘程たつてからカリングは一人で戻つて來た。ソファの上で眠つてゐたローランドは彼の蹠音を聞いてびつくりして跳ね起きた。

「まあ寝てゐたまへ。」とカリングは言つた。「僕も暫らく眠るから。」

「捕虜はどうしました。」とローランドがたづねた。

「一番樂な拘禁を施してやつたよ。」とカリングは答へた。「自分から進んでやつて呉れと言つたので今頃はよく寝て居るだらうよ。思つた程の悪者ではなく己むを得ぬ事情で惡漢達の仲間入りをしたに過ぎない。段々詳しく訊ねたので、會合の手順もすつかり分つたから今晚は是非スペードのキングとして行かうと決心したよ。奴等はいつても會合の際に黒いマスクを冠るのだ。お互に誰だか分らず唯、議長一人が皆を知つて居るのだ。そして一人々々は入口で見た歌留多の名で呼ばれるのだ。いつも會合が終るとすべての者は棟梁の歌留多の束から一枚のカードを抜き出すのだ。そこで次の會合の時にそのカードを渡し、その時この前の會合の時にはどういふカードであつたかを言はねばならぬ。その言葉が眞實かどうかはよく調べられるから、這入つて行く者は替玉をやる事は出來ないのだ。それにどの會合の時も特別な合言葉があつて時々それを言はされるのだ。」

ローランドの眼はこれを聞いて俄かに輝いた。

「その會合に出たいものですか。」と彼は言つた。「僕もお伴が……」

「それは駄目だよ。」とカリングは言つた。「僕が今男に見せた歌留多カードは殺された下男のものらしい。グリーンマーはそれを死骸の運ばれた自動車の中で見つけたのだからねえ。だから死んだ下男のカードを持つて行けば下男の替玉だといふ事は直ぐ分るからねえ。君とグリーンマーとその他に六人程の力の強い男が附近に隠れてゐて合圖をすると中へ這入り込んで來る事にしよう。そして一味の者を一度に擧げたいと思ふのだ。」

「幾人ですか。」

「そりや時によつて違ふが九人よりは多くはない。今晚は多分僕の他に八人居るだらうと思ふ。」

「そいつは面白いですなあ。けれど先生一體どうしてあなたは歌留多の祕密を嗅ぎ出したのですか。どうしてこの男が今晚スペードのキングだといふ事を知つたのですか。」

「君はブリッチが出來るかね。」

「いゝえ。けれどポーカーなればやります。」

「さうすれば君はハートが一番上でその次がダイヤ、その次がクラブ、その次がスペードだといふ事を知つてゐるだらう。あの手帳の表を見ると七つの違つた數が書いてあつてどれもローマ數字が一つ

とアラビヤ数字が一つ書かれてあるのだ。ところが歌留多の束の中には六枚しか缺けてない。そこでその六枚と表とを比較して見ると初めの三つが失くなった数だと分つた。而もローマ数字のIはスピードで、IIがクラブ、IIIがダイヤ、IVがハートだと分り、アラビヤ数字はカードの數、即ちエースがIでキングが13だと分つたのだ。そこで今晚は「I:13」と書いてあるからスピードのキングだと思つたのだ。何でもない事だらう。それから数字の後につけてある星は數が多い程會合の性質が重要なことを意味して居ると解釋したのだ。かういふ事は普通の團體の會合の際によくやる事で別に目新しくはないのだ。」

カリングは再びこの事件に關係した書類や記録を調べる爲に机に向つた。彼は眠たくないばかりか今はもう熱もあり、疲勞も覺えなかつた。病氣は恰も癒つてしまつたやうであつた。

それから彼はローランドを家へ歸し、二三時間眠つて来るやうに告げた。さうして、今晚經驗したすべての事をも一度よく考へて見て結論を得た。曉には自分も寢床へ入らうと決心した。

よく考へて見るとこの事件は今のところ全然離して考へなくてはならない二つの犯罪から成立つてゐた。その一つは大佐の書類が盗まれたこと、今一つは下男が殺されたことである。

併しながらこの二つの犯罪が何かしら相關聯して居ることは疑ふべくもなかつた。ジョンの死骸を自動車から持出した二人の男の會話、即ち一人の男が巧くやりましたよ。書類は手に這入つたし、厭なジョンは死んだし、と言つたのは確かに二つの犯罪が相關聯してゐる證據である。して見ると下男

は間諜共の道具であつて、目的を達した以上生かしておく必要はないと認めたのであらうか。或ひは大佐が考へたやうに自分の職務の爲に死んだのであらうか。

大佐「お、さうだ。大佐は怒つた時には人を殺し兼ねない人ではないか。然し大佐がジョンを殺したものとすると何故死體が土龍等に運び去られたのであらうか。多分警察が手出しすることを恐れたのであらうか。無論彼等は見つけられることを恐れたに違ひない。

「妙だ。」と彼は呟いた。「實に妙だ。この殺人事件は今まで手に掛けた最も難かしい謎の一つだ。」彼はこの事件に關係のあるすべての書類を眼の前にひろげた。それは即ちトルハルト中尉の悪口を書いたフィッボンと署名して大佐に宛てられた手紙と、土龍たちが探偵自身へ宛てた脅迫の手紙と、大佐に宛てられた例の電報とカードの束に屬して居る二つの手帳と、フォン・ヘーデン嬢の日記であつた。

第十六章 令嬢の日記

カリングが最初に手に取上げたのは大佐のポケットからすり取つた電報であつた。「巧くやつたわい。すりになつても暮して行けるくらゐだ。」と彼は呟いた。

電報は三時二十分にフディングから發せられたもので次の言葉が書かれてあつた。

ストックズンドにてフォン・ヘーデン大佐へ。義眼が來て脅します。心配ですから直ぐ

来て下さい。

マリア

探偵は併しながらこの電報について餘り長くは考へてゐなかつた。マリアが誰であるかは突然この夜中に探し出せるわけがなかつた。多分フディングまで行かねばなるまいから夜が明けるまで手が附かなかつた。

そこで彼は次の質問を手帳に書いた。

「このマリアは大佐の例の祕密室へ時々来た金髪の美人と同じであらうか。」

それから彼は多大の期待をもつてラーニユヒルドの日記を調べ始めた。

彼の注意を最初に引いたところのものはリビエラに滞在中の記事であつた。彼女はパウエル・ザイゲンと名づける露西亞の伯爵で士官である男が度々訪問し、遂に求婚した事を簡単に書き記した。男は容貌が立派で金も澤山あつたらしいが、彼女は彼の前へ出るといつも催眠術にでもかけられて居るやうな氣がした。それは非常に不安な、麻酔をかけられるやうな氣持でそれが爲に彼女は男を恐れるやうになつた。彼女は男の言ふ事に何もかも反對して男を遠ざけようとしたけれど彼はそれにも拘はらず、離れようとはせずいつも別れ際に彼は又お目に懸りますと言つた。

容貌の委細についてはなにも書かれてなかつたが、たゞその男の額に横に刀傷があると書かれてあつた。

今年の七月まで、彼女は彼から何の音沙汰も得なかつた。ところが七月になつて彼は突然ストック

ホルムにやつて来て、再び急に去つてしまつた。その時は知られるのを欲しない様子であつた。

七月二十四日のところに彼女は次のやうに書いてゐた。今晚も亦いつもあの人の前で感ずるやうな妙な氣持に襲れた。私は私の後で二三の人々がフランス語で語つてゐるのを聞いた。その時私はあの人の聲を聞き分ける事が出来た。私はそつと振り向いて、顔の赧くなるのを覺えた。黒い一對の眼がちつと私の方を向いてゐるではないか。それは正しくあの人の眼であつたが、不思議にも挨拶しようとしなかつた。どういふわけであらうか。

これが即ち彼女がその不思議な求婚者を見た最後であるらしかつた。と言ふのはそれ以後日記の中に彼の名は書かれてゐなかつたからである。この外に肝要なことはベルクハイム莊に起つた出来事とフォン・ヘーデン大佐の不思議な態度とであつた。

八月一日のところに次のやうに書かれてあつた。午前二時、私は妙な音にびつくりして眼覺めた。窓から外を眺めると自動車は歸つて来たのである。ジョンはそれを自動車置場へ運んだ。ジョンはただ一人であつた。

八月八日。眞夜中に矢張り同じことが起つた。丁度寢臺へ上らうとする時、自動車の音がしたので外を見ると、自動車は厩から横道に出て街の方へ走り去つた。ジョンの外に女の人が一人乗つてゐた。父もそれに氣附いたらしく多分何事が出来たのであるかと見に行つたのであらう。暫らく過ぎてから父が階段を上つて部屋に這入るのを聞いた。何時父が出懸けて行つたのであるかを私は知らな

つた。

八月九日。今日父に向つてこのことを話すと父は夢でも見たのだらうと言つた。父は近頃妙に怒りつぽくなつてゐたから餘り深入りして話すことは出来なかつた。恐しい世界戦争の爲に神経を痛めた結果であらうか。

八月十二日。どうも父の様子がをかしい。日毎に父の顔は益々曇つて行くやうである。

八月十五日。午前三時に急に眼覺めてしまった。何の爲に眼が覺めたかは分らないが、容易に寝つくことは出来なかつた。突然私は下の方で妙な音がするのを聞いた。それは鼠が物をかじるやうな小さな音でその外に拔足で歩くやうな音がしたので私はぞつとした。父が市街のある人から招待を受けて外泊し、私一人であつたから何とも言へぬいやな氣持がした。たうとう私はたまらなくなつて何事が起つたのか下へ行つて見ようと思つた。ところが私の部屋の扉は外から錠が下りてゐて、まるで私は袋の鼠同様であつた。部屋には女中を呼び電鈴もつけてなかつたから、どうしようもなかつた。私は驚き恐れて、床の上に横つたまゝ耳をすました。漸く五時頃になつて音は止んだ。實に恐しい夜であつた。

朝になつて私の扉に廣い板の置いてあるのを見つけた。どうして持つて來たのか分らないが廊下を横切つて私の部屋の前に置かれてあつた。誰がした事であらうか。床に就いた時には確かに無かつた筈である。

この下へカリングは特有な強い筆跡で次のやうに書いた。「走り戸に仕掛が施されたのはこの時である。」

八月十八日。父はまだ市街から歸つて來ない。夜分に父が歸らないと私は心配でならない。今晚もやはり眠りつけないので私は十二時に下へ下りて行つて父の書齋から本を持つて來ようとした。すると父の部屋には錠が下りてゐた。知らぬ間に父が歸つたのかも知れないと思つて幾度も叩いて見たけれど何の返事もなく扉は錠を下されたまゝであつた。私は再び妙な氣持に襲れた。父は市街へ出懸ける前に戸に錠を下したのであらうか。或は何か差迫つた用事をしなくてはならぬので中にも返事をしなかつたのであらうか。一時半頃私は父が階段を上つて來る音を聞いた。父は確かに床へ這入つた。暫らくすると又もや自動車の音が聞えて來たが、餘りに疲れてゐたのでそれが父であるか、どうかを見に出懸ける勇氣がなかつた。

この下へ探偵は又もや次のやうに書いた。「若し彼女が閉された走り戸の前に待つてゐたならば蓄音器を電話に變へた男が忍び出すのを見たであらう。」

八月十九日。父はほんたうにどうかしてゐる。殊に今日は機嫌が悪く、疲れて見えた。昨夜は十一時半に來たと言つたが、それから一時半頃まで、仕事をして居たのに拘はらず、私のたづねたのを知らないと言ふのはどういふわけであらうか。私はかなりひどく叩いたのである。机にもたれて眠つて

ゐたのであらうか。然し不思議なことに父は戸に錠を下さなかつたと言つた。私が確かに錠が下してありましたよと言つたら、父は冗談だとばかり思つてゐて、多分戸が重いから開かなかつたのだらうと言つた。私だつて戸を開ける位の力はあるのに。

カリングは又その下へ次のやうに書いた。

「大佐がこの夜何處にゐたかは一時半に自動車で市街へ出懸けた金髪の美人が知つてゐる。」

それ以後の日記は彼女の戀愛事件に關係したものであつた。トルハルト中尉からある舞踏會で心を打明けられて彼女は承諾の旨を答へた。それからまた例の夜分の奇妙な物音や、夜分の自動車運轉が書かれてあつて彼女がそのことに就いて、父や下男に話して見ても、いつも二人はそんなことはないと言へた。

その次に大佐がトルハルト中尉に對する態度を變へた事が書かれてあつた。ラーニユヒルドは大佐が中尉の名を聞いてさへ、顔色を變へるやうになつたことを、非常に悲しんでゐる。

最後にカリングは昨日、即ち九月六日の場所へ來た。彼女は父が中尉の求婚を拒絶した時の苦しみから、下男殺しの一件までを殘らず書き記した。

十龍の王の手紙はそのまゝ、日記の中に挟まれてあつた。カリングはそれを物珍らしさうに調べた。

「フォン・ヘーデン嬢がこれに餘り重きを置いてないのは不思議だ。これは自分に取つては新しい手掛かりを得る立派な書面だ。」と彼は呟いた。

ラーニユヒルドは過去二十四時間の間に三度日記を書いて居る。最初は父が午後二時頃に街へ出懸けた直ぐ後である。即ち彼女は客室に坐つてそれを書いたのである。彼女はそこに七時半までゐてそれから日記をしまひに二階の部屋に上り、中尉を庭に迎へたのである。それ故盗人は七時半以前には大佐の部屋へ這入ることが出来なかつたわけである。

第二回目にラーニユヒルドが日記をつけたのは大佐が窃盗を發見して寢室へ上つてからである。それは十時二十分過ぎでその時彼女はカリングに語つた如く、約半時間も部屋にゐたのである。

カリングは此處で又次のやうに手帳へ書き込んだ。「彼女は餘り熱心に日記をつけてゐたので大佐が下へ下りて行つて暫らくして又歸つて來たのに氣がつかなかつたのである。と言ふのは大佐がその半時間の間に下男部屋へ來たことは確かであつたからである。靴が汚れてゐたことと下男部屋に靴跡のあつたことは動かす可からざる證據であつて、その他の時間に人に氣附かれぬやうに下男部屋へ行くことは出来なかつたわけである。女中は聞き分けることが出来なかつたけれどジョンの部屋で喧嘩してゐたのは確かに大佐の聲であつたのだ。」

カリングはなほ書き續けた。「フォン・ヘーデン嬢が二階へ上つた直ぐ後で書類が再び元の場所へ返され、盗人は早く逃れ出たのである。」

この盗人がはたして下男であつたであらうか。再び書類をかへしに行つたのはどういふわけであらうか。

ジョンが盗人であると言ふことは種々の點から想像された。怪しまずに自由に大佐の部屋に出入りし得る者はジョンより外になかった。大佐の部屋の模様を逐一知つて、竊盗を行ふ爲の種々の準備を行ひ得る者はジョンより他にないわけである。

然しそれならば何故書類が戻つて来たか。突然カリングは小聲で口笛を吹き始めた。事件は釋然として氷解したからである。

下男は言ふまでもなく大佐が不意に歸つて来た直ぐ前、家の中に誰も居なかつた時に、書類を盗み出したのである。突然大佐が歸つて来た爲、彼は盗んだ書類を持出して逃げる事が出来なかつた。と言ふのは大佐が寢室から出て来るまで、ラーニユヒルドが寢室にゐたからである。

盗人は多分書類を再び返さうとは思はず、恐らく筆筒の後に隠れてゐたのに違ひなかつた。ところが大佐が盗まれた事を見つけて大騒動を起したので彼は書類を手にしたまゝ、逃げ場を失つて小さくなつてゐたに違ひない。

然したうとう大佐は寢室に上り、ラーニユヒルドも亦客室を去つた。

そこで多分下男は今が絶好の時機であると思つて、書類を持つて逃げ出さうとする。大佐は再び二階から下りて来たのである。そして彼が窓から外を眺めて見ると大佐は下男部屋の方へ歩いて行くのであつた。

これでは大變だと思つて彼は机の上に置いてあつた手文庫の中へ再びその書類を返したのである。

それから彼は音もたてずに忍び出して下男部屋に急ぎ、暫らくして口論を始めてアンナに聞かれたのである。アンナが下男の聲だけ聞き分けて大佐の聲を聞き分け得なかつたのは多分大佐が餘りに怒つてゐた爲に別人のやうな聲を出したからであらう。

カリングは此處まで考へて不圖氣が附いた。即ち彼はトルハルド中尉のことを全く忘れてゐたのである。

中尉はやはり大佐が歸つて来る直ぐ前に大佐の部屋に忍び込んだに違ひない。とすれば何故中尉は盗人のする事を遮ぎらなかつたであらうか。

カリングはこの謎について深く考へて居る餘裕がなかつた。晩に充分活動する爲には相當の休養をしなければならぬ。それ故彼は朝になつて中尉の事件をよく考へることにして日記を閉ぢ、床へ這入らうと思つた。

とその時、電話のベルが鳴つたので受話器を取上げて見ると先方は大佐その人であつた。

「若し、どうしたのです。何か變つたことがありますか。」とカリングはたづねた。

「さうです。先刻既の焼け落ちた壁の中から誰とも分らぬ男の燃えた屍體が出て来たのです。」

「誰だか分りませんか。」
「ちつとも分りません。」
「死骸は建物の中にあつたのですか。」

「いゝえ。横の方の垣根の外側にありました。屋根と一緒に板壁が死骸の上に落ちかゝつて来たので、すつかり燃やされてしまつたのです。」

「確か垣根は既から三尺位しか離れてゐませんでした。板壁は垣根の外まで落ちましたか。」

「さうです。既に添つた所だけ、垣根も燃やしました。」

「で、死骸は垣根と既の間にあつたのですな。」

「さうです。火が消えてから、既の燃えさしを片附けた時に建物の根元に死骸があつたのです。」

「それはをかしいですなあ。」

「何故ですか。焼け死んだに違ひないぢやありませんか。」

「それはさうです。けれど氣でも違つてゐなければそんな所へ行く筈はないぢやありませんか。確かにそれは氣違ひですよ。」

「さうかも知れませんが。けれどどうしたらいいですか。」

「誰だかお分かりになりませんか。消防を手傳つた人ではないでせうか。」

「さうかと思つて調べましたが、消防に來た人は皆揃つて居ます。」

「ふむ。頗る奇妙ですなあ。」とカリングは言つた。と、突然、放火した者が放火者の常として現場の光景が見たくてたまらず、餘りに傍へ寄つて觀面の罰を受けたのではないかといふ考へが彼の心に閃めいた。「いけませんなあ。警察が干渉に來るに違ひありません。」「警察？ 知つての通り、わし

は警察の干渉を欲しません。」

「けれど已むを得ませんよ。どうせ火事のことと訊問されねばなりません。無論書類の一件は出さずにすみます。」

大佐はそれを絶対に欲しない旨を呟いたが、カリングはそれを遮つて成り行きに任せねばならぬ旨を懇々と説明した。

「たゞ警察が來たら下男のみなくなつた事だけを匂はせておいて下さい。」とカリングは言つた。「多分焼け死んだのかも知れないと言つて下さい。さうすれば警察は勝手な解釋を下しませうから。」

「そりやいゝ思ひ附きです。」と大佐は力をこめて言つた。「けれど娘や女中がしやべつてしまふかも知れませんが。」

「それはよく口止めをしておいて下さい。明日の朝早く死體を片附けさせませう。今のところは別に何をするとはいふ必要もありません。たゞ死體を盗まれぬやう要心をして下さい。」

電話を切つから探偵は今聞いた話をちつと考へた。

「この事件は今まで行はれたどの犯罪よりも狡猾な行き方だ。一と、彼は呟いた。」

第十七章 不思議な失踪

「先生。」とローランドは翌朝カリングに向つて言つた。「何故黙つてゐて何もかも話して下さらんの

ですか。私に分つた事はこの事件が殺人や放火をも厭はぬ間諜達の仕事で、大佐がそれに不思議な役割を勤めてゐると言ふ事です。それ以上の事を少しも聞かして下さらないではありませんか。」大佐が不思議な役割を勤めて居るとはどうして分つたかね。」と熟睡後元氣を恢復したカリングが言つた。

「だつてあなたも御承知の通り大佐はこつそりと聖壇の蠟燭を消しに來たではありませんか。火事の危険を大佐は豫め知つて居たに違ひありません。ことによるとあの爆弾をしかけたのは大佐かも知れません。」

カリングは暫らく考へて言つた。

「さうだ、君はもうこの事件をよく知つてゐるから、何もかも聞せて上げる事にしよう。けれど決して人にしやべつてはいけないよ。」

かう言つて彼はトルハルト中尉が大佐に拒絶された時から既が燃えた時までの委細を物語つた。然し間諜達の盗まうとしたのは如何なる書類であるかと言ふ事は言はずに、たゞ彼等の計畫が失敗に終つて、價値のない書類を盗んで行つたに過ぎない事を告げた。ラーニユヒルドの日記の内容についても一言も語らなかつた。

一生懸命になつて話を聞いてゐたローランドは聞き終つてかう叫んだ。

「實に込み入つた事件ですな。解決が出來さうですか。」

「まあやつて見なければ分らんよ。それに僕はマリアといふ女の出した電報がフディングの郵便局で出したのではないと言ふ事を確かめたのだ。つまり電信局の手を経て出したものではないのだ。」

「すると電報配達夫は一味の者が變装したのでせうか。」

「無論さうだよ。女中に聞いた時に直ぐさう思つたよ。青い眼をして縮れた黒い髪をしてゐたといふではないか。それを君はどう思ふね。」

「無論その男は實際の金髪だつたのでせう。」

「その電報配達夫が女で金髪だつたと言へば、君にも真相がはつきり分るだらう。」

ローランドは指をばちりと鳴らした。

「ではその電報配達夫はあなたのおつしやつた例の金髪美人ですか。」

「偉い。」とカリングは叫んだ。「多分それが真相であらう。兎に角これからフディングに行つてマリアと言ふ女を探偵して來よう。恐らくもう影を隠して、後の祭りかも知れない。」

「大佐は中々のやり手ですねえ。」とローランドは賞讃の口調を以て言つた。「恐らく大佐がああの部屋をこしらへたのでせう。」

「いや〜。」とカリングは笑つて言つた。「さうとは思はれぬけれど、兎に角、大佐の性格は研究する價値があるよ。君は下男の死に大佐がどう言ふ關係を持つてゐると思ふね?」

「さうですなあ。」とローランドは暫らく考へてから言つた。「僕は下男を殺しただらうと思ひ

ます。きつと怒つた擧句にやつつけたものでせう。」

「ではその殺したわけは何かね？」

「下男が間諜だと言ふ事を知つたか、或ひは大佐の女にからかふのを見たからでせう。」

「成程。」とカリングは言つた。「さう考へられぬ事もない。下男は確かに土龍の一人であるし、恐らく又盗みに這入つた男に違ひないからねえ。それに大佐の内證事の取り持ちをしてゐて、大佐の爲にならぬ秘密を知つてゐたらうから、殺人の動機としては充分だ。それに大佐の性急な性質も考へねばならない。怒る時には前後を忘れてしまふ人だ。だからかつと逆上せて殺すこと位はやり兼ねはしなからう。それにあの時大佐は下男の死んだのを表面では悲しんで居りながら心の中では喜んでゐたやうだつたからねえ。」

「當然のことですなあ。」

「それで君は女中がジ・ンの殺されたのを見た時、マスクを掛けた男が女中を捕へた事をなんと説明するかね。」

「その男は無論土龍の一人でせう。土龍はいつも黒いマスクを掛けてゐるやうでしたから。女中を喰止めたのは死骸を巧く運ぶ心算でやつたこととせう。警察に分れば自然一味の者が逮捕されるかも知れませんからそれを恐れたのでせう。」

「然し君は死骸を見つつけられる前に運んで了つた方が得策だとは思はぬかね。僕が本宅で検査をして

ゐる間にその時間は充分あつたのだ。だから死骸を運ぶ前にわざ／＼殺されたといふ事を見せる心算だつたのだ。マスクを掛けた男は下男を呼びに誰か来るのを待ち受けてゐたのだ。見たまへ。十時半頃に下してあつた日除けがその後ろに上げてあつたわけは死骸を外から見つけることが出来るやうに企んだのだよ。」

「成程。さうですなあ。」とローランドは力をこめて言つた。「女中が見つけければ大騒ぎになつて皆が

駈け出すに違ひないからその後で書類を盗まうと企んだのでせう。實に巧く企んだものですねえ。」

「さうだよ。けれど僕は死骸を見せたのはもつと／＼深いわけがあると思ふのだ。人々を誘ひ出すの

は外に幾らも方法がある。例へばもつと早く厩に火をつければよいわけだ。また警察に分らぬやうに

する心算ならば死骸をあゝの祕密室の中へ入れて焼いてしまへば雑作もない事だ。」

この時使者が手紙を持つて來たので二人は話を止めた。それは燃えた死骸を検査した醫者からの報

告であつた。それには次のやうに書かれてあつた。

「男の死因は火事ではありません。死んでから二日を経過して居ります。死因は肝臓癌です。」

ローランドはびつくりして探偵の顔を見上げた。

「一體全體なんといふことです。」と彼は叫んだ。

「なんでもない。僕の思つた通りだと言ふことだよ。」と探偵は得意になつて言つた。「僕は醫者に外

「それにしても僕にはなんのことも分かりません。」

「だって君。普通の人間ならばわざわざ燃えて居る壁の傍へは匂って行くわけがないぢやないか。」

「それはさうですけど、何か取り出しに行つたのぢやないでせうか。」

「あの側には窓も扉もありやしないよ。燃えてゐる壁からは何を出すことも出来ないぢやないか。」

「すると死體が其處においてあつたとおつしやるのですか。」

「さうだよ。大佐から電話が掛つた時は、火を放つた男だと思つたが、よく考へて見たらさうではないと分つたよ。して見ると死骸は一つ多過ぎるわけだよ。」

ローランドは分らなさうな顔をして探偵を見つめた。

「この死骸の発見であなたの説は變りはしませんか。」

「變るところか愈々都合がよくなつて來たよ。しかし今はゆつくりしやべつて居る時期ではない。これから僕はトルハルト中尉を訪ねなければならん。その後でフディングの方へ廻らう。一緒に來ないかね。」

ローランドは喜んで同意し、直様自動車の支度をした。途中でカリングはローランドに焼けた帽子の残りを渡して軍人用の品物を賣る店へ寄つて、トルハルト中尉の物だかをたづねて來るやうに命令した。そこでローランドは探偵を中尉の家の前で下して、自分は今の用事を果しに出懸けた。

中尉の家でカリングは意外な事を聞き出した。宿の主婦は中尉が昨晚家に歸つて來ず、多分陸軍の

用事でわきへ出かけたのだらうと言つた。何處に中尉が居るかは知らないと言つた。

「いつも七時の出勤ですから、中尉は直接泊つた先から軍隊へ行かれたに違ひありません。然し昨晩

は平服で出かけられたから、どういふ事情があつたかは分かりません。」と彼女は語つた。

話最中に表のベルが鳴つたので、主婦は出て行つてやがて配達夫から一本の手紙を渡されて歸つて來た。

「中尉さんからのお手紙です。」と彼女は物珍らしさうな顔付をして言つた。封筒の中には更に一本の手紙があつて、中尉の手紙には簡單に同封の手紙を投函して呉れと書いてあつた。

カリングはその同封の手紙を読んではつと思つた。それには、
デメトリス事務所、郵便局私書函九一三號、コーベンハーゲン

と書かれてあつた。
トルハルト中尉は即ち「土龍」の本部に手紙を出すのである。これが果して本當の事であらうか。

「配達夫はまだあますか。」と彼は直ちにたづねた。

「返事は要らないと言つて直ぐ歸つて行きました。」

カリングは主婦に宛てた中尉の手紙を丁寧に見た。それには次の文句が書かれてあつた。
「プリムソンさん。恐れ入りますが同封の手紙を投函して下さい。宜しく願ひます。」

トルハルト」

と書かれてあつた。

「これは確かに中尉の手蹟ですか。」とカリングはたづねた。

「さうです。」

「他に中尉の書かれたものを持って居られませんか。」

「ありません。けれども私に手紙を呉れる人は中尉さんの外にはありません。けれどもこの中の封筒の字は違つて居ります。」

いかにも主婦の言つた通りである。デンマークの宛名は確かに偽筆が使つてあつて、まるで左手で書いたものらしかつた。

ブリムソン夫人が反對したにも拘はらず、カリングはいきなりその封筒を開いた。するとその中には同じ偽筆で書かれた暗號の手紙が這入つて居た。よく讀んで見るとその内容はわけもなく分つた。

驚いたことに本部宛のその手紙は瑞典に於ける國民兵召集及びその他の世界戦争の爲に軍事當局が取つた二三の國防に關することであつた。

「こりやをかしい。」とカリングは呟いて何もかもポケットの中へ入れた。それから彼は太佐の部屋で發見した汚ないカフス釦を、主婦に示して中尉のであるかどうかをたづねた。

「時々それを付けておるでになります。」と彼女は答へた。

「昨晚もこれを付けて出られましたかね。」

「どうですか見て参りませう。」かう言つて彼女はカリングと共に中尉の寢室へ行つた。

「さうです昨晚付けて出られました。」と彼女は化粧臺にある澤山のカフス釦を眺めて言つた。「此處にないですからそれに違ひありません。」

それからカリングは中尉の平常靴を彼女に頼んで見せて貰つた。たゞ一足の靴を見ただけでベルグハイム莊の靴跡が中尉のであることが分つた。それゆゑ太佐の金庫の後に隠れて後に逃げ出したのはトルハルト中尉だと分つた。

して見ると一體どういふ意味があるであらうか。陸軍士官たる者があのやうな舉動をするとはなんと説明すべきであらうか。

そこへローランドが用事を果して歸つて來た。例の帽子は四週間前に確かにトルハルト中尉に賣つたのであると先方の人は告げた。それ故中尉に對する證據は動かす可からざるものとなつた。

「先生、なんかまたぢつとお考へになつていらつしやりますが、別の事件が持上つたのですか。」とローランドは物珍らしさうにたづねた。

「い、や別に。たゞ昨晚考へた結論を益々確かめただけだ。」
それからカリングは軍隊へ電話を掛けて、トルハルト中尉に出て貰つて呉れと言ふと、

「中尉はまだおあでになりません、どこか悪いのでせう」との答であつた。
「何處に一體隠れて居るのでせう。」とローランドが答へた。「中尉も矢張り太佐と同じやうな不可解

な人物ですな。」

「どうしてかね。君はよく事情を知つてゐるぢやないか。中尉は昨晚大佐の留守中に大佐の家に來てお嬢さんと二人で大佐の傲慢な態度を話し合ひ、復讐すると言ふ言葉を放つたではないか、午前に中尉は大佐が秘密書類を取扱つて居るのを見たのだ。そして夕方大佐が不意に歸つて來た時身を隠す爲に家の中へ走り込んだのだ。丁度その時は秘密書類が盗まれやうとしてゐる時か、たつた今盗まれたばかりの時なのだ。」

盗人が中尉の中へ入れてやり中尉は金庫の後へ隠れたのだ。そして其處に暫らくの間隠れてゐて多分僕が部屋を綿密に調べにかゝる事を覺つてみんなの前を逃げ出したのだ。その時中尉は土龍達が掛けてゐたマスクと同じのを顔に掛けてゐたのだ。

つまり中尉は大佐が歸つて來てからずつとあの部屋に隠れてゐたのだ。だから窃盗が発見された事も盗まれた書類が返されて、盗人が逃げ出した事も中尉はよく見てゐたわけだ。

これだけは間違ひのない事實と認めなければならぬ。

その後僕は下男部屋のストーヴの中に燃えさしの帽子を見つけたのだ。その帽子は君が調べて呉れた通り中尉の物であつて中尉が昨晚大佐の邸へ來た時に被つてゐたのだ。なほ又中尉は露西亞語が非常に巧い。そして僕は女中が下男部屋で聞いた言葉は確かに露西亞語だつたと思ふのだ。」

「すると中尉も下男部屋に居たのでせうか。」

「いや。さうではない。中尉はあの時まだ金庫の後に隠れてゐたから。」

「實に不思議な事件ですなあ。」

「さうだよ。殊に中尉が身を隠してしまつてコーベンハーゲンの間諜の本部へ我が國の軍事關係を報告するのは尙更不思議ではないか。」

「多分中尉も……」と言ひかけてローランドはそのまゝ黙つて頭を掻いた。

「土龍の一人だと言ふのかね。」

「はあ。けれど眞逆瑞典の士官が……」

「無論僕も初めはさう思つたよ。けれど先入見は避けねばならない。この事件を解決するのは例ひ考へられない事でも考へて見なければならぬ。」

君も知つてのとほり大佐が下男殺しとどういふ關係のあるかを探らうとした時、全く軍人であるといふ考へを捨て、かゝつたよ。だから中尉と秘密書類の盗まれたこと、の關係を探るにも同じ態度を取らねばならぬ。」

「尤もです。中尉は殊によると大罪人かも知れませんが。」とローランドが言つた。

「兎に角中尉は非常な不利益な位置にあるよ。悪い證據が多過ぎるほど集まつて居る。」

「と言ひますと？」とローランドはたづねた。

「今まででも充分嫌疑がかゝるのに、このコーベンハーゲン宛の手紙はまったく餘計なものだよ。殊

に手紙を宿のお内儀さんに渡すのは愚の話ぢやないか。何故自分で投函しなかつたらうか。」

「それは何か故障があつたからでせう。」

「どうして、自分の家へ使ひが出せる位ならばその使ひに直接投函させたらいいぢやないか。なほ又一晚中家を空けておいて宿のお内儀さんに手紙を出すなら、家を開けた理由を書いてよこしたらよいぢやないか。」

「さう言へばさうですなえ。」

「さう言へばどころか確かにさうだよ。」

「と言ふとあなたは中尉が自分で書いたのぢやないとおつしやるのですか。」

「勿論さ。お内儀さんは確かに中尉の手蹟だと言はれるけれど上手に真似ればわけないからねえ。つまりこの手紙とコンベンハーゲンとの手紙とは中尉を罪に落す手段に過ぎない。多分僕が此處へ来るだらうと言ふ事を察し僕の手へ手紙が這入るやうに送つて寄越したのだよ。」

「では土龍がしたこととせうか。」

「土龍の王と名告つて居る首領は確かに中尉を破滅させようと企んだのだ。運命と言ふものは氣まぐれなもので中尉とその首領とを同じ女の戀敵としたのだ。」

「分りました。土龍はたゞトルハルト中尉を捕へて今何處かに押し込めて居るのでせう。それで中尉の行方が分らないのです。」

カリングは肩をすくめて言つた。

「君は想像の働かせやうが少いよ。中尉が今土龍達に捕へられて居るならば、きつとこの手紙に留守の申譯が書いてあるわけだ。確かに土龍達は中尉行方不明なことは知つてゐない。手紙は中尉が軍隊に居る時間を見計つて出されたのだ。」

「けれどさうすると中尉の行方不明なわけが分らんではありませんか。」

「いかにもそれが一番難しい點だ。若し中尉が外國多分アメリカへでも行つたとしても限りはとも解釋が出来ない。けれど外國へ行つたと言ふことはどうしても考へられない。」

「何故ですか。トロントエムには、少しのお金さへ出せば旅行者着物といふ物が買へるところがあると言ふではありませんか。その着物のポケットには偽造した身許証明書や一件の書類が這入つてゐて忽ち他の人に早變りする事が出来ると言ふではありませんか。」

「それは僕も知つて居る。あれを政府が止めさせないのは實際不思議だよ。殊にかういふ非常な時節には益々商賣が繁昌するからね。」

けれどトルハルト中尉が逃げ出さうとしたなどと言ふことはどうしても考へられない。直ぐ捕まることは確かだし、中尉もそれを知らないわけはない。だから中尉の行方が分らんのは別に原因があるよ。殊に軍隊まで、缺勤して居ると言ふのは餘程、重要な原因があるに違ひない。

土龍には捕へられてゐないとしても、兎に角、下宿や聯隊へ報告することも出来ぬ破目に陥つて居

るに違ひない。さもなくば何方かへは報告がある筈だ。

「さあそこで中尉は今何處に居るか。又どういふ理由で姿を隠して居るのか。」

「ローランドはその謎を考へて見たが解決出来なかつた。」

「どうも難しいですねえ。」と彼は遂に言った。「一體昨晚中尉はあんな時に逃げ出さないで何故もつと早く大佐の部屋から逃げ出さなかつたのでせうか。さうすれば盗人まで逐ひ出すことが出来たではありませんか。」

「それはかうだよ。」とカリングはきつぱり言った。「中尉はそこに居なければならぬやうにされてゐてそれでもつと早く逃げ出すことが出来なかつたのだよ。」

「あなければならぬと言ふのはをかしいではありませんか。あの狭い處に押し込められていつ何時見つけられるか知れないぢやありませんか。」

「そこだよ。それで自分勝手に居たのではないと言ふことが分るよ。どんな大膽な盗人でもあんなことはしないからねえ。つまり中尉は無理に押し込められてゐたのだ。これは決して間違ひないことと思ふ。」

カリングが中尉の下宿を去らうとしかけたとき、主婦は一冊の本と二三枚の紙を持つて這入つて来た。

「すっかり忘れて居りました。」と彼の女は言った。「トルハルトさんのお書きになつたものは此處に

御座います。以前に私に下さつた手紙と軍隊用の帳面とで御座います。」

カリングは先づその手紙を読んだ。それは前の手紙と同じもので同封の手紙を投函して呉れといふ意味の事が書かれてあつた。それには矢張り日附が無かつた。

「するとあなたは以前にもこのデンマーク宛の手紙を出しに行かれたのですか。」と探偵は顔を曇らしてたづねた。

主婦はこの質問を聞いて少しく困つたやうであつた。「いえ〜。」と彼女はそれから熱心に言った。以前の手紙は若い女の方へ宛てたのでした、確かあの……」

「分つてゐますよ。フォン・ヘーデン嬢へ宛てたのですか。」

「どうしてまあ、よく御存じですねえ。」と主婦は驚いて言った。「トルハルトさんが行軍に行かれたり何かして街におゐでならぬ時に送りましたよ。」

それからカリングは軍隊の事の書いた帳面を熱心に調べた。彼はその筆蹟を主婦の持つて来た三本の手紙と比較した。熱心に調べれば調べるほど彼の顔は段々曇つて来た。調べ終つた時、彼の額には深い皺が刻まれてゐた。

「僕は間違つた。」と彼は顔を曇らせて言った。「疑ひもなくこの手紙は本物だ。確かに中尉の書いたものだ。紙も封筒も全く同じだ。」